ファティマ大事件特集

UFO contactee

SINCE 1961
GAP-JAPAN NEWSLETTER

UFO/超能力/宇宙哲学

SUMMER
1991

113

ファティマの大円盤出現事件

奇跡のペンダントと転生の法則
ティモシー・グッドのアダムスキー体験
オーラ透視能力開発法
江戸川区上空の巨大UFO
クリスマス前のUFO出現

UFO-宇宙からの完全な証拠

UFO contactee No.113 *Hachiro Kubota, Editor/Publisher, GAP-Japan*

CONTENTS *〈Dedicated to Space Brothers and Cosmic Consciousness〉*

〈巻頭言〉 知識と無知 1
ファティマの大円盤出現事件 久保田八郎 2
奇跡のペンダントと転生の法則 ハンス・ピーターセン 10
ティモシー・グッドのアダムスキー体験 中村省三 16
オーラ透視力開発法 遠藤昭則 22
GAP短信 28
科学ーSCIENCE 29
壁画の奇跡 永山稔恭 32
江戸川区上空の巨大UFO 北館博子 33
クリスマス前のUFO出現 伊藤芳和 34
私のUFO目撃体験 平井沙織 36
〈予告〉『アメリカ・メキシコ宇宙ロードの旅』 37
UFOー宇宙からの完全な証拠〈最終回〉 ダニエル・ロス 38
〈予告〉全国ネットワークUFO観測会 44
〈投稿欄〉ユーコン広場 45
〈予告〉第2回山形・仙台合同支部大会/第8回旭川・札幌合同支部大会 47
本誌バックナンバー掲載記事目録 48
英文版ユーコンNo.7／編集後記 49
〈広告〉新アダムスキー全集 50
日本GAP全国月例研究会案内 52

◀金星人からジョージ・アダムスキーに伝えられた金星のシンボルマーク。2個の図形の内、左側は宇宙の父性原理(陽)、右側は母性原理(陰)を意味する。円は宇宙をあらわしている。

GAPについて

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がUFOの真相について“知る”機会を与えられるべきであるという見地に基づいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて“コズミック・パワー”の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた“生命の科学”の研究と理解を通じて体得できます。

日本GAPの目的はUFOとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群には偉大な発達をとげた人類が居住しているが、米ソ等の大国政府はこの真相を隠している。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の精神の向上と地球の輝かしい未来を築くために不可欠のものである。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

表紙写真

1968年3月21日、米ユタ州カナブ付近でフリッツ・ヴァン・ネスト氏が撮影したUFO。典型的なアダムスキー型円盤である。

〈巻頭言〉

知識と無知

湾岸戦争はひとまず終結した。しかしアラブ世界とイスラエル問題をめぐるトラブルの絶え間はなく、今後事態がどのように展開するか予断を許さない。明確なのは、今後絶対に戦争は発生することなく、これで恒久的な平和が到来するという保証はないということである。まだ戦争はあるだろう。

しかしキューバ問題であわや第三次大戦になりかかったとき、これを防止したのはスペースピープルの集団であったと言われている。全面核戦争の脅威を排除して地球の安全確保に挺身している別な惑星から来た訪問者達の偉大な恩恵を知る人は少ない。

無理もない。この太陽系は惑星が九個しかなく、しかも知的生命が存在する惑星は地球だけであるという既成概念で地球人はがんじがらめに縛られており、表現はわるいが盲目の状態にあるからである。ここにおいて知識という問題が重要になってくる。「知識と無知との間には、科学という橋が架かり得ないほどの裂け目がある」とアメリカの哲人ヘンリー・ソーローは言っている。

ところが人間は自分の価値観に照らして好ましくない事象に関しては知識を得ようという努力をしない。アダムスキー問題にしてしかり。これを軽侮し揶揄したがる人間に限ってアダムスキー関係の文献の読破どころか頭から無視する。これでは知識の得ようはない。反論するのならば、まずアメリカへ足を伸ばしてアダムスキー関係者に片っ端から会い、文献を渉猟して、徹底的に検証した上で反論するべきだろう。

編者が多年に渡る海外の取材調査で判明したのは、アダムスキーの著書の記述は彼の凄まじい経験のうち、ほんの一部分のみを洩らしただけで、重要極まりない事実の大部分は隠されていたという実相である。そしてあらゆるUFO問題は結局アダムスキーに帰着するという中村省三氏の結論こそ、まさに正鵠を射たものと思うのである。（本号『ティモシー・グッドのアダムスキー体験』を参照されたい）

なんとなれば、化石燃料による文明が次第に行き詰まりの様相を呈する方向に向かっている現在、アダムスキーが伝えた別な惑星の宇宙船に応用されている電磁エネルギーに着目して、画期的なエネルギー革命を遂行しようという動きが少数の国々で出てきているからだ。アメリカではアダムスキーを支持していた某大統領の時代にこの立案がなされていたと伝えられている。

アダムスキーは地球に対する起死回生の物凄い知識を伝えていたのである。実は日本政府の一部門でアダムスキーの著作を研究して代替エネルギーの開発に着手しようという動きがある。詳細は差し控えるが、これは来世紀の主要課題になるだろう。人間はここで目覚めて創造主の最高のギフトである電磁エネルギーという素晴らしい宝物の発掘に取り組むべき時代に入っているのだ。

地球外惑星群の実態についても次第に真実が伝播するようになるだろう。昨年秋以来、金星探査機マゼランが伝える金星の様相も従来の憶測を越えた説明のつかない不可思議な地形その他を報告し初めている。たぶんNASAはとっくの昔に真相を把握しているだろうし、まだ隠蔽部分がかなり存在すると思われるにしても、「隠されている事で洩らされないものはない」という法則によって早晩、金星その他の惑星の驚異的な実態が地球人に知られるようになるだろう。

編者は確信するが、あと四〇年もすれば地球は全くの宇宙時代に突入し、全地球的規模で別な惑星の大文明の仲間入りが実現するだろう。愚かな戦争や病魔は消滅し、科学と精神の両面に渡って高次元な進歩が見られるだろう。それまでに多少の戦争は散発するかもしれないが、それは陣痛の苦しみであり、自壊作用である。

我々は無知であってはならない。高度な知識をもたらす天使に対して、それと気づかずに、愚昧かつ低次元な価値観でもって無視し去るような鈍感な人間に堕してはならない。他人や他のグループを攻撃することしか能のない蛇蝎のような人間によって世の中が改善され世界が向上することはあり得ないのだ。この世界の進歩のために素晴らしい研究活動を行なっている卓越した人々に期待して明るい希望のみを持ちたいものである。

新アダムスキー全集は結局全一〇巻で完結することになった。この膨大な文献の中に盛り込まれているものは、すべて科学と精神の両分野に及ぶ高度な情報である。これに着目して検証し、生活に応用する時代はいずれ到来する。前述のごとく既にその兆しはある。私達はその先駆的役割を果たしたというプライドを極力抑制しながら今後も一層の活動を続行したい。それには日本GAP全会員が一丸となって調和し協力することが望ましい。

以上でアダムスキーの伝えたUFO問題なるものは地球の未来を左右するほどの重要なテーマを含むものであることが理解できることと思う。彼を如何に誹謗しようと、現実の趨勢は確実に彼が示唆した方向に進展しているのだ。特に科学の分野で顕著である。アダムスキーが正しかったことは自明の理である。

（久）

A Great Flying Disk over Fatima
by Hachiro Kubota

ファティマの大円盤出現事件

★久保田八郎（日本GAP会長）

今を去る七四年前の一九一七年（大正六年）にポルトガルの寒村ファティマで世にも名高い大事件が発生した。聖母マリアの幻の連続出現を同年五月一三日から一〇月一三日まで毎月三名の牧童が目撃したのだが、最後の日には噂を聞いて駆けつけた七万人の大群集が見上げる空中に、燦然と輝く巨大な円盤が飛行するという凄まじい光景が展開して聖母空艇の出現とされ、カトリック史上、驚異の奇跡として三名の牧童は不滅の名を残すことになったのである。

この事件については九年前に実施した日本GAP海外研修旅行『エジプト・ヨーロッパの旅』でポルトガル・ファティマを訪問した際の紀行を本誌に掲載したが、多数の続者の要望に応えて再録することにした。牧童が『聖母』から聞いたという予言の中に、今世紀末の第三次大戦発生に触れた項があるという噂が流れているからである。しかも大円盤は別な惑星から来た宇宙船であったという確かな筋の情報があるにもかかわらず、これは宗教上の奇跡とされて一般社会から隔離されてしまった。今ここにその全貌を検証して真相を伝えることにしよう。

ファティマとは如何なる場所か

ポルトガルはイベリア半島の西南にスペインとくっついている、ヨーロッパ最南西端の小国である。首都のリスボンは南部の海港都市で、石造の大建築物が立ち並ぶ重厚なヨーロッパ風の大都市。テージョ河畔に屹立するエンリケ航海王子の素晴らしい記念碑が、この国の栄光ある歴史を象徴している。

この首都から約八〇キロ北方の山間地に位置するファティマは、きわめて辺鄙な町である。

ここに三人の牧童がいた。当時一〇歳のルシア・サントスという少女、その従兄弟で九歳のフランシスコ・マルト、フランシスコの妹、七歳のジャシンタであるが、このうちルシアが長生きして後世に詳細な体験を伝えている。

日本で出ているファティマ関係の本ではルシアをルチア、ジャシンタをヤシンタと表記しているのが多いが、これは誤りで、誰かが書いた本を丸写しにしたものだろう。こうした大事件の執筆にあたっては自分で実地調査をすることと、その国の言語をある程度研究してかかる必要がある。そして現地資料を入手することが大切だ。

不思議な事件の始まり

一九一七年五月一三日、仲のよい三人はいつものようにコーヴァ・ダ・イ

リアという牧草地へ羊の世話に出かけた。ここは七世紀頃に住んでいた聖女イリアにちなんでつけられた地名だが、実際は広大な平野だ。

この牧草地で奇怪な出来事が連続発生する。これは後年ルシアが司教に語る形式で書いた『思い出の記』の英文版を参考にするのが正確なので、以下、それに従うと――

実は二年前のある日（日時と場所は不明）羊をつれて野外へ出た三人が可愛い弁当の昼食を終えて、習慣どおりにロザリオの祈りを始めた。

するとまもなくヒイラギの木の上空に、まるで雪で作られたかのような真っ白い人間の像のようなものが浮かんでいるのが見えた。恐怖した三人が祈りを続けていると、やがて像は消えた。

帰宅したルシアが母親にそのことを話したけれども、母親は全く相手にしない。しかしさらに不思議な体験を牧童達が持つようになってから、次第に噂が広まった。

美しい〝天使〟の出現

翌一六年四月のある日（この日時と場所も不明。なにせカレンダーや時計などを持たぬ貧家の子供達だから無理もない）、三人はチョウサ・ヴェリャと呼ばれる丘の東側山麓の両親が所有する土地へ羊達を連れて行った。

午前中のなかば、こまかい霧雨が降り始めたので、一同は丘の上の突き出た大きな岩の下へ入りこんで雨を避けた。

やがて雨がやんで晴天になったので、三人はお弁当を食べてロザリオの祈りを行ない、小石遊びを始めた。石を並べて家の模型を作るのだ。カトリックの国なので子供のときからお祈りの習慣が身についている。

突然、突風が吹いて樹木が揺れた。一同は空を見上げて驚いた。オリーブの林の上空に大きな光る人像のようなものが見えるではないか！　それは雪よりも白く、日光が貫通するほどに透き通った一四～一五歳の少年の姿である。

あっけにとられている三人の眼前にその像は降下して地上に着陸すると、凄く美しいその人が言う。

「怖がってはいけません。私は〝平和の天使〟です。私といっしょに祈りなさい」

相手は地面にひざまずいて額を地に押しつけながら、三回ほど次の言葉を三人に復誦させた。

「わが神。私はあなたを信じ、敬慕し、期待し、愛します。あなたを信じないで、崇拝もせず、期待もせず、愛さない人々を、どうぞ許してあげて下さい」

続いて〝透明人間〟は立ち上がって言った。

「いま述べたように祈りなさい。そうすればイエス様とマリア様の御心は、あなた方の祈りに応えられるのです」

ルシアはそのときの光景を思い出す。

「その方の言葉は私達の心にたいそう深く刻まれましたので、決して忘れることはできませんでした。それ以来、私達はよくこの言葉をとなえて、ついには力つきて倒れたものでした」

UFO側のものすごい技術

UFOを深く研究してこられた読者は、以上の記述で気付かれるだろう。これは実際には上空に飛来した円盤が特殊な技術で作り出した〝空中彫刻〟作品なのであって現実の生きた人間ではない。音声も円盤から放射される何かのビームを応用したものである。

地球人の想像を絶する物凄い科学技術を持つ別な惑星から飛来する宇宙船にとって、こんな事は朝飯前にやれるのだ。筆者もこれに類する体験を持ったことがあるが、それは言語に絶する光景であった。

しかし、まだUFOの知識など一般化していない当時のカトリック信仰の国ポルトガルでは、この一連の事件をすべて聖母の奇跡とみなした。現在でも文明国でさえUFOの何たるかを知らず、話を聴いても一笑に付する手合いが多いのだから、当時のポルトガルで神秘視され宗教化されたのも無理はない。むしろ宗教と関連づける方が効果的とみたスペースピープルの思惑によって、少年像を出現させたとも考えられる。

スペースピープルが接近？

一九一六年に三人の牧童は三回ほど〝天使〟を目撃した。その二回目は夏のある日のことで、シエスタという昼寝の時間に牧草地から帰宅した三人は、ルシアの家の裏庭にある井戸の側で遊んでいた。

突然、一人の見知らぬ男がそばに立って三人に話しかけた。

「あんたらは何しているの？　祈りなさい。うんと祈りなさい。イエスとマリアの心は、あんたらに憐れみの気持ちを持っておられます。〝いと高きもの〟にたいして絶えず祈りと犠牲を捧げなさい」

ルシアによれば、この男も〝天使〟ということになっているが、これは空中から降下した透明人間ではなくて、特殊な服装をした人間だったらしい。

第三回目の〝天使〟出現の場所は、ルシアの両親の地所でプレグェリアというオリーブの森の丘の斜面をまわった反対側の岩をよじ登った所の窪みに着いて三人が祈りを始めたときである。この日時についてルシアは全く記述していない。

イスラム教徒みたいに三人が地面に額をすりつけて祈っていると、また例の〝天使〟が眼前に立っている。これも透明人間ではなくて、生きた男である。

ルシアは説明する。

「その人は左手に聖餐杯（台付きの杯）を持ち、その上方の空間に聖体（ミサ聖祭で聖別されたパン）が浮いており、そのパンから聖餐杯の中に血液がしたたり落ちていました。すると〝天使〟は空間に聖餐杯を停止させたままで私達のそばにひざまずいて、次の言葉を二度くり返させました。

『最も聖なる三位一体である父と子と聖霊に。主がみずからこうむった暴行、冒瀆、無関心などにたいする償いとして、この世のすべての聖櫃内にあるイエス・キリストの最も高貴なる体、血、魂、神性を捧げます。主の至徳なる御心とマリアの無垢の心の限りない功徳によって、哀れな人々の改心をお願いいたします』

それから〝天使〟は立ち上がって両手に聖餐杯と聖体を取り、聖体を私に与えた上、聖餐杯の中の血液をジャシンタとフランシスコに等しく分かち与えながら言いました。

『恩知らずの人々によってひどい仕打ちを受けたイエス・キリストのお体を食べて、血を飲みなさい』

もう一度その男の人は地面に平伏して先程の祈りの言葉を私達にさらに三度くり返させてから消えました」

この二度目と三度目に出現した男は一体誰なのか。賢明な読者は容易に推察できるだろう。これが地球人でないことは服装の描写でわかるのである。

強大なカトリック信仰を利用？

先にも述べたようにファティマというのは内陸部の山間地で、一九一六～七年当時は人口約二五〇〇人程度の貧村。山地に民家が点在する過疎地だった。現在でも三人の生家が残っているアルジュストレル地区へ行くと、ろくに家は立ち並んでいない。全くの山中の部落なのだ。

ヒイラギやオリーブの茂る平野や谷に囲まれた人けのない山間に円盤が着陸するのは容易である。その円盤から出てきたスペースピープルが特殊なスペース服を着て出現すれば、幼い子供達には〝天使〟のように見えたことだろう。その前年には空中で透明人間の投影像をビームで見せて、不可思議な現象の発生を予告し、これがあたかも宗教の奇跡であるかのごとく思い込ませることによって子供達に安心感と期待感とを起こさせようとしたのだろう。

いったいにポルトガルは隣国のスペインやフランスと同様、強大なカトリック信仰を基盤とする国で、キリストと聖母マリア崇拝は生活に根強く密着していた。子供達は幼児期より両親からカトリックの教義を教え込まれ、七歳になると初聖体拝領のための暗唱テストを教会で受けて、合格すれば聖杯をかたどった容器が与えられる。これで一人前の信徒として大人の仲間入りをする。しかも都会地よりも田舎のほうがこうした宗教的風習や雰囲気が濃厚であり、ファティマ村も例外ではなかった。

だからルシア、フランシスコ、ジャシンタの三人だけが篤信だったというわけではない。一般の子供もロザリオ（数珠）を手にしては祈りの言葉をとなえるのが日常の習慣であった。

▲コーヴァ・ダ・イリアでお祈りをする（左より）フランシスコ、ルシア、ジャシンタの貴重な写真。

想像を絶する科学技術

だがスペースピープルはこの幼児三人にコンタクトした。なぜか？

理由は不明なるも、考えられるのは、三名の比類なき純粋さ、正直、子供ながらも至上なるものに対する強い崇敬の念などによるのだろう。根本的には子供達の過去世からのカルマに起因していたのかもしれない。

また、スペースピープルがイエスとマリア崇拝を勧めたのは、一般人のイエス信仰を助長する意図があったからであると思われる。大体にイエスの教えは万物一体と愛の哲学を説いた宇宙的な法則であり、真の平和な社会を建設するための不可欠なティーチングである。だが、これは宗教化され、イエスは偶像崇拝の対象となった。スペースピープルは牧童を通じてこの教義の真意を伝えようとしたのかもしれない。

こうした場合、恐怖を起こさせぬようにコンタクトするには、彼らの信仰心に合わせた方法を応用するのが最良である。最初は空中に透明な美しい人体像を出現させて天使のごとくに見せかける。次に付近に円盤で着陸し、そこから特殊なスペース服のままで三人に接近する。しかも手には誰もが見慣れている聖餐杯を持ち、キリストの御使いのごとくに思わせる。この聖杯を引力を遮断する方法によって空間に浮かばせ、奇跡のように見せて、〝天使〟であることを〝証明〟する。赤色の果実酒がその中に流れ込む。〝天使〟は地面にひれ伏して祈りの言葉をとなえ、イエスとマリアの名を口にする。子供達は大いなる畏怖の念に打たれて祈りの言葉を三度となえる。この祈りの言葉は平和確立の法則を示唆したもので、少しも不自然ではない。

空中に立体像を見せることもスペースピープルにとっては簡単なことだ。地球にもホログラフィーという立体写真法が開発されている。彼らの技術はこの程度をはるかに超えた凄いものなのだろう。

これについては次のような事実が参考になる。

今を去る七年前、当時香川県高松市に在住していた日本GAP会員・西本有水子さんの長女で奈生ちゃんという六歳の娘さんが、九月初旬、市内木太町六区の田園地帯で、夕方六時頃、突如、屋島の方から飛来するアダムスキー型円盤を目撃したのである。

この物体は約二五メートルの至近距離まで接近して、低空に降下した。そのとき円盤の丸窓から金髪を両肩まで垂らした美しい顔の少年がニッコリと微笑し、やがて飛び去ったが、その直前に左手を軽く上げた。

この驚くべき大事件については本誌88号で詳報したので詳細は省略するが、この円盤が飛来するときに船体の横の空中に巨大なネックレスのような物を作り出した。大きな石のような物が数珠状につながった輪が広がって、しかも各石が赤、緑、青、オレンジ色に光り、素晴らしい光景を呈していたという。筆者は奈生ちゃんに数度会って性質をよく知っているが、けっして作り事を言うような子ではなく、純粋な正直な少女である、たぶん幼女の奈生ちゃんに恐怖心を起こさせぬようにとの配慮により、あのような物を見せたのだろう。ちなみに西本有水子さんは現在も会員だが、その後、高松から九州へ移住している。この件に関する問い合わせは遠慮されたい。また本誌88号も品切れ絶版になっている。

美しい貴婦人が連続出現

さて、ファティマでは翌一九一七年に劇的な事件が連続発生した。

最初は五月一三日。例の三人が家から二・五キロ離れたコーヴァ・ダ・イリアの牧草地に着いて弁当をすませたあと、ロザリオをとなえ、石ころで家建て遊びを始めた。

昼過ぎ、突如、上空に閃光がきらめいた。見ると三人の眼前の高さ一メートルのヒイラギの木の上に、凄い美人が立っている！　純白の長いドレス、首から垂れた金色のネックレス、両肩にはおった金色のふちのついた長いマント。右手にロザリオを下げて、胸に両手を組み合わせている高貴な顔付きの人は一八歳ぐらいの絶世の美女！

落ち着きをとりもどしたルシアが、どこから来たのかと尋ねると、美女は天国から来たと答え、これから毎月一三日にここへ来てくれ、一〇月には私の正体や、あなた方にたいするお願いなどをお話ししようと言う。その他、少し説教して、世界が平和になるように祈れと告げた。

語り終わった貴婦人は足を動かさずに直立したまま空中へ上昇して消えた。

ただしこのとき美女の姿を見たのはルシアとジャシンタだけで、フランシスコには像も音声も感知できなかった。

これもUFOがよくやる手である。数名が一緒にいながら、見える人と見えない人がいる例がある。これは何かの理由でUFO側から特定な人に行く光束やビームを遮断しているらしい。名高いフランス・ルールドのベルナデットの場合と同様である。

この事件はたちまち村人に流布して子供達にはトラブルがつきまとうことになる。これもベルナデットと同じだ。

六月一三日にも貴婦人が出現して、約一五分でコンタクトは終了。相手は来月一三日にも来るようにと言い、読み書きが出来るように勉強せよと告げた。このときには約五〇名の村人が見守った。彼らには貴婦人のビジョンは見えなかったけれども、ヒイラギの木が貴婦人の服の裾で引っ張られるようになびくのを目撃して、子供達の支持者になった。

三回目のコンタクトは七月一三日に行なわれた。この頃ルシアはトラブルの過中に投げ込まれて苦しんでいる。信じない者達と支持者達とにはさまれ

てもみくちゃにされるのだ。

この一三日には噂を聞いた数千人の群集が押し寄せた。

人々には見えない美女の映像が空中に現れて、今度は秘密を厳守せよとルシアに命じた上で重要な予言を伝えた。これが世に名高いファティマの予言と言われるもので、解釈をめぐってさまざまな憶測が流れている。

第三次大戦の予言か

それを要約すると――

「戦争（第一次大戦）は終結に近づいた。しかし人間が神に逆らうことをやめなければ、次の法王（ピオ一一世）のときにまた大きな不幸が発生するだろう（これは第二次大戦となって的中した）。

いつか夜間に不思議な光が発生するが、これは戦争、飢餓、法王と教会に対する迫害の始まりで、世界に対する神の第二の天罰。私（貴婦人）の願いを聞き入れるならば、ロシア（ソ連）は改宗し、世界は平和になる。さもなければロシアはその誤りを世界にまき散らして戦争をあおりたて、教会を迫害し、多くの国が滅亡する（これに続く部分は極秘にされている）。その結果ロシアは改宗し、世界に平和が来る」

右の極秘の部分は第三次大戦の予言だとか、全面核戦争を意味するものだとか、さまざまの憶測が流れているけれども真相は不明である。

郡長のひどい迫害

八月のコンタクトはコーヴァ・ダ・イリアではなく、自宅から約一キロ離れたヴァリーニョスという林間の平地で一九日に発生した。一三日に一応三人はコーヴァへ行ったけれども、子供達が虚言を弄しているとみた悪名高いアルトゥール・デ・オリベイラ・サントス郡長が妨害し、三人を三日間、牢に入れて拷問にかけたが、一同は絶対に偽証をせずに真実性を強調したので、郡長はついにネをあげて釈放した。だから八月のコンタクトは一九日になったのだ。この頃三人を支持する群衆は〝やかましいブリキ屋〟というあだ名の郡長をやっつけろと騒ぎ出したので、郡長も身の危険を感じていた。

ヴァリーニョスでは三人とジャシンタの兄のジョンが放牧に行った。このとき出現した貴婦人は、反対者をけっして憎んではいけないと諭した。

ジョンには貴婦人の姿が見えなかったけれども、相手が上昇するときに爆発音が聞こえたという。

銀白色の輝くUFO

九月一三日。この日のコーヴァは推定二万五千ないし三万の群衆で埋まった。自動車のない時代にこんな僻地へよくも集まったものだ。空中現象よりこのほうが不思議なくらい。

正午頃、三人がひざまずいて祈りを始めると、大群衆もいっせいにひざまずいた。

まもなく大歓声がとどろく。太陽が急に光を失ってコーヴァ一帯が黄金色に輝くと、上空に銀白色に輝くタマゴ型の物体が出現し、ゆっくり東から西へ飛行して三人の頭上で消えた！

すぐに貴婦人のビジョンが現れてルシアは何事かをつぶやきながら会話を続ける。

やがて語り終わって「聖母様がお帰りです」とルシアが叫ぶと、またも歓声がどよめいた。銀白色のタマゴ型物体が再度出現してゆっくり上昇する。

これは聖母マリアの乗り物とされて『聖母の輝く空艇』と呼ばれている。

七万人が目撃した大円盤

コンタクトの最後の日である一〇月一三日。この日、一大奇跡発生を期待してコーヴァに密集した群衆はなんと七万人！　記録によれば海外から来たジャーナリストや学者、教会関係者も多数いる。

あいにくこの日は土砂降りの雨となり、平野はぬかるみと化した。しかし人々は天空を凝視しながら奇跡を待つ。

「あ、あそこに聖母様が！」

叫ぶルシアの立つ地面から小さな白雲のようなものが湧き出て、三人の足もとを包み、上昇した。これは多数の人にも目撃されて驚きの声があがった。

例の貴婦人が出現してルシアに語り始める。なぜか今日はフランシスコにもよく見える。説教を終えた貴婦人が上昇したあと、今度は突然、黒雲が割れて、青空をバックに銀白色の巨大な円盤状物体が出現し、無数の色の光を放射しながら急速に自転を始めるではないか！　七万人の大歓声がコーヴァの平野にこだまする。

群集の驚異と畏怖の念は頂点に達した。

「ファティマの聖女、マリア様！」

「我らに憐みと祝福を！」

人々は興奮と熱狂で我を忘れ、讃美歌や絶叫の坩堝と化す。

約一〇分間見えた不思議な物体は消え去ったが、大群衆はいつまでも空中を凝視していた。

典型的なUFO現象

これを太陽の誤認だとかマス・ヒステリーの産物という人もある。しかし当日はインテリ層もかなり混じって目撃している。その人達の証言によると、絶対に太陽ではなく、説明のつかない不思議な物体だったという。

たとえば現地にいたコインブラ大学教授アルメイダ・ガルレッテ博士も、物体の外観は良質の真珠のような透明な物で、それ自体の色も影もなく、銀色の貝殻を削り取って磨きあげた車輪のように見えたと証言している。これはUFOの典型的な外観を示すものだ。

突然、この円盤型物体は揺れ動いて、

▲1917年10月13日、歴史的な大事件が発生したコーヴァ・ダ・イリアに密集する7万人の大群衆。

唐突な運動を行ない、次に火の車のように急速に回転し、巨大なランプに似た燦然たる色光を放射した。しかもこの色光は次々に緑、赤、紫等に変化したという。

これでよいのだ

しかし七万人を驚愕させた大事件は宗教の靄の中に包まれてしまい、巨大なUFOは聖母マリアの空艇とされて、神秘と奇跡の神殿の中に閉じ込められてしまった。

大草原地帯であったコーヴァ・ダ・イリアには大聖堂が建立され、広大な敷地は舗装されて、昔の面影はない。

大聖堂に向かって左方の貴婦人とのコンタクト地点はガラス張りの建物で覆われており、ここにも聖母マリア像が安置されている。いまやルールドと同様に一大宗教センターと化したコーヴァには、毎年五月から一〇月にかけて毎月一三日に信者が殺到するが、特に五月一三日には国内外から巡礼者が五〇万から一〇〇万人も訪れる。奇跡的治癒を祈願して来る難病患者も多数おり、なかには実際に治る人もある。

これでいいのだろう。彼らが魂の平安と人生の希望をこの地に託して心の安らぎを得ることができれば、マリアと思わせた異星人の意図は成功したと言えるからだ。物欲に満ちた人間が生活との闘争で苦悩するよりも、信仰を基盤にして平和に暮らせるほうがはるかによい。

ジャシンタの最後の言葉

フランシスコは事件から二年後に猛威をふるったスペイン風邪にやられて、一九一九年の四月四日、気管支肺炎で他界した。死の瞬間まで苦しいとは言わず、周囲の人々に心から感謝の言葉を述べてわずか一〇年の短い生涯を終えた。

妹のジャシンタも風邪が悪化してひどい化膿性肋膜炎をわずらい、リスボンのドナ・ステファニア病院で大手術を受けたが、治療の甲斐なく、二〇年二月二〇日、金曜日の午後一〇時、静かに別れの言葉を告げて、一一歳足らずで地上を去った。

臨終近い頃、見舞いに来た婦人達の派手な服装を見て次のようにつぶやいたと記録されている。

「あんな格好をして――。あの人達が永遠とは何かを理解していたら――」

この二人の遺体はコーヴァ・ダ・イリア大聖堂内の正面祭壇の横に眠っている。二人の早世は二回目の貴婦人とのコンタクトでルシアに予言されていた。

ルシアは高齢ながらいまもコインブラ市の修道院で健在である。

（次頁のカラー写真はすべて筆者撮影。モノクロ写真は現地入手資料。2頁のタイトルバック写真は一〇月一三日の群集）

▶1916年の夏、2回目に"天使"が出現したルシアの家の裏の井戸。今もこの水を飲めば病気が治ると信じられて多くの人が水を求めて来る。

◀フランシスコとジャシンタの生家。2人のベッドが残されている。

▶大聖堂内に安置されているフランシスコの遺体（花束のある床下）。この反対側にはジャシンタの遺体が安置してある。

◀1971年8月19日に貴婦人が出現したヴァリーニョスのコンタクト地点。現在は小さな堂の中にマリア像が立っている。

▼コーヴァ・ダ・イリアに建つ大聖堂。前方左寄りの建物が貴婦人の出現場所。

Hans Petersen Talks About Adamski

奇跡のペンダントと転生の法則

〈ハンス・ピーターセンが語る秘話〉(2)

英語テープより
坂本貢一・訳

一九九〇年一〇月、デンマークGAP大会（コリン市で開催）に招待を受けて講演を行なった久保田会長は、その前日、デンマークGAP創立者ピーターセン氏の邸宅を訪れて、アダムスキーに関する興味深い話を長時間聞いた。以下は前号の続き。旅行に同行した清水正、佐塚崇子も同席している。

金銭に執着がなかった

ピーターセン　アダムスキーはお金にまったく無頓着だったね。

実はちょうど今日君達を町へ案内したように、アダムスキーが来たときも彼を町へショッピングに連れて行ったんだが、出掛ける前に私は彼にそれ相当のお金を渡しておいたんだ。

それで、ある店に入って、私が彼に「ジョージ、ビスタで帰りを待っている女の子達（アダムスキーの秘書や助手連中をユーモラスに言ったもの）にお土産でも買ってあげたらどうだい」と言うと、彼は、「うん、そうしよう」と言って、お土産を物色し始めた。

やがて、これぞという物が見つかった様子なので、私は彼に「向こうでお金を払ってきなよ」と言ったんだ。

すると彼は「私はお金なんか持っていないよ」と言うじゃないか。

そこで私が「さっきあげたじゃないか」と言うと、なんと彼はこう言ったんだ。

「ああ、それなら、さっき道で出くわした少年にくれてやったよ」

彼はそんな人物だったんだ。お金を持っているのが嫌だったんだ。たとえ彼に一ドルあげようと一〇〇〇ドルあげようと、彼はアッというまにそれを誰かにやってしまう。そんな男だった。

（久保田注＝これは潔癖というよりも、紙幣やコイン等から発するある種の波動に耐えられなかったらしい。凄い超能力者であったアダムスキーは、ヨーロッパの古い寺院の中に入ろうとしなかったという。ドス黒い雰囲気に包まれた寺院にはマイナスの波動が充満しているからであると聞いている。ただしバチカンのサンピエトロ大寺院だけは別で、アダムスキーはここで異星人の導きにより法王ヨハネ二三世と会見した。この件に関しては、あとでピーターセン氏の話が出てくる）

クリスタルの一大奇跡

ピ　クリスタルのペンダントを（デンマークへ）持ってきていたんだがね。あれに関しても面白い話があるんだ。

久　ああ、あのペンダントだね。あれなら私も以前にビスタへ行ったときに見せてもらったよ。

（久保田注＝アダムスキーは生前、見事なカットの施された大きなクリスタルのペンダントを所有しており、講演などではそれを胸に掛けていた。これはアダムスキーが若い頃にスペースピープル（異星人）から与えられた物と言われており、講演中にはこのペンダントがスペースピープルから送られる波動を増幅してアダムスキーにエネルギーを伝える作用をすると言われていた。久保田は一九五〇年一一月、米カリフォルニア州ビスタのアダムスキーの家を訪問したときに、アリス・ウェルズ女史からこのペンダントを見せてもら

▲語り続けるピーターセン氏（左）。右は久保田八郎。　撮影／清水正。

った。手に取って胸に当てると胸が熱くなったのを覚えている）

ピ　ああ、そうかい。そのペンダントだ。

実はアダムスキーが私の家に滞在中に私の友人が訪ねて来たんだ。彼はひどく病んでいてね、肺癌だったんだよ。そこで私はジョージの首からそのペンダントを借りて、友人の首に掛けてやったんだ。

それは午前一〇時頃だった。それで友人はそのペンダントを夜の一〇時頃までずっと首にかけていた。だから一二時間ほど掛けていたことになる。

友人は次の日に最後のレントゲン撮影を行なったあとで肺の摘出手術を受けることになっていたんだ。

さて、その次の日、彼は病院に出向いてレントゲン撮影を受けた。ところが驚いたことに、彼の肺から癌の姿がきれいに消えていたというんだ。痕跡さえも残っていなかったらしい。それ以後現在に至るまで彼はピンピンしているよ。健康そのものだ。

久　ウーン、それはまさに奇跡だね。

ピ　そのとおりだ。それからあのクリスタルに関してアダムスキーが面白い話を一つしてくれた。

ある日、ニューヨークの町を歩いていた彼は、ふと、ある宝石店に足を踏み入れたという。そしてそこのショーケースの上にあのクリスタルをちょっと乗せてみた。するとそこの店員が驚いた様子で、

「いやあ、こんなクリスタルを見たのは初めてです。私達はこんなカットを施したことはありませんし、こんなカット法も聞いたことはありません」と言ったらしい。

そこでアダムスキーは

「それはそうだろう。だって、これは地球の物ではないんだから」と言って、笑いながらその店をあとにしたということだった。

▲アダムスキーが異星人から与えられたクリスタルペンダント。直径6センチ。上は表面、下は裏面。1975年（昭和50年）11月に久保田八郎がカリフォルニア州ビスタのアダムスキーの家で撮影。電気スタンドによる照明のため全体が黄色っぽくなった。

消えたスペースピープル

佐塚　アダムスキーはあなたのこの家に滞在していたのですか。

ピ　いや、この家ではない。前に住んでいた家だ。彼が私の家を訪れたのは一九六三年のことだった。そして六五年に彼が亡くなったんだ。まあ、その頃に住んでいた家に彼が（講演旅行で）やって来たわけだ。

彼がわが家に滞在中に、私はとても不思議な体験をしている。

それは、ある日、彼がフランス人の教授とともに講演を行なったときのことだ。そのときアダムスキーは私にこう言ったんだ。

「なあハンス、誰にも言っちゃ駄目だよ。実はね。客席の一番前の列にスペースピープルが二人座っているんだ」

私は心を弾ませながらその二人を見たが、彼らの姿は私達とまったく変わらなかった。

そこで私は仲間の一人を呼んで、客席の一番前の列を写真に撮っておいてくれと、それとなく頼んでおいたんだ。そして後日その写真がプリントされてきたんだが、私はそれを見て驚いてしまった。というのは、彼らが座っていた筈の二つの席には誰も写っていなかったんだ。ただの空席が二つ写っていただけだ。

佐 その写真を撮ったときに彼らは確かにそこにいたんですか？

▲ジョージ・アダムスキーと聴衆。1962年5月に撮影。

ピ もちろん、いたよ。でも写らなかったということだ。

佐 なるほど、よく分かりました。

ピ 同じようなことはコペンハーゲンでもあった。ある晩、私は仲間達とともにアダムスキーを遊園地（チボリ公園）へ連れて行ったんだが、そこには皿にボールをぶっつけて壊すゲームがあって、私の仲間達がアダムスキーにそのゲームをやってみるように勧めたんだ。最初アダムスキーは、まるで空飛ぶ円盤を壊すようで気がすすまないと言いながらしぶっていたんだが、最後的にはそのゲームをやった。そしてその様子を仲間達はカメラに収めていた。

さて、その写真が後日プリントされてきた。ところがアダムスキーは写っていなかったんだ。そこには影とも煙りともつかないようなものが、ただうっすらと写っていただけだった。

CIAの残酷な迫害を受ける

ピ アダムスキーはこんな話をしてくれた。彼はCIA（中央情報局）によってひどい目にあったことがあるんだそうだ。

彼がパロマーガーデンズにいた頃のある夜のことだった。一緒にいたアリスとマーサ（秘書のアリス・ウェルズとマーサ・ウルリッチ。いずれも故人）がアダムスキーに「おやすみ」と言ってベッドルームに入ったあとで、入口のドアーをノックする音が聞こえた。そこで彼が出て行くと、そこには二人の男が立っていた。

すると二人は、いきなりアダムスキーを取り押さえて自分達の車の所まで連れて行き、彼の手、足、首をロープで縛り、車の後部にくくりつけた。

次に彼らは、およそ三キロメートルほどの距離を、彼を引きずりながら走り回ったらしい。そして彼を家からかなり離れた所に放置して走り去った。全身血だらけのアダムスキーがやっと家にたどり着いたのは翌日の朝だったという。

さて、その日の夜、つまり彼が痛めつけられた夜の次の夜だが、前日とほとんど同じ時刻頃に、また二人の男が彼を訪ねて来た。ただし彼らは前夜の男達とは別人だった。

彼らは、こう言ったという。

「恐れることはありませんよ。私達はあなたを守るために来ました。私達はFBI（連邦捜査局）の者です。私達はCIAが昨夜あなたに危害を加えたことを知っています。そんなことはもう二度とさせません。今後あなたが世界中のどこに行こうとも、私達はあなたをしっかりと護るつもりです」

事実、その日以後はアダムスキーがおおやけの活動をするときには、FBIが必ず近くで見守っていたということだった。世界中のどこへ行ったときでもだ。

円盤も常に見守っていた

ピ　それからこんなこともあった。

アダムスキーが私の家を訪れたとき、彼はティストーという名の空港に降り立った。コペンハーゲン空港からの飛行だった。

私と息子がそのティストー空港で彼を迎えたんだが、私達は彼の乗った旅客機が到着する様子を、空港の建物の外に立って眺めていた。

旅客機は雲の中を通り抜けるようにして降下して来たんだが、その旅客機のすぐ後ろには、付き添うようにして飛行する円盤の姿があった。

その円盤は、旅客機が完全に雲から抜け出して着陸するのを見届けると、アッというまに雲の中へ消え去った。

同じようなシーンはコペンハーゲン空港でも目撃している。その空港で私は八人の仲間とともにアダムスキーの到着を待っていたのだが、そのときもやはり同じように旅客機のすぐ後ろを飛んで来た円盤が、その旅客機の着陸を確認したあとでその姿を消したんだ。

佐　スペースピープルはいつもアダムスキーを見守っていたわけですね。

ピ　そのとおりだ。

キューバ危機を解決した異星人

ピ　ところでIDカードというのは知っているだろうね。そう、身分証明用のカードだ。

軍人は皆そのIDカードを渡されていて、自分が所属する基地に入るとき、その提示を求められる。私がアメリカの基地に派遣されていたときのIDカードが保存してあるから、持ってきてみせようかな。ちょっと失礼。

（ここでピーターセンは立ち上がって、IDカードを取ってくる）

ピ　これなんだ。これは私がミシシッピーのキースラー空軍基地にいたときのIDカードさ。

ところが、アダムスキーもこんなIDカードを持っていた。ただし彼の持っていたものは、アメリカ軍すべての基地に有効なカードだった。世界中にあるアメリカ軍のすべての基地に通用したんだ。

さらにそれは、軍関係のみならず、あらゆる公的機関、政府機関に対しても有効なものだった。そのカードを提示するだけで彼は文字通り世界中のアメリカ政府出先機関のどこにも出入り出来たんだ。実に驚くべきことだと言える。

久　それはアメリカ政府が発行したものなのかい？

ピ　そうだ。アダムスキーはホワイトハウスにもたびたび出入りしていたんだ。土星旅行から帰った直後にも彼はホワイトハウスを訪れている。

（久保田注＝アダムスキーの土星旅行に関しては新アダムスキー全集第五巻『金星・土星探訪記』（中央アート出版社刊）に詳述してある）

土星に向けて出発する直前に彼は私に手紙をよこしたんだが、その手紙で彼は、もうすぐ地球を離れることになっているが、地球へ戻ったらまたすぐ連絡すると言ってきた。

それで約束どおり土星から帰ったあとで手紙が来たんだ。その中で彼は、地球を離れるときは自分がどこに行くことになるかを知らなかったこと、さらに、私に手紙を書くのが遅くなって申し訳ないと謝ってから、その理由として、土星からの帰還後、スペースピープルの要請でケネディー大統領に或るメッセージを伝えるために、ホワイトハウスに出向いていたことを述べている。

さらにその中で彼は「そのメッセージの内容は申し訳ないが話すことは出来ない。でも来年の○月○日に何が起こるかを見れば充分に察しがつくだろう」と言ってきた。

そしてその『来年の○月○日』がやってきた。それはまさにケネディーがソ連に対して『キューバからミサイルを撤去せよ』と宣言した日だったんだ。

結局アダムスキーは、（あわや第三次大戦になると思われた）キューバ危機を平和裡に解決するためのスペースピープルからのアドバイスを、秘密メッセージとしてケネディーに伝えたんだと思うね。

スペースピープルがメモで警告

ピ　そうだ、これも興味深いと思うよ。

（一枚のメモを示しながら）これはアダムスキーがデンマークに来ていたときに受け取ったメッセージだ。こう書いてある。

「アダムスキー。今回はフィンランドに行くな。逆宣伝によるトラブルが待ち構えている」

彼がこれを受け取ったのは、法王宛の包みを受け取る前日のことだった。

（久保田注＝アダムスキーがデンマークへ講演旅行に来たとき、最初はコペンハーゲン郊外の小さなホテルに宿泊した。そのとき彼の部屋のドアーの下にメモを記した紙片が入れられていた）

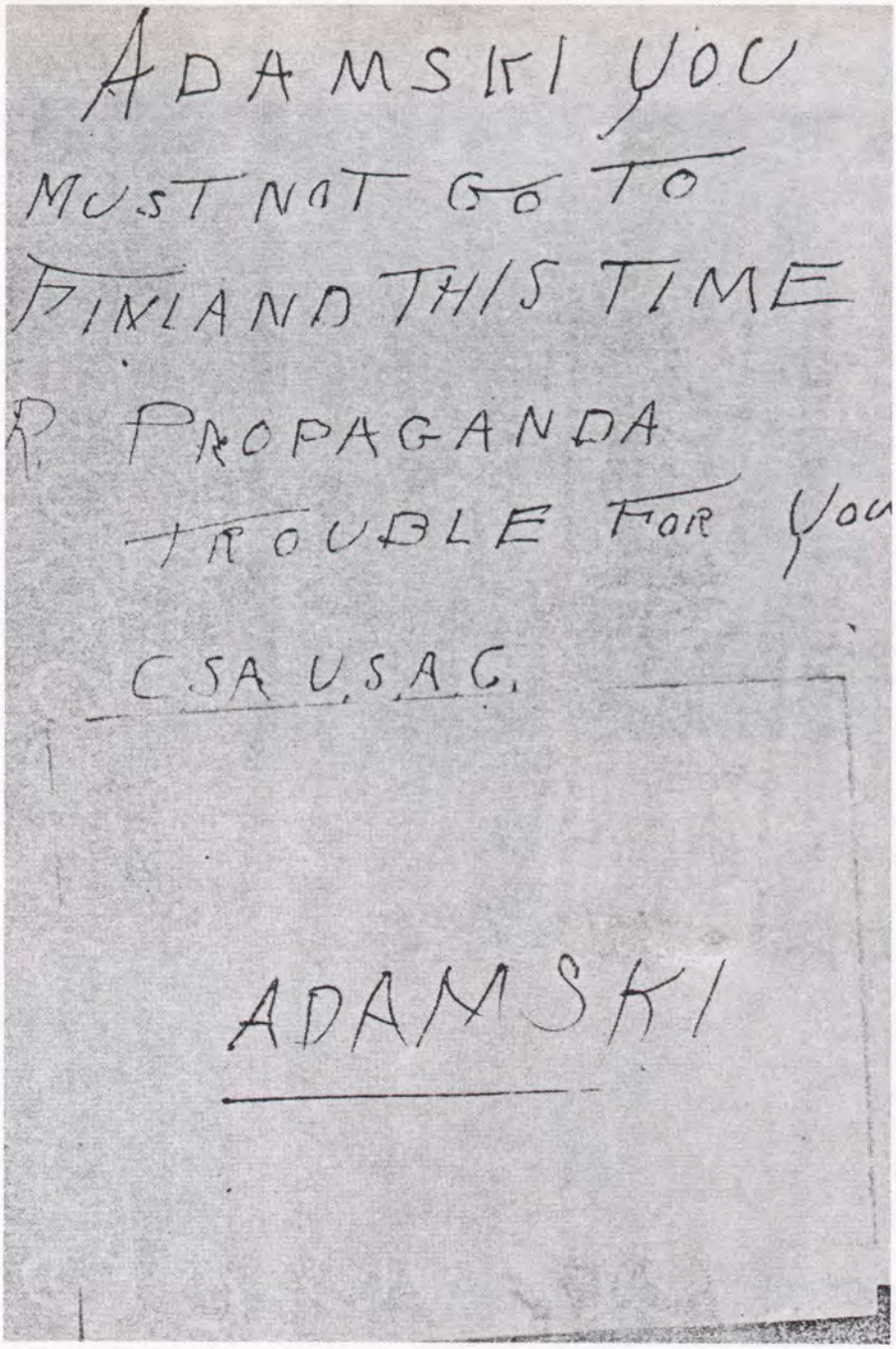
これはスペースピープルが書いたものなんだ。

佐　スペースピープルが書いたものですって？

ピ　ああ、そうだよ。スペースピープルが書いたものさ。

佐　（メモの文字を指しながら）これはどういう意味なのでしょう？

ピ　ああ、それね、アダムスキーは知っていたんだが、私達には教えてくれなかった。そのU・Sというのは、おそらくアメリカを意味するんだと思う。次のA・Cというのは、いろいろな意味が考えられて、ちょっと特定できないね。まあ、分からなくても何も問題



◀アダムスキーのホテルの部屋へ異星人が差し入れた警告のメモ。

はない。重要なことじゃないよ。

ローマ法王がメダルを授与

ピ　あと何かあったかな（と言いながら資料のファイルをめくる）

　ああ、これは（バチカンから？）デンマークのあるカトリック司祭宛の手紙だ。これにはアダムスキーがローマ法王からもらったメダルのことが書いてある。

（久保田注＝ローマ法王のメダル下賜事件については、本誌92号掲載『サンピエトロ大寺院の異星人』に詳述してある。ただし同号は品切れ絶版。（新アダムスキー全集第九巻『UFOの真相』に収録）

　表画にはヨハネ二三世ポント・マックスと記してあり、裏には、すべての魂を象徴するマークとともに次のような文面が記されている。

「お問い合わせの品はおそらく本物と思われます。残念ながら現在のところはそれだけしか申し上げられません。しかし、もしこれ以上の情報が必要ならばご遠慮なくご一報下さい。ご期待に添えるよう努力する所存です」

　つまりこの手紙は、アダムスキーが法王からもらったメダルが本物だということを証明しているんだ。

久　そのメダルは私もビスタで見せてもらったよ。

ピ　ああ、そうかい。それは何よりだったね。（資料のファイルをめくりなが

ら）重要なのは大体こんな物かな。（続いて写真のファイルをめくりながら）何か面白い写真はなかったかな。

ああ、知っていると思うが、これは金星の円盤の見取図だ。アダムスキー型円盤とも言われるがね。円盤全体の直径が一〇・五メートル。高さは四・五三メートル。船室の直径は四・八メートル。高さは三・一メートル。窓のサイズは直径四五センチ。球形着陸装置のサイズは一・四五メートル。外側のリングは直径八・七五メートル。内側のリングは六・九五メートル。中央リングは三・七五メートルだ。

（続いてピーターセンは各種のUFO写真を丁寧に説明する）

二〇〇〇年前のアダムスキー

ピ　あ、そうだ、面白い話があるよ。ある晩、アダムスキーと私はさまざまなことについて語り合っていた。その中で彼は、イエスについて或る事柄を言ったのだが、私はどうもそれが腑におちなかった。そこで私は

「いや、それはちょっと信じがたい」

と彼に言ったんだ。

ところが彼は、絶対に間違いないと言い張る。そこで私は「なぜそんなに確信をもって言えるんだい」と言った。すると彼はこう言ったんだ。

「私はそこにいたんだ」

そこで私は「なんでそんなことを覚えていられるんだい？」と聞いた。

すると彼は

「なぜと言われても困るけど、実はね、私には過去五〇〇〇年間の記憶があるんだよ」と言うんだ。

そこですかさず私が「じゃあジョージ、当時（二〇〇〇年前）あんたは何をしていたんだい？」と質問すると、彼は答えた。

「今すべてを話すことはできない。ただ一つだけ言えることは、私は当時、神の子としてのイエスを保護していたというだけだ」

（久保田注＝この件については久保田が過去多年にわたる情報収集の結果、次のような経緯が判明した。

二〇〇〇年昔、イエスがエルサレムのゴルゴタの丘で磔刑（たくけい）に処せられたとき、多くの弟子は逃げてしまったが、最後まで身の危険をもかえりみずに十字架の近くにいてイエスを見守っていた弟子がいた。それはヨハネである。このヨハネが二〇〇〇年後、転生を経てアダムスキーという人物になって出現する。

一方、一九五二年一一月二〇日、米カリフォルニア州デザートセンターに着陸した金星の円盤から出て来た金星人は二〇〇〇年前のイエスであった。

二人は二〇〇〇年ぶりに劇的な対面を果たす。そして金星人が言った。

「今度はあなたを助けてあげましょう」

この金星人はアダムスキーの体験記中にオーソンという仮の名で出てくる。

以上の状況に関しては人間の転生の法則と過去世の記憶の再生能力について知る必要があるが、これについては新アダムスキー全集第三巻『生命の科学』に詳述してある）

エリヤの生まれ変わり

ピ　当時、イエスのまわりにいた人々の何人かは今もこの地球上にいる。また聖書に出てくる偉人で、多くの転生を経て現在地球に住んでいる人々がいる。たとえば、ここにも一人いるよ。ああ、これだ、この人は聖書に載っているエリヤだ（と言って写真中の或る男を指す）。

（久保田注＝エリヤは旧約『列王紀上』に出てくる北王国イスラエルのアハブ、アハジャ王の時代に活躍した初期預言者で、国家的見地にたって信仰の純粋性のためにたたかった大指導者）

たしか五年ほど前のことだったと思うが、アメリカで或る人物が講演を行なった。その講演を聞きに来ていた一人の男が、講演終了後にゆっくりと講師のもとに歩み寄ってきた。そしてその男はとても洗練された態度で、穏やかな微笑を浮かべながら、一通の手紙をその講師に手渡した。そして「家に帰られたときお読み下さい」と言い残して立ち去ったんだそうだ。

その講師は家に帰って、その手紙を開いてみた。するとそこには

「私はエリヤです」

と書かれていたというわけさ（久保田注＝古代から転生してきたエリヤであるという意味）。

それは二〇〇人ほどの人々を前にした講演だったが、その講師は一人の男が自分をジッと見ていることに気づいていた。その男が講演終了後に彼のもとにやってきて手紙を手渡したわけだが、そのとき講師はその男が精神的にすごく高度に進歩した人物であることを感じ取ったという。

ところで、その手紙には「私はエリヤです」という言葉に続いて

「私はいま自分の使命を果たすために地球にいます。私のアメリカでの使命はあと九日で終わり、そのあとはイスラエルに行きますが、そこで私は大きなカタストロフィー（大異変）のおとずれを待つことになります」と書かれてあった。それでいま彼はイスラエルにいる。この写真はイスラエルにいる彼から送られてきたものだ。

さて、そのカタストロフィーだが、それは第三次大戦に続いて始まることになる。そしてこの大戦争はイスラエルで始まるだろう。核兵器が用いられるはずだ。

（以下次号）

次号ではピーターセン氏が近い将来の地球社会の運命について、ある重大な事を述べている。これについては氏の語る言葉として客観的に掲載する予定なので期待されたい。　編者

Timothy Good Supporting Adamski
by Shozo Nakamura

ティモシー・グッドのアダムスキー体験

世界的なUFO隠蔽工作を追求する英国のトップUFO研究家

中村省三

このたび、久保田先生から『UFO contactee』誌への執筆依頼のお話があったとき、私としてはとんでもなく緊張してしまった。

個人的な話になるけれど、一九七六年にユニバース出版社に入社するまでは、どちらかというとSF好きが高じてUFOに興味を抱いていただけというのが実情だった。ところが、そこで久保田先生から、UFOが単なるロマンの対象ではなく、地球人類にとってきわめて重要な問題だということを、しっかりと教示されたわけである。

(編注=当時ユニバース出版社は久保田が経営しており、筆者中村氏は編集部員であった。のち氏はトワイライトゾーン誌の編集長になる)

このことは肝に銘ずるようにしていたけれども、昭和の時代が終わって平成になってから、まさか自分でもUFOの単行本を執筆するようになるとは予想さえしなかった。考えてみると、なんとも不思議な巡り合わせとしか言いようがない。

私にとって、去年一年間は、あのUFOディレクターの矢追純一氏による一連のTV番組や著作で有名になったMJ—12をめぐる謎を追いかけているうち、あっという間に過ぎてしまったような気がする。

今ではMJ—12と聞いても、ほとんどの人は記憶が薄れてしまっているのではないだろうか。基本的には、一九四〇年代の終わりごろにアメリカ合衆国の南西部にUFOが墜落し、その残骸とUFOに残っていた小人宇宙人の死体を米軍がひそかに回収したという話がすべての根底になっている。

このUFO墜落事件がきっかけになって、当時のトルーマン大統領の命令で、MJ(マジェスティック)—12という最高機密プロジェクトが発足した。CIA長官や国防長官、トップクラスの科学者、軍人など一二名から構成されたMJ—12委員会が、極秘のうちに調査を実施したというのだ。

墜落円盤の噂は昔からあったが、このMJ—12の存在はまったく知られていなかった。ところが、一九八七年になって、MJ—12を次期大統領のアイゼンハワーに引き継ぐための概要報告の存在が明るみに出たことから、世界中のマスコミが報じて大騒ぎになってしまった。

乱れとぶ怪情報、ニセ情報

そのうちに、米政府のUFOに関する最高機密文書を見たとか、秘密機関の職員から極秘情報を入手したと主張する人間が次々に現れて、話はどんどんエスカレートしていった。こうして、グレイと呼ばれる邪悪な小人宇宙人による地球征服の隠謀がクローズアップされるようになってきた。その大まか

▼アルゼンチンのバルカレーという場所の南方で、アントニオ・レペール氏が1974年に撮影したというUFO。典型的なアダムスキー型円盤である。

なシナリオは、ざっと次のようなものである。

まずMJ―12委員会は、地球を訪れたグレイの全権大使と極秘協定を締結した。その協定によって、小人宇宙人からUFOの推進装置といった超高度のテクノロジーを提供してもらう代わりに、グレイが人間を誘拐して遺伝子工学の実験を施すのを黙認したというのだ。また、極秘協定にもとづいて、米政府と小人宇宙人が共同管理する地下秘密基地がアメリカ国内にいくつか建造された。

ところがそのうちに、小人宇宙人が勝手に協定を破り、地球人をどんどん誘拐しては非人道的な実験を繰り返していることが判明した。このためニューメキシコ州の地下基地で働いていた地球人の科学者たちが研究を放棄して対立状態になった。そして、ついには武力抗争にまで発展し、多数の科学者と軍人が殺害されてしまう……。

こう書いてしまうと、なんだかB級SF映画の出来の悪い筋書のような感じがしてくる。まさしく奇想天外なストーリーで、普通の人ならまず眉に唾をつけることだろう。

ところが、アメリカの一部のUFO研究者たちの間では、こうした怪情報やニセ情報が飛び交い、お互いに相手を批判しあうという救いがたい状況におちいってしまった。しかも、軍や秘密機関のエージェントが暗躍し、UFO研究者たちに対してさまざまな情報操作を行なっていることが判明し、そのはっきりした証拠も出てきた。

そのあたりの事情を調べて単行本にまとめるのに、当初の予想以上に手間取ってしまったわけである。

グッドという人物と、その活動

それはともかく、いろいろと情報を集めているうちに、なかなか興味深いUFO研究者がいることを知った。そこでこの機会を借りて、ティモシー・グッドというイギリスのUFO研究者を紹介してみたいと思う。

ティモシー・グッドは一九四二年にロンドンに生まれているが、まるでローマ神話に登場する戸口の守護神ヤヌスのように二つの顔をもっている。

グッドはプロのバイオリン奏者としてロンドン・シンフォニー・オーケストラのメンバーに加わり、一九六三年から一四年間にわたって世界各地を演奏旅行している。一九七六年にロンドン・シンフォニーを離れてから、グッドはもっぱら軽音楽に専任するようになる。ポール・マッカートニーやジョージ・ハリソンといった元ビートルズのメンバーのレコード録音にバイオリニストとして演奏したり、映画『バットマン』や『危険な関係』の音楽にも参加したりしている。

このように彼はプロのバイオリン奏者として名声を確立しているのだが、同時にUFO研究の分野でも世界のトップクラスにランクされている。

ティモシー・グッドがUFOに関心をもつようになったのは、一九五五年にドナルド・キーホーの『The Saucers Are Real』（空飛ぶ円盤は実在する）を読んでからだという。民間や軍のパイロット、あるいは航空管制官といった信頼できる人々が目撃証言をしていることに強い印象を受けたのだそうだ。

けれども、グッドが自分で調査を始めるようになったのは、一九六一年に入ってからだった。そのきっかけは、米空軍のUFO調査機関として有名なプロジェクト・ブルーブックの元調査主任エドワード・ルッペルトの古典的な名著『The Report on Unidentified Flying Objects（未確認飛行物体に関する報告書）』を読んだためだそうだ。したがって、ざっと三〇年の調査経験があることになる。しかし、UFO研究者としての彼の名前が一躍有名になったのは、なんといっても一九八七年に問題のMJ―12文書のコピーを世界で最初に公表してからである。

これには、グッドの多彩な人脈が大きく寄与している。彼は英国政府の高官など名士たちにコネがあり、たとえば彼の著書『Above Top Secret（超最高機密）』には、英国の元幕僚長で上院議員のヒル・ノートン卿が序文を寄せているほどである。しかも、グッドは表で顔がきく上に、陰の世界で活躍している英米の情報機関の関係者たちの中にも多くのインフォーマント（情報提供者）をもっている。

そうした情報機関に勤務しているある匿名の人物（グッドはCIAの関係者とだけしか明かしていない）が、米政府の最高機密扱いになっているMJ―12文書のコピーをグッドに提供したのだという。彼はロンドンで発行されている『オブザーバー』という週刊新聞にこの情報を流した。それが大手通信社を通じて全世界に配信され、MJ―12をめぐる大騒動へと発展していったわけである。

英国防省の極秘UFO調査センター

グッドは『Above Top Secret』にそのMJ―12文書を収録しているが、この著書は一九八七年に出版されると英米で大変な評判になった。イギリスではノンフィクション部門でベストセラーの第二位に、またオーストラリアでは堂々第一位に輝いている。日本でも一年ほど前に『トップシークレット』という題で二見書房から翻訳出版されたので、ご存じの方も多いだろう。

ただ、原著が索引を含めると六〇〇ページ近くもある大作なので、翻訳では大幅に省略されてしまっている。このあたりに、日本では彼の著書があまり評判にならなかった原因があるのかもしれない。

このグッドの力作は、世界中の政府

が重大なUFO情報を一般大衆の目から隠してきたことを実証する目的で執筆されたもので、アメリカ合衆国やイギリスをはじめ、世界各国のUFOに関する公式文書が満載されている。

しかし、なんといってもグッドの最大のスクープは、英国防省がウィルトシャー州のルドロー・メナーに三〇名の職員を擁する極秘のUFO追跡ステーションと調査センターを構えて、二四時間体制で取り組んでいるとスッパ抜いたことだろう。

原書が出版されてから、『ヨークシャー・イブニング・プレス』のロバート・ボーモントという記者は、これが事実がどうか確かめようと思って英国防省に問い合わせた。すると、英空軍のルドロー・メナーはUFO追跡ステーションではないし、一般人からの目撃報告を受け付けるようなこともしていないという返事だった。

そこでボーモントはルドロー・メナーに直接電話して、UFOを目撃したので報告したいのだがと言ってみた。すると職員は大喜びで、彼から詳しく話を聞き出したという。

その他にも、原著には数多くの興味深いエピソードが収録されている。たとえば、有名なコニストン円盤撮影事件について、エリザベス女王の夫君であるエディンバラ公フィリップ殿下がひとかたならぬ関心を示したという記述がある。

一九五四年、スティーブン・ダービシャーは、従弟のエイドリアン・マイヤースと共に、英国のランカシャー州コニストンの近くで空飛ぶ円盤の写真を二枚撮影した。その物体は、ジョージ・アダムスキーが撮影した有名な円盤写真と驚くほどよく似ていた。

この事実に感銘を受けたエディンバラ公フィリップ殿下は、一ヵ月ほどたってから、事件の詳細を彼の副官の一人に説明してもらいたいと言って、スティーブンをバッキンガム宮殿に招いている。そしてスティーブンへのインタビューの完全な記録は、ちょうどその時、オーストラリアにいたエディンバラ公の元に送り届けられたという。（ロンドンで発行されている『サンデー・ディスパッチ』の一九五四年三月二八日号の記事による。）

一九八五年になってから、ティモシー・グッドがこの新聞記事が本当かどうか問い合わせたところ、エディンバラ公はアンドリュー・ウィグラム少佐の書簡を通じて、事実だとはっきり認めたのである。

アダムスキーに関心をもつエディンバラ公

しかもエディンバラ公は、アダムスキーがデスモンド・レスリーと共同で執筆した著書『Flying Saucers Have Landed（空飛ぶ円盤は着陸した）』（新アダムスキー全集第一巻『第二惑星からの地球訪問者』第一部に収録）について、一九六二年のディナー・パーティーの席上でエディンバラ公が発言した内容の引用をグッドに許可した。

「UFOが実在すると信じるに足る理由が数多くあります。信用できる目撃者たちから、あまりにも多くの証拠がもたらされているからです。『Flying Saucers Have Landed』という著作には、多数の興味深い事柄が含まれています」

UFO問題に対するエディンバラ公の関心は五〇年代から変わらず続いていて、世界のUFO専門誌の中でもトップクラスに入る『フライング・ソーサー・レビュー』をいまだに定期購読しているという。

なお、スティーブン・ダービシャーが撮影した二枚のコニストン円盤の写真については、それがアダムスキー型円盤にそっくりだという理由から、インチキだと決めつけるUFO研究者が少なくない。

これに関してグッドは、一九八六年にスティーブンから彼の元に届いた書簡（八月九日付け）の一部を公表している。それによると、当時、スティーブンは大勢の人々から嘲笑され、攻撃の矢面にたたされたため、絶望的な気持ちになってしまったという。

「なんとも大変でした。ずっと昔の出来事で、もう一度あの迷路の中をさまよいたくはありません。残念なことですが、写真のネガは盗まれてしまいましたし、紙焼きはすべて紛失してしまいました」

証拠を盗まれたロドファー

貴重な証拠の盗難といえば、ロドファー・フィルムとして知られる8ミリカメラで撮影したアダムスキー型円盤のフィルムも、そうした被害にあっている。

一九六五年二月に米国のメリーランド州シルバースプリングにあるマデリン・ロドファー夫人の自宅の外で、ジョージ・アダムスキーは夫人の見守る中で8ミリのカラームービーを撮影した。これが論議の的になったロドファー・フィルムである。

そのときの様子を取材するため訪れたグッドに対し、マデリンは次のように語っている。一週間後、現像されたフィルムが戻ってきたときには、フレームの多くに明らかに違った点があり、何者かによってすり替えられた形跡があからさまだったというのだ。

「彼らはオリジナルのフィルムを持ち去ったのです。そして、オリジナルの一部を映写して撮影し直し、インチキなフレームを間に挿入したのだと思います。私の手元に戻ってきたフィルムは、オリジナルとは似ても似つかぬ代物だったのです。」

幸い、撮影した二五フィートのフィルムのうちには、マデリンたちが記憶していたとおりの機体が写っているフ

◀一九六七年三月三〇日、ペルーのユンガイでアウグスト・アランダ氏が撮影した一連のUFO写真のうちの一枚。

レームがかなり残っていた。そのフレームは、以前にニューヨーク州ロチェスターにあるイーストマン・コダック社の計画開発主任技師だった光学物理学者のウィリアム・シャーウッドによって分析された。

一九七七年に、シャーウッドは彼の評価の詳細をグッドに伝えている。

「…測定すればわかるように、フィルム（オリジナル）の画像は最大で約二・七ミリである。したがって、九〇フィート遠方の物体なら（直径は）約二七フィートになる。……樹木は大きくて、円盤が接触したと思われる枝はカメラからそれだけの距離があったに違いない。……しかし残念なことに、円盤が枝の背後にいるとはっきり言えるフレームは一枚もなかった。したがって、距離について結論を下すことができず、このため大きさについても同様である。……オリジナルのフレームのいくつかでは、丸窓を見ることができる」

グッドが撮影現場で行なったテストの結果でも、カメラのレンズを広角にセットすると（撮影のときにはそうなっていた）推定した大きさの物体が推定した距離にあれば、フィルム上ではちょうどその大きさになることが確かめられた。

このフィルムの不思議な点の一つに、機体の輪郭が時折奇妙な変形をすることがある。シャーウッドは、その理由について、強力なフォースフィールド（重力場）によって視覚の歪みが生じるからだろうと考えている。

いくつかの航空機メーカーで航空技師・設計者として働いた経歴があるレオナード・クランプも、同じ考えを表明している。彼は先駆的な業績である『Piece for a Jigsaw』（この著作は以前に「続・宇宙・引力・空飛ぶ円盤」という題で『UFOと宇宙』に連載された）の中で、この奇妙な効果を説明する理論を提示している。

クランプは、この著作を発行する前にはシルバースプリングのフィルムを見ていなかった。後で、それが自分の仮説を裏づけるものだと知って大喜びしている。シャーウッドやグッドと同様に、クランプもフィルムが本物だということをまったく疑っていない。

けれどもアダムスキーの死後、マデリン・ロドファーはさまざまな嘲笑と困惑を経験した。そして、「インチキ・フィルム」のコピーは、そのほとんどすべてがアメリカ国内やその他の場所で盗まれてしまったという。

テレパシーに応えた異星人？

こんな記述が『Above Top Secret』にあることからも、グッドがジョージ・アダムスキーの体験に並々ならぬ関心を抱いていることが分かる。実は、一九六一年ごろから彼はアダムスキーをはじめとするコンタクティーに興味をもつようになり、一九六三年に初めて渡米したときにはさまざまな関係者から話を聞いている。

そしてグッドは一九八三年に、UFO研究者の草分けとして有名なスイスの故ルー・チンスターク女史と共著で、『George Adamski The Untold Story（ジョージ・アダムスキー　語られざる物語）』を出版している。

この本については話には聞いていたが、まだ目を通す機会がなかった。そこで、遅ればせながら読んでみたところ、グッドは手放しでアダムスキーを擁護しているわけではないことが判明した。アダムスキーの主張にはいくつか矛盾が見られるとグッドは指摘している。しかし基本的に、彼がアダムスキーの体験を肯定する立場に立っていることは間違いない。

この本で特に興味深いのは、グッドが彼自身の二度にわたるテレパシー・コンタクト体験を紹介していることだった。

最初は一九六三年一一月のことで、グッドはロイヤル・フィルハーモニック・オーケストラの一員としてアメリカに渡った。その演奏旅行ではロサンゼルスも訪れることになっていた。絶好のチャンスだと考えたグッドは、バスでビスタに住むアダムスキーを訪れる決心をした。だが、どうしてもスケジュールの調整がつかなくて、この計画は断念している。こうしてアダムスキーとの会見の機会は失ったけれども、グッドはそれをつぐなってくれるような不思議な体験をすることになる。

一一月一三日のこと、グッドたちオーケストラの一行はアリゾナ州のツーソンを発って、バスで五〇〇マイルかなたのロサンゼルスをめざしていた。行程の半ばほどを消化し、アリゾナ州とカリフォルニア州境近くまできたと

▶アフリカのチャドで一九七三年六月三〇日に撮影されたUFO。撮影者不詳。

き、道端のレストランでバスが停車した。

グッドは同僚たちと一緒にテーブルを囲みながら、並んで順番を待っている客の顔触れを何げなく観察していた。そして、一人の少女に注目した。その少女はブロンドのボブヘアーで、透き通るような肌をしていて、とても小柄だった。その少女の雰囲気がグッドの関心をかき立てたのである。

他の惑星の人々が地球人の間にまじって生活し、働いていると最初に公言したのはアダムスキーである。そして彼は、実際にレストランやホテルのロビーといった人目を引かない環境でスペースピープルとコンタクトしたと語っている。

他のコンタクティーたちからも同じような話を聞かされていたグッドは、この見知らぬ少女にテレパシーでコンタクトしてみようと考えた。

《あなたは別の惑星からやってきたのですか?》

すぐには反応がなかったが、彼女は列から離れてグッドのテーブルのそばを通り過ぎる際に、立ち止まってほほ笑みを浮かべると、一礼をした。そしてまったく無表情に戻って、レストランの離れた場所へと歩み去った。

グッドはレストランの正確な所在地は記憶していないが、すぐ近くのハイウェイの標識がデザートセンターだったことを覚えている。デザートセンターといえば、アダムスキーが金星人オーソンとコンタクトした歴史的な場所である。グッドには単なる偶然の一致だとは思えなかった。

応答したもう一人の異星人?

最初のコンタクトではまだ確信がもてなかったグッドも、それから四年後にやはりアメリカで同じような体験をしたことで疑いがふっ切れる。

二度目は一九六七年の二月のことで、グッドはロンドン・シンフォニーの公演旅行でニューヨークのパーク・シェラトン・ホテルに滞在中だった。

その日の午後遅く、グッドはマデリン・ロドファー夫人との最初のインタビューを終えて、ホテルに戻ってきた。彼女はアダムスキーと同じようにスペースピープルと会見したことがあると語り、そうした会見はしばしば公共の場所で行なわれたと説明した。

そこでグッドは、本当にスペースピープルとコンタクトができるのかどうか、このホテルのロビーでもう一度試みて、はっきりさせようと決心した。彼はロビーのソファーに深く腰を下ろして、テレパシーで次のように要請してみた。

《もし別の惑星から来訪した方の誰かがこのニューヨーク付近にいるのなら、どうか私のすぐ隣に腰をかけて、そのことを証明してください》

二〇分ほどの間に大勢の人々がやって来ては立ち去っていった。けれども、一人の男性が突然ロビーに入ってきたとき、グッドはその人物の風采と物腰に注意を引きつけられた。

問題の男性はチャコールグレイのスーツを着て、ホワイトシャツに黒いネクタイを締めている。年齢は三五歳ぐらいで、身長は五フィート一〇インチ、髪の毛はブロンドでカールしていた。肌の色は浅黒く、体格はみごとに均整が取れていた。彼は近づいてくると、グッドのそばに腰かけた。

彼はアタッシュケースから『ニューヨーク・タイムズ』を取り出すと、何か意図があるかのようにページをめくりはじめた。その男性が新聞を折りたたみ出したとき、グッドはテレパシーで質問する機会だと感じた。

《あなたは別の惑星からやってきたのですか。もしそうなら、右手の人差し指を鼻の右側に当てて合図してみてください》

すぐさま、まさにドラマティックな形で反応があった。グッドがテレパシーで送信したとたんに、その男性は指示されたとおりのことを実行したのだ。あまりの驚きで言葉を発することもできずに、グッドは次にどのようなことが起きるのか待ち受けた。

グッドはさらにテレパシーを送ってみたが、何も反応はなかった。二人は数分間、沈黙したまま座っていた。それから、男性はやおら立ち上がると、グッドの右側後方の四・五メートルほど離れたところにあるショーウィンドウへと向かった。

グッドはその様子を盗み見していたが、男は展示されている品物にはほとんど関心がないようだった。さらに数分して、男はグッドを心の奥底まで探るようにじっと長い間見詰めてから、くるっと向きを変えて七番街へと出ていった。それきり二度とその男性を見かけたことはないという。

これら二回のコンタクトは、いずれも「他の人々にとってはまったく価値がないものだろう」とグッドは語って

▲1957年10月16日、米ニューメキシコ州ホロマン空軍基地付近でエラ・フォーチュン嬢が撮った名高いUFO。

いる。しかし、少なくとも彼にとっては、この体験がきっかけとなって、UFO問題に対する態度が大きく変化することになる。

地球上で暮らしているスペースピープルについてアダムスキーの語っていることは、間違いなく真実だと確信できるようになったのである。

すべてはアダムスキーに帰着する

MJ―12をめぐる騒ぎの渦中で、グッドはいくつかのお互いに関係のない情報提供者たちから、この地球上に宇宙人の基地がいくつか存在すると知らせられたという。それが悪名高いグレイなどの邪悪な宇宙人によって運営されているかどうかはわからないとしながら、グッドはまったく別の、もっと人類にそっくりの宇宙人が地球を訪れて、基地を設けていることについては確信があると語っている。

その確信には、すでに紹介した彼の個人的な体験も大きく寄与している。彼は今でもニューヨークを訪れるたびに、思い出のパーク・シェラトン・ホテルに宿泊するという。

また、グッドがきわめて信頼できる情報では、宇宙人のグループと何人かの科学者との間で協力関係が取り結ばれているということだった。

これらの重要な情報は、結局のところ、その源までさかのぼっていくと、すべてジョージ・アダムスキーに帰着する。宇宙人との協力関係、あるいはアメリカ国内にある宇宙人の地下基地といったことを最初に公に口にしたのはアダムスキーだった。これはなんとも興味深い事実ではないだろうか。

それが最近になって、誰かの手により、邪悪な小人宇宙人の陰謀だという形に変形されて、センセーショナルに取り上げられているわけである。

グッドは一九八九年にソ連のレニングラードでTV番組に出演しているが、西欧のUFO研究者で生放送でのインタビューに応じたのはおそらく彼が最初だろう。

なおソ連を訪れたグッドは、現地のUFO研究者たちの間に反目や論争、嫉妬が渦巻いていることを指摘し、これは米国や英国でもまったく同じだと語っている。こうした傾向は世界のどこでも見られるようで、人々のエゴがすべての障害になっている。なんとも情けないことだが、日本もその例外ではないようだ。

現状のままでは、いつまでたってもUFO問題の真相が解明されることはなさそうだ。こうした状況を演出し、陰でほくそ笑んでいるのはいったい誰なのだろうか。それこそ、アダムスキーが主張するサイレンスグループが暗躍しているとしか思えなくなってくる。この世界的な陰謀を打破するために、ティモシー・グッドのさらなる活躍を期待したい。

▲フセイン大統領

How to see Aura
by Akinori Endo

●遠藤昭則

オーラ透視力開発法

フセインのテレビ映像は替玉?

昨年（九〇年）八月二日、イラク軍のクウェート侵攻以来、今年（九一年）二月を過ぎてから、イラクと世界各国との関係が大幅に改善されるようになってきた。

停戦まで、イラクの最高指導者であったサダム・フセインとアメリカのブッシュ大統領の映像は毎日のようにニュース番組で流され、巷ではここぞとばかりにアラブ関係の予言書が売り出された。

いつも思うのだが、大きな事件があるごとにこのような予言書が書店に並び、売れ行きもいいということであるが、はたして予言をしている人というのはそれ以外のときはいったい何をしているのだろうか。今回のイラク、クエート侵攻に関しては予言書よりも普通の我々のほうがはるかによく当たったのではないかと思う。特にGAP会員の方たちは。

去年の一一月だったろうか。ある日の夕食時、テレビをつけるとすぐにフセインの顔がでてきた。それはイラク軍兵士を激励してまわっているときのビデオであった。

たくさんの兵士が喜んでいる顔がフセインのまわりを取り囲み、彼は兵士の銃を持つなどしていた。いかにもこちらの軍は士気が高く、フセインを尊敬しているようであったが、私には次のような映像が見えてきた。

彼を囲んでいる兵士の数は少数で、さらにその外側はカメラマンやビデオ撮影の者たちがおり、そのうえその兵士たちは本当の階級よりも下げた階級で写っているというものであった。

「なんだかおかしい」

私はそう思った。そして驚くべきことに、八月頃のフセインのオーラ（赤に緑と黄色とがボツボツあるようなもの）が見えず、そんなことよりも、ほとんどオーラを感じられないのだ。

（オーラとは何かについては、「UFOコンタクティー」103号を参照されたい）

私は妻に、

「フセインは命を狙われてやられてしまうかもしれないよ」

と一言いった。

その後数日間、彼がそうなるのだろうと思いこんでいたのだが、何かわりきれないモヤモヤが心の中にあった。

「以前の彼のオーラとは違う！」

この言葉がときどき頭をもたげてきたのだ。どうもそれは気になっていた。しかしだから何なのかというところまで考えたくはなかった。

「フセインが違う人物だったらオーラも違うはずだ」

と心の中である日、一人ごとを呟いた。

「でも同じ人物であんなにオーラが変わるものかなあ—。そうだ。彼が二人いたらオーラは違って当然じゃないか」

私は飛び上がらんばかりに驚いた。テレビで放映されたのは、実は本当の彼ではないのではないか！

それ以来彼がテレビに登場するたびにオーラをよく見ていたが、やはり八月頃のオーラとは異なっていた。これは戦禍が激しくなって彼が憔悴しきっていたせいでもない。どうもテレビ用の人物（いわゆる替玉）がいたとしか思えないのだ。そして身長も少し高いような気がした。

停戦後の二月のある日、彼は久しぶりにテレビに登場した。しかし音声は入っていなかった。これは不思議である。彼自身の声ばかりではなく、その場にいる他の人々の声も入っていないのだ。

ここで一つ考えられる。それは似てはいるが、本当の人物と声が違うために音声が流されなかったという可能性である。もちろんオーラもまた異なって見えた。

オーラの形と色

このようにオーラというのは、相手の個性などがはっきりと出るものであるが、そこには次の三つの形態がある。

(1)放射されているオーラの形

オーラの形は人それぞれ異なっている。これは人体から出ている（という

よりも、その場に元々あって、その中で守られているように人体があると言えるのかもしれないが）その形が、体内の様子や本人の持つ想念によって大きく影響を受けるからだ。

オーラの形にはいろいろなものがある。その例にはいろいろある。その例を図1にあげておこう。

(2)オーラの色

オーラの色は本人を動かしている生命力の振動が人体をどのくらい効率よく動かしているかということと、本人の抱く想念の傾向にかかってくる。

生命の振動が、育ってきた環境的なことや、あまり良くない遺伝的なことがある場合には、振動数は高まらずに抑えられている。また本人の想念が利己的、破壊的な場合もそうであるし、自分が行なってきたことに対する罪の意識によって自分自身を傷つけようとしているときにもやはり振動数は抑えられている。

光の振動数は赤から青へとあるように、オーラも生命の振動数によってそのように変化していく。しかし赤を基本にしているために、赤は低い次元に属するものだと言われているが、そうではない。赤でもその色が純粋に出ており、そして青い色もあってバランスがとれていたら、それで良いのだ。

だから紫は良い色である。それは赤と青を混ぜた色なのだから。

このオーラの色は目で見えるものと次の(3)で述べるように、自分の内部に見えてくるものとがある。しかし両者ともに相手から発せられているものであり、それはこの現象の世界の色に対して内的な世界、つまり相手の中にある〝神の光〟を見ていると言えるだろう。

そして相手のオーラを見るためには自分のオーラ、生命力が充実していなければならない。なぜなら、相手のオーラの情報はこちらの内部にある生命力にやってきて、それが心へと送られるのであるから、受信機側の増幅装置が信号を大きく増幅できるように、大きな電気を使うものでなければならないからだ。

(3) 相手の波動

これは相手が習慣的に発している波動をこちらがキャッチして、それを色として、またオーラの濃さとして感ずる場合である。かなりテレパシックであることが必要であり、これはふだん自分が、自分の内部に湧き起こる印象にどのくらい注意を向けているかということで変わってくる。

例えば、今朝は何だかイライラするぞ、人の歩きかたもせかせかとしているように見える。これは地震が近いのでその波動を感じてそのようになっているのだろうというように。

これは自分の中に湧き起こるものは、すべて自分の心が起こしているものだと思いこんでいる人には分かりにくいだろう。

本当は人間、特に地球に住んでいる人は、外からの地震などの波動にたやすく動かされてイライラすることがあるのに。だからアダムスキー氏は、このような面においても地球人の多くは生きているゾンビのようだと言われたのかも知れない。人に会う場合でも、自分の空想その他、目・耳・鼻・口の四つの感覚器官のどれかが作りだしている映像などをどかして、素直に自分の全身が感じていることに敏感になると相手の波動を受け取って、相手がどのような人であるのかということに気付き、オーラの様子も感じられるようになってくる。

このような三つの形態を、オーラが見える人は自動的に一度に感じ、また見ることができるようになっている。だからほんの少し見ただけで、いろいろなことが分かってくるのである。

ただし分かってくるといっても、どんなことでもすぐに分かってしまうということではない。それは相手を知ることの突破口となり、相手を理解し調和することのできる方法を探り出すことにもなるのである。

最後のヒトラーも替玉?

ところで替玉といえば、第2次世界大戦でのヒトラーがよく使ったと言われている。（また顔はよく似ているが、身長の異なる彼の写真なども何かの本で見たことがある）

ヒトラー自身には謎の部分が多く、それゆえ余計に神秘化されているようだ。特に彼の死に対しては、自殺説、逃亡説など諸説紛々としており、どれが本当なのかよく分かってはいない。

一番有力なのが、一九四五年四月三〇日に、結婚して間もない妻のエバ・ブラウンと地下室で短銃自殺した後、味方の兵隊によって焼かれて土の中に埋められたというものである。

ソ連軍が迫っている中で、彼は逃げ道を失ったのであろう。

しかしここで問題がある。もしそこに本当のヒトラーと妻のエバ・ブラウンがいたらということである。

図1

▲ヒトラー

最近、埋められていたところから発見されたというヒトラーの義歯の写真をある冊子で見た。今まで謎とされてきた彼の死について、この際、透視してみるにはいいときだろうと思い、その写真と、その写真の背後に見える映像に注意を向けてみた。

顔の小さい、やせ型の男が見える。しかしどうもヒトラー自身よりも顔の大きさが小さすぎるような印象を受ける。これは本物のヒトラーではないのではないか、と私は思った。

ソ連軍が来ている時に結婚式を挙げるというのもどうも宣伝的過ぎる。それで本物のヒトラーを隠しているようにさえ見えるのだ。

真相はどうなのだろうか。彼はよく言われるように南米に逃げたのだろうか。

ナチス・ドイツのUFO

ところで謎といえば、彼が率いたナチス・ドイツではUFOが造られていたという話を最近よく聞く。第2次世界大戦中に科学者を多く使ってその研究をさせ、オレンジ色のフォースフィールドに包まれて飛行するようなUFOを造ったということであり、現在でも南米のどこかでヒトラーの意志を継いで研究を重ね、それを使って他の国々に侵略をしようとしているとも言われている。

では、そんなに進歩したUFOをナチス・ドイツでは造ることができたのだろうか。

V2号という現在のロケットの前身であるミサイル兵器が当時開発されてヨーロッパ諸国、連合軍側を恐れさせたが、そのV2号でさえ、現在のロケット技術から見ればはるかに遅れているといわざるをえない。

その程度の科学技術でUFOが造られたのかということには疑問が残る。実はナチス・ドイツが開発した円盤型兵器の飛行実験をしている記録映画が現在でも残っており、それがテレビで放映されたのを見たことがある。

形は円盤と同じなのだが、それにジェット・エンジンがついており、離陸時からもうすでに高速を出しているのである。しかし中に乗っていた人間はそのスピードに耐えられなかったようで、多くの犠牲者が出たと伝えられている。高速飛行にはジョージ・アダムスキー氏の『第2惑星からの地球訪問者』(新アダムスキー全集第一巻)にあるように、自動検出器が必要となってくるのであろう。それでなければうまく飛行できないのだ。

しかしナチス・ドイツの円盤型兵器のスピードは他の惑星の人々が建造した円盤の足もとにも及ばないものだった。当時としては最高速の乗り物であったろうが、それは現代のジェット戦闘機よりも遅いものである。だからそれを見た近所の人々などは、初めて見るものにこの世のものとは思えない驚きを感じたことだろう。

さまざまな実験機の図や設計図が残されている。しかしそれらの上に手をかざしても、どんな反発力もあたたかさも感じることはない。

他の惑星のUFO

ところで惑星からやって来るUFOは、推進装置のある辺りからそのようなパワーを感じるのに。したがってその写真を通して、当時のそのUFOのパワーを感じているとも言える。だから写真からオーラが出ているとも言えるのだ。

なぜなら写真を見ている人体内にある生命力、宇宙の意識は空間に、また時間にも制約されないのであるから、過去のその情報が現在の自分の心へとやって来るのは当然である。過去のUFOと現在の自分との距離が全くないとも言えるだろう。

これをオーラのようなパワーとして自分の身体で見たり感じたりするのではなくて、ペンデュラム(糸の先に水晶などのおもりを下げて、その揺れ具合によって物事を探知するもの)によってそのパワーを知ることを研究している団体もある。

アダムスキー氏の撮影したスカウトシップや母船などの写真をイギリスのペンデュラムを専門に行なっているある団体が調査したという書物がある。

それによるとスカウトシップには人体反応があり、またパワーコイルと推進装置のところにも特徴的な振り子の揺れを記録したと書いてある。また母船の端の部分にもそのようなものを記録したとも述べている。

オーラは誰でも見える

私は一九八五年以来約六年間東京本部月例会でテレパシー、遠隔透視、そしてオーラ透視を皆様とともに研究させていただいてきている。そこで分かることは、誰にでも右のような能力はあるということであり、約一カ月間真剣に毎日努力するならば、必ずその能力は出てくるということだ。

最近では会場に来た約七〇～八〇名の方々に前に立っている人のオーラを見ていただき、それを描いてもらっている。月例会の最後にその用紙を集めているのだが、ほとんどの方が約八〇パーセントのオーラが見えている。これは驚異的な数値である。練習はそんなに難しいことではないのに、成果がはっきりと現れてくるのだ。これは誰の中にもオーラを見る力が内在していることを証明していると思う。

「空想で描いてもいいですから、たぶんこの辺りに、このように見えるだろうと思うものを描いて下さい」

と私は会場の人によく呼びかける。

オーラというものは、鮮明な色がつき、境界線がはっきりとしているものだと思っている人には、いつまでたっても見えてはこない。何気なく、たぶんこのあたりだろうと危なっかしげに手探りの状態で調べていく人、このような人こそオーラがよく見えてくるのだ。

オーラは見ることが半分、そして感じることが半分であり、それが組み合わさってはっきりとしたオーラが分かるようになってくる。しかしオーラは、鮮明な色をもってはいない。そこにあるかないかわからないが、なにかあるようだというそのくらいの感触である。

それをオーラの見える人は絵にする。あるかないかの色を描いていく。でも色として表すには、はっきりとした色を使うしかない。それでできあがったものを見て、オーラがよく見えない人は、

「すごいですね。こんなに色がついて見えるのですか。」

というのである。

透視映像も同じことである。空想のような感覚で映像は見えてくる。ただ空想と異なるところは、自分自身が介入しておらず、その映像を客観的に眺めているということである。だからここでもくっきり、はっきりと映像が見えてくることを期待している人にはなかなか見えてこない。

見え始めの人は、何かよく分からないが薄い色が見えてくる。そしてその中にぼんやりと何かが見えてくる。しかし自分ではそれが分からずにイライラしてくる。その体験が繰り返されて、ある日風呂で頭を洗っているときなどに、ポンとどこかの景色が見えてきたりするのだ。

これは透視の始まりである。その見えているままにしていると、いつもの空想のときの状態とは違うことに気付き始める。テレビを見ているような感じなのだ。

このようなことが時々生ずるようになり、自分の心の制約がとり払われるようになってくる。そして見ようとすることが何とはなしに小さな映像となって見えてくるのである。

透視はこのような段階を踏んで見えるようになってくる。オーラ透視も前記のようにほとんど同じことである。

オーラ透視練習法

一、リラックス（細胞群を集中から開放して外へと開かせる）

(1)自分の波動で周囲の空気を浄化する気持ちを起こす。

これはいつも周囲の環境が悪いと思っている人には特に行なってほしい。自分から世の中を良くしていこうという気持ちがなくては能力は出てこないのだ。

そのときに青い霧を周囲に思い描くとうまく出来るだろう。

しばらくその状態でいると、身体から力を自由に発散することが出来るような気持ちになってくる。これは実際にそうなっているのだ。これで月例会の波動が切り替わる。日本の神道でもまず周囲を、そして自分を清めることをするということを聞いたことがある。

(2)両手をゆっくりと上に挙げる

そのときに息を吐きながら、指は軽く開く。そしてきれいな青空の中に全身が溶け込む気持ちになる。上を向く。

両手を挙げている時に前から見ていると、室内のオーラが(1)の時よりももっと大きく、白く変化することが分かるだろう。それだけ手を挙げている人のオーラが外に強く放射されていることになる。リラックスしているのにオーラが濃く広くなる。地球的な知識からいうと不思議なことであろう。一般には、力むとパワーがよく出ると言われているのだから。

オーラがそのように変化するということは、全身の細胞群の働きが内側に集中していたのが外に広く開くようになってきたということである。外の波動により注意を向けるようになる。これはオーラ透視のポイントである。

(3)挙げていた両手をゆっくりと身体の前を通るようにおろしてくる。

その時に指先に注意を向けていると何かモヤッとした感触を受ける。そして指の周囲の空気が濃くなったようにさえ思えてくる。これはオーラを感じていることであり、その感触を覚えることは大切である。この練習の延長上に気功法がある。したがって気功をしている人のオーラは濃くなっている。

(4)ゆっくり呼吸する

本当はヨガの呼吸法にあるように、片方の鼻で吸い、息を止め、もう片方の鼻で吐き、そこから息を吸って息を止め、一番始めの方から息を吐くという方法をゆっくりと行なったほうがよい。

左右の鼻の臭神経は左右の脳へとつながっており、左右の鼻孔のバランスをとることによって、左右の脳のバランスがとれるようになるからだ。そしてそれによって脳から脊髄の左右にでている自律神経のバランスをとることができるのである。

外部からテレパシックにキャッチした波動は神経を通って脊髄、そして脳へと増幅されて行くとアダムスキー氏は『超能力開発法』（新アダムスキー全集第二巻）の中で述べている。左右の自律神経間のバランスをとることが必要だと説いた人はまだいない。しかし『ヨハネ黙示録』の中では心の働きが『赤い龍』などとなって左右の自律神経間のバランスを崩そうと登場してくる。人間の自律神経は脊髄を中央の柱としてそれに軸対象に左右に走っている。だから左右のバランスは大切なのだろ

う。身体も一種の脳であると言っている学者もいるのだから。

二、背骨の調整

(1)背骨を下から一つ一つ思っていく。それは意外と簡単にできるはずである。

(2)基準というものはないので、正しいと思えれば次へ進んでいく。正しくないときはそれが正しいといえる状態になるように身体をゆっくりと動かしてみる。しかしそれにこだわらないように。

三、幸福になる呼吸

これは私がある声楽家の方に教えていただいた呼吸法である。

(1)背骨を伸ばして、背骨の両側が開くような気持ちでゆっくりと息を吸う。このときに目は閉じないように。

(2)そしてゆっくり吐き出す。そのときに幸福感が目のところにわき起こってくれば大成功。

わき起こってこない時には、

「私は幸福です！」

と強く思う。

この呼吸法もオーラを広く、濃くする方法である。

なぜオーラを広く濃くすることにこだわるのか。それはオーラを見るときには、前述したようにこちらのオーラが広く濃いほうがよく見えるからなのである。

パワーの出がよいということはそれだけ想念波動の往来が盛んだということであり、相手のオーラの情報も多く得られるということでもある。

四、オーラを見るために

(1)オーラは人間その他万物から発せられている神性なものであるということを三回ぐらい思う。これは心に相手の意識を見ようとさせることにもなるのだ。

(2)自分の目という窓を通して、宇宙の意識が見ていると心に言い聞かせる。そうすると結果の世界よりも内部にわき起こる印象の世界に注意が向くようになり始める。

この時点で、自分の内部に何らかの色を感じる人がいるだろう。

(3)これまで毎月七〇人以上の人がオーラを見ている。だから自分でも見えているのだが、それに気付いていないだけだと言い聞かせる。実際、それだけの人が見ているのだ。

五、どのようなものを見ていくか

(1)自分の手の指

指先に三通りの見え方（図2）のどれかが見えていればよい。

(2)他の人の肩から上

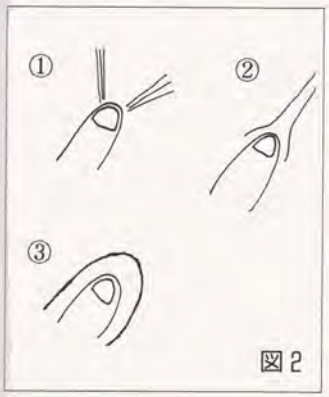


図2

肩から上の辺りに、何か空気が線のようになっているところを探す。（図4）これは大きな自信につながっていく。

図3

(3)色を見るためには、まず自分の身体の中にどのような色が見えているのかということに注意を向ける練習が必要である。

(4)それから相手の身体の中にはどのような色があるのかと見てみる。これは感じるといったほうがいいだろう。

(5)相手と別れた後で、その日に、この人はどんな色だったのだろうと考える。すると色が出てくるだろう。後日会ってその人の周囲を見る。すると、思い浮かんだその色をオーラの中にもっていることが分かってくるだろう。これはそのような経験をたくさん積まなければ分かってこないのだが。しかし色は確実に見えてくる。ただ、ここにこんな色があるだろうという感じで。

このようにオーラ透視能力というのは、あらゆるテレパシックな能力の基本となるものである。人間と人間どおしがうまく生活できるためにも、そのような能力はこれからの時代に必要となってくるのだろう。そしてそのような人が多くなればなるほど、世界は仲良くならざるを得ないのだ。なぜなら〝神の光〟であるオーラを見ようとする人がますます増えていくのであるから。そしてそのときにこそスペースピープルは私たちにもっと接近してくるだろう。

彼らは仲良くしたがっている。しかし地球人が――。これが彼らの昔からの悩みの種ではなかっただろうか。

運動がよくできる子は自分の運動能力に疑いを持たずに、有名なプロ選手の恰好を真似てどんどん新しいことにチャレンジしていく。運動が苦手な子は、好きなプロもおらず、ああどうしようと嘆く。

オーラ透視能力も同じである。自分が超能力者になったつもりでどんどん練習していくしかないのだ。

最後に重要な事をつけ加えたい。オーラ透視能力があると、地球の路上を歩いている異星人を見抜くことができるようになる。スペースピープルのオーラは地球人のオーラとは全然異なっており、色は各種あるけれどもすごく透明度の高い輝くばかりの素晴らしいオーラである。ただしそのような人を見かけた場合、すぐに走り寄って「あなたは別な惑星から来られた方ですか」と聞いたりしてはいけない。黙って見守っているほうがよい。

『ベーシック・サブリミナルテープ（C-60 両面 サブリミナル）新登場!!』

●無料で効果を試せるチャンス!!
あなたはどこまで変われるか？

日本全国で話題になっている"α波音楽に耳に聴こえないメッセージを同調させた"『サブリミナルテープ®』。その人気シリーズのベーシックテープを、下記のシステムにて無料でお届けします。
今すぐお電話・お八ガキでお申込み下さい。

下のテープの中から、お好みのテープを1本無料進呈!!

BGMとして聴くだけで効果が!!

このサブリミナルテープ、耳に聴こえるのは、うっとりするような美しいメロディーの心がゆったりとくつろいでくる静かな音楽だけです。（日本の曲でいえば"喜多郎"の音楽にイメージが似ている。この音楽だけでもストレスを解消し、気分をさわやかにするすぐれた効果がある。）しかし、実はこの音楽に、ハルバーン博士を始めとする専門家の手によって高度な音響テクノロジーを駆使して、ある心理学的な言葉のメッセージが耳に聴こえない周波数に変換されて入っているのです。（潜在脳に独特の刺激を与える音楽の波長が、耳に聴こえないメッセージの波長を潜在脳へ運び、植えつけてしまう。）

この音楽に交って入っている"耳に聴こえない心理学的メッセージ"が、ただテープの音楽を聴いているだけで、"記憶力・集中力等が自然に高まる"、"仕事・勉強の能率が驚くほど上がる"、知らず知らずのうちにまわりの人から好かれるようになってしまう"という現象を引き起こす秘密なのです。

「本を読んだり趣味に熱中している時に、BGM音楽として聴き流しているだけで夢がかなってしまう」——このアメリカの苦労いらずの科学的プログラムの効果を実際に自分自身の手でお試し下さい。

サブリミナルテープ（ベーシックテープ）申込み要項

サブリミナルテープ頒布会各シリーズのベーシックテープを、次のようなシステムにて無料でお届けします。以下の要項を良くお読みになり、ご希望のテープをお申込み下さい。

●ベーシックテープは、各シリーズの"第0回目の頒布テープ"としてお送りいたします。

●お届けするベーシックテープは、お申込みになられたシリーズの、第1回目以降のテープご購入の有無にかかわらず、無条件で無料です。

●ベーシックテープをお申込みいただきますと、そのシリーズの頒布会員に自動的に登録され、キャンセルの通知がない場合は、翌月よりシリーズ第1回目以降のテープを毎月自動的にお送りいたします。

●第一回目以降は一年間の会員制の頒布会方式でお届けします。毎月各テーマ別のテープを一巻ずつ（テーマによっては二巻）お届けしていきます。お支払いは毎月テープ到着後に、4,800円（送料300円）。第一回目およびそれ以降もテープ到着後5日間の無料試聴期間を設けていますので、気に入らない場合は自由に返品できます。又、途中退会も自由です。

●ベーシックテープをご使用の結果、ご満足いただけなかった場合は、テープ到着より3週間以内に「キャンセル」のご連絡を電話か書面にていただければ、第1回目以降のテープは発送されず、そのまま「退会」となります。

●「キャンセル」の場合でも、お届けしたベーシックテープのご返品は必要ありません。そのままご愛用ください。

ベーシックテープを2種類以上お申込みの場合

原則として、無料で提供させていただくベーシックテープは一種類（一本）だけですが、複数のベーシックテープのお申込みに関しましては、以下の条件で申し受けます。

●お申込みいただいた複数の内、1本につきましては、第1回目以降の頒布テープご購入の有無に関係なく無料。他の何本かは、同じシリーズの第1回—第3回までの頒布テープをご購入になった場合のみ無料。ご購入いただけなかった場合は、2本目以降のベーシックテープ1本につき3,000円（送料込）を申し受けます。

●申込み限度は3種類（3本）まで。

〈申込み方法〉

左記へ「○○シリーズのベーシックテープ申込み」と電話かハガキでお申込みください。（通常のサブリミナルテープ頒布会申込みとの混乱を避けるため、必ず「ベーシックテープ申込み」とハッキリご明記ください）

〒107 東京都港区南青山1—26—4
アメリカンライブラリー社 1-97係
電話 03(3479)5864
（受付24時間 日・祝日も受付中）

■無料でお届けするサブリミナル・ベーシックテープのタイトル■

（下記のシリーズの中から1つお選び下さい。）

シリーズ名	ベーシックテープのテーマ・タイトル
①恋愛成功(BM)シリーズ	「女性への緊張感の除去」
②積極的性格(PC)シリーズ	「本来の自分を取り戻す」
③魅力的性格(AS)シリーズ	「自分自身への自信」
④脳力開発(AD)シリーズ	「自分の能力への自信の強化」

第一回目以降にお届けするテープのテーマ名は次の通りです。

① これで女性も思いのまま 恋愛成功シリーズ(BMシリーズ)

BMシリーズのお届けする各テーマの内容は、●個性的魅力を出す●女性と理想的関係を持つ●理想的パートナーを得る●女性への絶対的自信●積極的思考の習慣●失敗への恐れの完全克服●達成能力の獲得●他人を無条件で引きつける●性エネルギーの強化●思い即行動●自分への絶対的信頼●あふれるばかりのエネルギー

② 内気を克服し社交的人間に 積極的性格シリーズ(PCシリーズ)

PCシリーズのお届けする各テーマの内容は、●積極的自己イメージの確立●コンプレックスの除去●自意識過剰の抑制●人見知りの克服●ストレートな感情表現●異性への積極性の獲得●社交性を身につける●積極的な自己主張の習慣●ダイナミックな行動力の強化●陽気な笑顔の習慣●強烈なエネルギーを放つ●積極的性格の実現

③ 誰からも好かれる人気者に 魅力的性格シリーズ(ASシリーズ)

ASシリーズのお届けする各テーマの内容は、●自分らしさの発揮●自分の魅力の自覚●魅力的パーソナリティーの開発●秘められた魅力の発掘●自分だけの魅力・個性を磨く●魅力的な感情表現●精神的抑圧からの解放●感情の自由な制御●他人への執着からの解放●性格的ゆがみの矯正●いつも魅力的にふるまう習慣●誰からも好かれるキャラクターの獲得

④ 記憶力・潜在的知能を開発 脳力開発シリーズ(ADシリーズ)

ADシリーズのお届けする各テーマの内容は、●記憶力を高める●IQ（総合的知能）の開発●独創的な創造力を身につける●仕事・試験で高成績を上げる●ヒラメキ・直観力の開発●論理的・数学的才能を高める●問題処理能力の強化●頭の回転・キレを磨く●文章表現力・語学的才能の開発●洞察力・高度な思考を身につける●理想的脳波（アルファー波）の強化●独自の才能の発揮

GAP短信 GAP NEWS

■東京月例会関係変更事項

(1)二月より日時変更　日本GAP東京月例研究会は本年二月より開催日を毎月第一日曜日に変更した。そのためか二月の月例会は定員八〇名の会場に約一〇〇名の出席者があり、超満員となって大盛況を呈した。

(2)開始時間繰り上げ　本年五月より開始時間を午後一時から三〇分繰り上げて一二時三〇分とし、終了時間を四時四五分とする。

(3)開催日臨時変更（要注意）本年五月は第二日曜の一二日に、六月は第二日曜日の九日に、七月は第三日曜日の二一日に変更。八月は例年他の場所に変更していたが今年は東京文化会館で第一日曜日の四日に開催。

■「気と悟りの会」で講演

二月一三日夜六時半より八時半まで久保田会長は「気と悟りの会」（主宰＝櫛笥隆恭氏）の招待により、都内品川区立勤労者福祉会館でアダムスキー問題の講演と質疑応答を行なった。

■本誌「日本全国書誌」に掲載さる

本誌UFO contacteeは毎号国立国会図書館に寄贈されているが、一月に同館から発行された「日本全国書誌」一七八六号の目録中に本誌が紹介された。なお本誌と新アダムスキー全集は同図書館で永久に保存されるので、アダムスキーと日本GAPの活動状況の記録も永久に残ることになる。

■デンマークGAP機関誌、講演録を掲載

デンマークGAP機関誌 UFO contact（英文版）本年度第四号は、昨年一〇月に同国コリン市で行なわれた久保田会長の講演の全文をトップに写真入りで紹介した。

■地方支部大会迫る

五月四日（四連休の二日目）山形県天童市で第一二回山形・仙台合同支部大会が開催される。続いて六月二三日（日）には北海道旭川市で第八回旭川・札幌合同支部大会が開催される予定。以上の詳細については本号四七頁の予告を参照の上、早目に申し込まれたい。

■今年度GAP海外研修旅行説明会

今年度日本GAP企画第一三回海外研修旅行「アメリカ東部・西部・メキシコ宇宙ロードの旅」は八月七日より一八日まで実施されるが、この第一回説明会を五月一九日（日）、第二回説明会を七月二八日（日）、午後一時より五時まで左記場所で開催する。未決定の方も出席されたい。

第一回説明会場＝都内、中央区銀座二―二―一七「有楽町ビル北館」六階、会議室。JR有楽町駅下車、銀座側へ出て眼前の交通会館の左側面にそって銀座方面へ二百メートル歩き、外堀通りまで出た位置から道路を隔てた向かい側。デパート・プランタンの並びの左方向（いわゆる銀座通りではなく、その一本手前の大通りなので要注意）。有楽町駅から歩いて徒歩三～四分。

第二回説明会場＝都内、渋谷区渋谷一―一三―九、渋谷タクギンビル六階、AIU保険会社渋谷旅行保険センター会議室。電話〇三―三四九八―二八六八。JR渋谷駅下車、駅前の宮益坂を少し登った左側。駅より徒歩三～四分。いずれも閉会後、付近の料理店で希望者のみの夕食会を開く。

この旅行に関する詳細案内書は本号37頁の広告にあるとおり、ワールドセプントラベル社から申込者に送られる。

■全国ネットワークUFO観測会

既報のとおり五月二四日、日本GAP本部と全国一七支部は夜九時を期して全国各地で一斉にUFO観測会を実施する。詳細に関しては本号44頁の予告を参照されたい。本誌次号でこの観測結果を詳報の予定。

■新アダムスキー全集

当初全八巻をセットとして刊行の予定であった新アダムスキー全集は、ユーコン誌に掲載されながらも新全集に未収録の記事が増えたため、これを編纂して第九巻とし、「UFOの真相」と題して四月末に刊行されることになった。なお第一〇巻「評伝　ジョージ・アダムスキー」も第九巻に引き続いて刊行の予定。これで新アダムスキー全集は全一〇巻のセットとして完結することになる。

■新潟UFO写真展

新潟支部は来たる八月中旬に第六回UFO写真展を左記の要領で開催する。

会期＝八月一一日より一五日まで五日間。毎日午前一〇時より午後八時まで。但し最終日のみは午後五時まで。

会場＝新潟県新発田市「ジャスコ新発田店」三階。JR新発田駅より駅前通りを徒歩二分。駐車場付き。

内容はUFO写真パネル七〇点展示の他、ビデオ「これがUFOだ！」上映、スライド映写による解説、関係書籍販売等。

■今年度日本GAP総会

今年度の総会は九月二二日（二日連休の初日）に東京都中央区銀座七丁目の銀座ガスホールで盛大に実施される。

今年はアダムスキー生誕一〇〇年記念、日本GAP創立三〇周年記念と銘打って、デンマークGAP創立者ハンス・ピーターセン氏が講演を行ない、アメリカから来日出席するダニエル・ロス氏が挨拶をする。詳細予告は本誌次号に掲載の予定。大盛況が予想される。

■ロス氏の連載記事、単行本化

本誌に多年連載したダニエル・ロス氏の「UFO―宇宙からの完全な証拠」が今回絶賛裡に完結したので、これを一本にまとめて中央アート出版社より単行本として今夏までに刊行される。期日、定価は未定。詳細に関しては次号に掲載。次号からはアリス・ポマロイ女史に連載記事執筆を依頼中。

電気バイク開発―充電六〇キロ走行

地球環境保全意識の高まりで低公害のクリーンエンジン開発への期待が高まっているが、本田技研工業は三月九日、電気二輪車の開発に着手したと発表した。排気量五〇ccのスクーター程度の機能を確保しながら、排気ガスと騒音ゼロのバイクを目指す。年内にも実用化に向けた走行テストを開始する。本田では電気二輪車で得たノウハウを将来の電気四輪車開発に役立てる考え。

電動モーターは、緊急時には最高時速六〇キロ程度まで出せるよう設計し、時速三〇キロ程度の通常走行では、一回の充電での走行距離は六〇キロ程度を目標にしている。

今後は充電時の電圧を一〇〇ボルトと二〇〇ボルトのどちらにするかという点や、鉛電池にかわる軽量型電池開発などの研究を進める（1・10毎）。

64メガDRAM開発成功

東芝、富士通、松下電器産業、三菱電気の四社は、二月一四日、次次世代メモリー64メガビットDRAM（記憶保持動作が必要な随時書き込み・読み出し記憶素子）の開発に成功したと発表した。日立製作所は昨年すでに開発を発表しており、日本電気を除いて日本の主な半導体メーカーが九〇年代半ばの量産を目指し64メガビットの時代に入ることになった。これは開発に大きな遅れをとっている米国のメーカーとの技術格差を改めて印象づけることになりそうだ。

発表された64メガビットDRAMのうち、世界最小、最高速となったのが東芝。読み出し時間は33ナノ秒（一ナノ秒は一〇億分の一秒）。同社は一チップ上に約一億四千万素子を集積し、〇・四ミクロンの微細加工技術や、三次元構造のメモリーセルを採用することで、この大きさと性能を可能にした（2・15毎）

初の遺伝子治療が効果―米の研究所

昨年九月、米国で世界初の実験的遺伝子治療を受けた四歳の女児の重い免疫不全状態が改善しつつあることが二月一九日、米国立衛生研究所（NIH）の研究者によって明らかにされた。

女児はアデノシンデアミナーゼ（ADA）という免疫に関係する酵素が生まれつき欠損しているADA欠損症で、通常、大部分の患者は二歳までに死亡する。

NIHのフレンチ・アンダーソン博士らは、患者から取り出した白血球にADA酵素を作り出す遺伝子を組み込み、この白血球を患者の体内に戻す遺伝子治療法を開発、NIHの承認を受けて、これまでに女児に三回の治療を行なった。

アンダーソン博士の同僚、ミカエル・ブリーズ博士によると、白血球に組み込まれた遺伝子が体内で働き、ADA酵素のレベルは正常値の二〇パーセントのレベルまで回復。免疫機構の働きを測る血液の指標も「相当な上昇」を見せている（2・20毎）。

SST開発、"離陸"へ

湾岸戦争の影響で遅れていた次世代の超音速旅客機（SST＝スーパーコンコルド）の機体開発が本格始動することになった。通産省が三月七日、明らかにした。すでに予備調査を行なっている欧米企業連合にわが国が参入する形で、日米欧五カ国による共同研究の初会合が三月中旬に開かれることが正式に決まった。

SSTは現在の「コンコルド」（百人乗り級）の後継機で二百～三百人乗り。時速マッハ二・五の超音速機で、航続距離は一万キロ。実現すれば東京ニューヨーク間は三時間、東京―パリ間は五時間半で結ばれることになる。機体開発では欧米四カ国大手航空機メーカーが共同予備調査を行なうことで合意。

今回、参入が決まったのは三菱重工業、川崎重工業、富士重工業の航空機メーカー三社。実現に向けた課題の解決に当たって、わが国企業の高い技術力が評価された（3・7毎）。

南極上空のオゾンホール史上最大規模

米航空宇宙局（NASA）ゴダード宇宙飛行センター（メリーランド州）の研究者は昨年一〇月一一日、今年の南極上空のオゾンホールを米国の気象衛星「ニンバス七号」で観測した結果、これまでの最大規模になっていると発表した。

南極のオゾン量については、このほど昭和基地の南極地域観測隊の観測から史上最低の月平均オゾン量の値を更新したことが分かったばかり。地球環境の赤信号をNASAの衛星が確認した形だ。

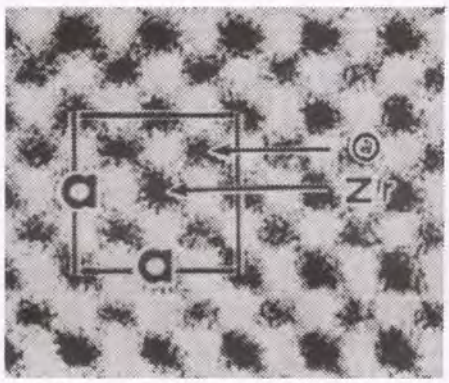
この観測は、ニンバス七号の紫外線吸収度測定から大気中オゾン量を段階的に色分けした地図を作り、オゾン量がどのように減っているかを調べるもの。

同センターのアーリン・クルーガー博士らの分析によると、今年のオゾンホールは、史上最大規模だった一九八七、八九年と同程度の大きさとなった。ホールができ始めたのは八月最終週で、八七、八九年のときより一週間早かった。これまで「西暦の偶数年は、奇数年ほど穴が大きくならない」という傾向があったのに、今年は奇数年と同じほどの規模となったことや、南半球全体のオゾン量が過去最低のレベルだったことから、研究者は警戒感を強めている（90・10・12読夕）。

最高倍率で酸素原子撮影

科学技術庁無機材質研究所（茨城県つくば市）は昨年一〇月二二日、新開発した世界最高倍率の電子顕微鏡を使って、セラミック材料を観察、世界で初めて酸素原子の写真撮影に成功したと発表した。無機材研では今後、酸化物超電動物質における酸素原子配列の観察などに利用し、高温超電動現象のメカニズム解明を目指す計画。

新開発した電子顕微鏡は倍率一五〇万倍で、一億分の一センチまで見分けられる。これを使って、代表的なセラミック材であるジルコニアを観察、一億分の一・七センチ間隔で規則正しく並んだ酸素原子とジルコニウム原子の配列を写真撮影した＝写真。



▲Oは酸素，Zrはジルコニウムの各原子，aは隣り合うZr同士の間隔（1億分の5.2cm）

新電子顕微鏡の開発は、昭和六三年度に発足した超電導材料研究プロジェクトの一部。日立製作所の協力で、装置は昨年三月に完成し、無機材料で利用研究を進めていた。開発費は九億円。高温超電導物質は、酸素の有無で超電導現象が起きたり起きなかったりする。このため酸素原子の配列などを調べられるこの電子顕微鏡が超電導メカニズムの解明に役立つと期待されている。電子顕微鏡のこれまでの最高能力は東工大や米カリフォルニア大にある分解能一億分の一・六センチだった（90・10・23読）。

太陽電池の性能アップ

クリーン・エネルギー源として太陽光発電が注目されているが、米ボーイング社ハイテク・センターのルイス・フラース主任研究員は昨年一一月二七日、京都市で開かれた太陽光発電国際会議で、タンデム型（二頭立て）太陽電池の光電変換効率を、世界最高の三五・六パーセントに高める実験に成功したと発表した。強い紫外線のため電池の働きが鈍る宇宙空間でも三〇・八パーセントと高い効率を示したとしており、地上と宇宙の両方でタンデム型太陽電池が実用化される期待が高まりそうだ。

タンデム型は、二つの異なる太陽電池を組み合わせて使うタイプ。ボ社のチームはガリウム・ヒ素の太陽電池に、これまで効率が悪いと考えられていたガリウム・アンチモンの太陽電池を重ね合わせた。さらに効率を高めるため、レンズで集光する方式を採用した（90・11・28読）。

天然痘ウイルス完全消滅

世界保険機構（WHO）は昨年一二月一四日、米ソ両国が研究用に保存していた天然痘ウイルスが、一九九三年までにすべて廃棄されることになったと発表した。天然痘患者は七七年以降発生しておらず、廃棄により、かつて人類を震い上がらせた同ウイルスは地上から完全に姿を消すことになる。

WHOが天然痘根絶作戦を始めたのは六七年。開発途上国を中心に徹底的なワクチン投与を進めた結果、一〇年後の七七年一〇月、ソマリアでの患者発生が最後となり、WHOは撲滅宣言を出した。この後、米アトランタとモスクワの二カ所にウイルスが保存されてきたが、その研究も九三年中に終了するめどがつき、廃棄されることになった。WHOが保存している天然痘ワクチンも処分される。（90・12・15読夕）

脳腫瘍、切らずに治る「劇的効果」

大掛かりな開頭手術をしなくても、たった一回、わずか二〇分前後の放射線照射で脳内の腫瘍や血管障害を取り除けるという画期的な治療装置が、厚生省の認可を受け、九一年、大学病院など全国の五カ所の病院に導入されることになった。

世界中では既に四〇〇〇人近くがこの装置で治療を受け、大半が完全回復。今年、東大医学部付属病院で実施した三〇例の治験では二九人が完治し、社会復帰した。治験に当たった医師は「劇的な完全治療効果が確認できた」と評価している。この装置はエレクタ・インスツルメント社（スウェーデン）が開発した「ガンマユニット」。これはおわん型のヘルメットの中に二〇一個の放射性のコバルト線源が組み込まれている。患者にこのヘルメットをかぶせ、線源から出るガンマ線ビームを頭内の病巣部の一点に集中するよう調整照射する。目の神経や、周辺での正常細胞を傷つけないように工夫されている（90・12・19読夕）。

世界平均気温、史上最高に

昨年一二月三〇日付の英日曜紙「サンデー・タイムズ」は、昨年の世界の平均気温が、一三四年前に米、英気象当局が世界の観測記録を取り始めて以来最高を記録したと報じた。同報告によると昨年の平均気温は一三・二九度に達し、一九八八年の最高記録を更新。これは過去四〇年の平均を〇・五四度上回っている。

また昨年を含め、高い気温を記録した年の上位六番目までは八〇年代に集中しており、一部科学者は地球温暖化現象が既に始まっている証拠と指摘（90・12・31読）。

時速二〇〇キロの在来線

鉄道総合技術研究所（JR総研）は一月二日までに、JRの在来線狭軌道を時速二〇〇キロで走るハイスピード列車の開発に着手した。高速化のための基礎研究を急ぎ、六年後の平成九年には試作車の製作に乗り出す。

ハイスピード列車は、最高時速一三〇キロの現在の在来線列車を同一八〇キロにスピードアップ、新たに作る線では時速二五〇キロまでの余力を秘めて二〇〇キロ走行を目指す（1・3読）。

原子の列で描く世界最小の文字

物体の表面の原子一個一個をピンセットでつまみ上げるように正確に剝ぎ取り、世界最小の文字を描くことに日立製作所中央研究所（HCRL）が成功、一四日発表した。

描かれた文字は「PEACE '91 HCRL」。白く見えるつぶつぶ一個一個が硫黄原子で、これらを取り除いた黒いへこみが文字を表している。一つの文字の縦の長さは千万分の二センチ。

ピンセットの役目をしたのは、走査型トンネル顕微鏡と呼ばれる最新の顕微鏡。この装置の先端についているとがった針を硫黄原子に近づけ、電圧をかけると引力が働く。この力で硫黄原子をつまみ上げた。この試みはハイテクを駆使した一種のお遊びだが、二一世紀には超高密度の記憶装置の開発につながる可能性があるという（1・15読）。

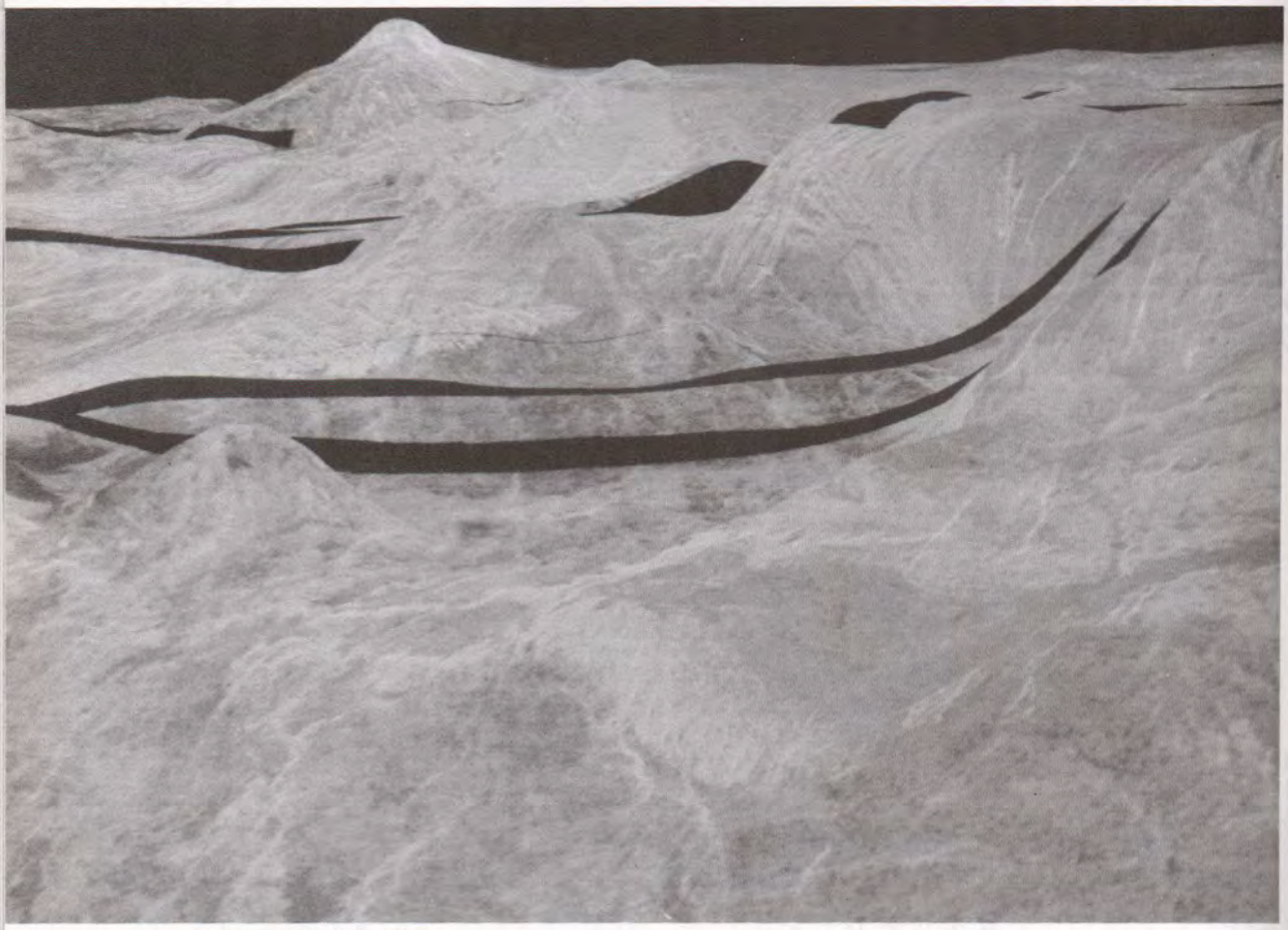
火星にかつて生命が

「火星にはかつて生命が存在した可能性が高い」という説を、このほどフロリダで開かれた「国際火星シンポジウム」でフロリダ州立大のフリードマン氏が発表した。

フリードマン氏は火星の南極の岩礁に生命の兆候がないかを研究した結果、「火星に生物がいるかどうか真剣に調べるに値する結果が出た」と述べた。

米航空宇宙局（NASA）生命生物研究を率いるラメル氏も「火星の、地中深くに水がある暖かい場所で、生命の兆候を発見できるという考え方も成り立つ」としている。また米国とソ連の講演者からは、太陽系の中では最も地球に近い火星の環境をより詳細に研究することが大切であるという指摘がなされた。米国には一九九二年に火星周回軌道に衛星を送り込む計画があり、ソ連でも九四年に火星表面で無人ロボット軌道車や気球を使った探査を行なうことが計画されている。（90・11・13朝）。

酵母で長もち魚・肉・の鮮度



●金星の地表

米航空宇宙局（NASA）は1月25日、金星探査機「マゼラン」がレーダーで撮影した金星表面の画像と高度のデータとをコンピューターで処理し、立体的な地形をあらわす写真を発表した。手前には山脈や絶壁や盆地のあるインシュタル大陸と呼ばれるオーストラリアほどの広さをもつ地域があり、右上には高さ約4kmのラクシュミ高原が写っている。黒い部分はマゼランがデータを収集できなかった部分。 写真／ロイター提供

お正月に欠かせない新巻サケのように、魚や肉の有力な保存法である塩漬けは高血圧が心配だが、京大農学部の栃倉辰六郎教授（微生物生産学）のグループは、魚や肉の表面で酵母にアルコール発酵させ、長期間、新鮮なまま保つ方法を開発した。アルコールが内部に浸透して雑菌の繁殖を抑えるもので、出荷時に気圧の低いところにしばらく置いてやれば食品からアルコールを回収できる。冷凍庫も必要でなくなり、途上国での実用化も有望だ（1・5朝）。

配偶者の喫煙ご用心

愛煙家を夫や妻に持つ人は、その煙を知らず知らず吸うことで、そうでない人よりも心臓病で死ぬ確立が三〇パーセントも高い――。こうした研究報告が米カリフォルニア州立大学サンフランシスコ校の医学スタッフから発表された。

同スタッフが、これまで蓄積してきた疫学研究の事例を詳細に再調査した結果、結論づけた。それによると〝受け身の喫煙〟は従来考えられていたような肺がんや他の部位のがんよりも、むしろ心臓病を引き起こし死に至らしめるケースが多い。長時間一緒に生活している配偶者の間では特にその傾向が顕著という。

またスタッフは同研究報告の中で、受け身の喫煙が原因となって全米では毎年、三万七千人が肺がん、一万二千人が他の部位のがんで、それぞれ死亡していると推測している（1・21朝）。

Just a Miracle!

壁画の奇跡

by
Toshiyasu Nagayama
永山稔泰

◀目を動かした壁画のイエス像

若い頃より旅行が好きで、各国を旅行した。若い頃は未開の地の方がおもしろみがあって、あまり人の行かない所を多く旅して歩いた。

昭和六三年、シルクロードからチベットの旅で、その国の民族性、風俗、また強い信仰心等に驚き、精神的なものを求める心が強くなっていった。

再度のチベット旅行の折、雨季に会い、奥地に行くことが出来ず、ネパール、インドよりトルコに入り、トルコを一周した。

トルコに残る数々の遺跡を見、カッパドキア、トラブゾン等にある古代キリスト教徒の残した壁画を見て、その精神性に感動した。

その後、スイス、フランス、イギリス、スペイン、ギリシア等を経てドイツに入る。

フランクフルトの街中のアイスクリーム店で知り合ったドイツ人、フランツ・ハーマン氏と日本人の妻に親切にして頂き、観光地の話をうかがった。

次の日、ゲーテハウスからベートーベンの生家へ行くところを時間の都合上、マリアレイクにある僧院へ案内して頂くことになった。

コブレンツとボンとの中間ぐらいにあるマリアレイク・モナストリーは、約七〇〇年程前に建ったといわれ、城のような僧院である。湖に面して静寂そのもので、修業僧達の祈りの場であった。

僧院の横にはホテルもあり、人生に行き詰まった人や、ノイローゼ、病人等がホテルに滞在して、僧院で祈る日々を送り、再び希望を得て帰って行く人々も多いということである。

その日何回かの祈禱が行なわれるなかで、その時は最終祈禱であった。

礼拝堂は縦長の部屋で、正面にイエス・キリストのフレスコ画が大きく描かれている。

祭壇に向かって両側に約二〇人ずつの僧侶が並び、交互に歌うように祈禱文を唱える。

礼拝する人々は、その後ろの椅子に腰かけて祈りながら祈禱する声に耳を傾けている。

壁画の目が動く！

ふと中央のイエス・キリストの壁画に目をやると、壁画であるはずのイエスの目が、僧侶達の祈禱に合わせて右へ左へと動いているではないか！　きっちりと閉じられた口もとが開いて、歯まで見えているのだ。

わが目を疑って見ていたが、思わず壁画の近くまで行って見ていた。

すごい感動と不思議さに胸がつまって我を忘れていた。

隣り合わせた人々にそっと聞いて見たら、皆がしっかりと見ていて涙さえ流していた。

やがて祈禱が終わると、イエスの壁画も静止して元の姿になった。

この僧院の僧侶達は以前にも何度かこのような現象があったので、心得ている様子だった。

祈禱時間が過ぎても静かに皆の心が落ち着くのを待っていた。

イエス・キリストの壁画を通して、そのパワーを人々の祈りの心のパワーと一つにして、良い波動を人々に与えて下さるのかもしれない。

イエス・キリストの壁画はすがすがしく、力に満ちて輝くようであった。

その後、ファティマ、ルールド、イスラエルと巡礼の旅を続けて教会を回って見たが、マリアレイク・モナストリーのあのすがすがしさは見られなかった。

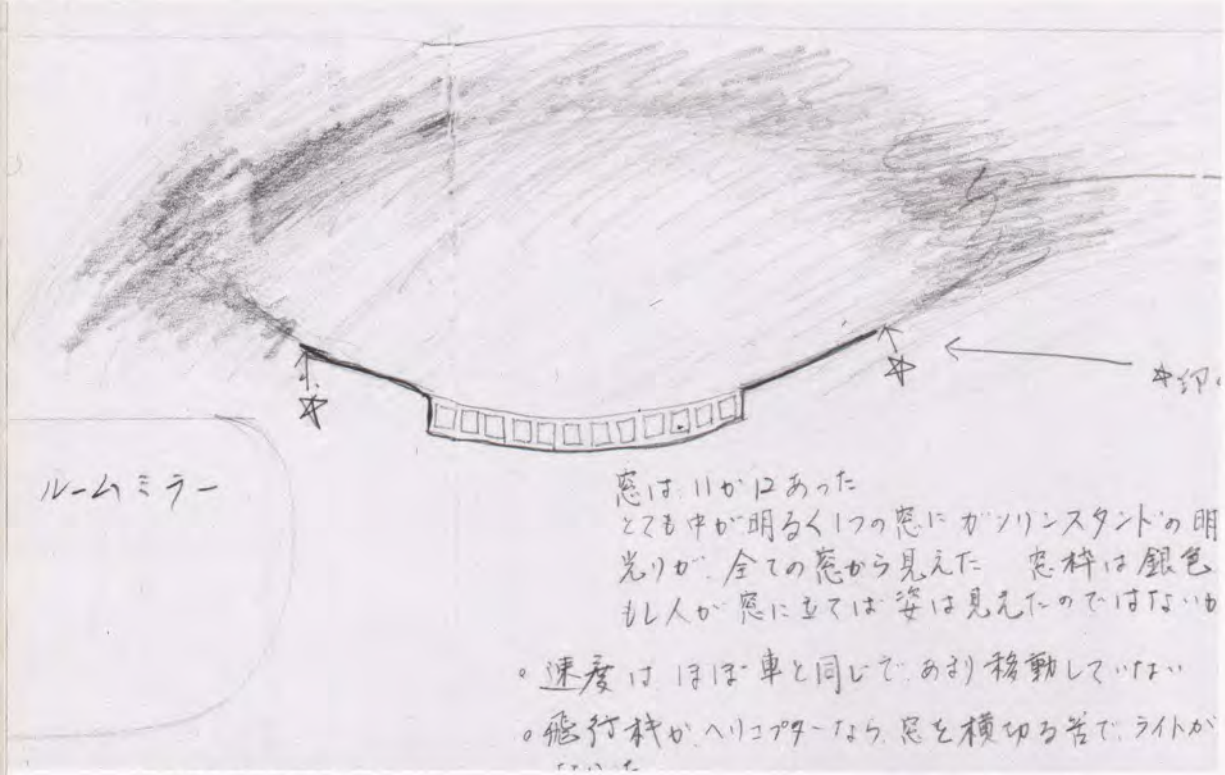
ファティマとルールドはその素朴さと、熱心に祈る人々の心に感動し、数々の奇跡が起こるということであった。

イエス・キリストに引かれてイスラエルではイエスの跡をたどる旅をしてみた。今歩いているこの地を、かつてイエスが歩いたと思えば感無量である。

帰りの飛行機の中で偶然隣り合わせたドイツ人にマリアレイクでの出来事を話してみた。彼はそんな話を聞いたことがあるといって、自分も一度見たいと話してくれた。

今回の旅は、イエス・キリストの導きによって魂の目覚めと宇宙とのつながりに強く引かれたことを喜びとしている。

（筆者は東京在住の歯科医師）



▲筆者による巨大UFOのスケッチ。

江戸川区上空の巨大UFO

A Huge UFO over Edogawa-ku, Tokyo
by Hiroko Kitadate

——北館博子

私にはかねてからいろいろと不思議なことが身辺に発生していました。しかし恐怖心は全くありませんでした。

少し例をあげますと、日時ははっきり覚えていませんが、昭和六一年か二年頃のある日、帰宅して電話器の前を通ったとき、自宅の電話のベルが、まるで隣の家で鳴っているかのように遠くに聞こえたのですが、受話器を取ったら秋田の親戚を呼び出していたのです。

その後、一週間ほどたってから私が電話をかけようとしても不通となり何の音もしないのです。義母にかけてもらったらかかるのです。故障ではありません。このときは不思議でした。

平成二年一〇月二八日、朝、子供を幼稚園に送って行き、帰ってから玄関の戸をあけた瞬間、一メートル八〇センチ程の背丈の頭と肩が白く浮いていて、目を上に向けようとしたら、スーッと飛んで行ったのを見ました。それは布をサッと引いたように飛んで行きました。

今度は巨大なUFOを見たのです。平成二年一一月九日（土）夜九時四〇分頃のことです。一人で車を運転しながら都内の首都高速道を東に向かって綿糸町インターと京葉道路の中間辺、つまり江戸川区南部に位置する篠崎のあたりで時速六〇キロぐらいで進行中、突然、車のルームミラーの右前方に巨大な楕円型の物体が浮かんでいるのが見えたのです。

その輪郭はぼんやりとしたものでしたが、下部に窓が一一か一二個あり、窓の中がとても明るくて、一つの窓にガソリンスタンドの明るい電球を三～四個集めたくらいの光がすべての窓から見えました。窓枠は銀色のようでした。もし人が窓に立てば、その姿が見えたのではないかと思います。

速度は車とほぼ同じで、あまり移動していません。飛行機かヘリコプターならライトがピカッピカッと点滅するはずなのに、そのようなライトはありませんでした。図の星印のあたりまでの輪郭は黒く見えていました。

私の車の前後は、ルームミラーで見る限りでは他車のライトは見えず、そのときは、しばらく私の車だけが走っていました。したがってライト類の見誤りではありません。（筆者は千葉県在住、書道教師）

UFOs over Tokyo before Christmas
by Yoshikazu Ito

クリスマス前のUFO出現

●伊東芳和

昨年（一九九〇年）一二月二三日はクリスマス・イブを前日に控え、クリスマスムードが一段と盛り上がった一日だった。しかし盛り上がったのは地上だけではなく、上空でも賑やかな光体ショーが行なわれていたのである。

この時の様子について、手元の『日本経済新聞』を見ると、「UFOか火の玉か」という書き出しで始まり、二三日午後一〇時半頃、関東から東海地方にかけた広い範囲でオレンジ色の物体が空を飛んでいるのが目撃され、警察や報道機関にも問い合わせが殺到」という記事がコラム欄に載っており、また『産経新聞』にも同じような内容で「流れ星でUFO騒ぎ」という小見出しを付けていた。

ところが、この光体とおぼしき物体を、私の勤めているホテルの同僚である青木幹雄氏が自宅の団地の階段の踊り場から目撃していたのである。

私がこのことを知ったのは、その二日後のクリスマスの日の二五日であった。というよりも二三、二四日と連休させて頂き、三日ぶりに出勤した私が同氏より聞かされて初めて二三日の出来事を知ったというのが事の真相である。

そこで早速同氏に話をうかがうことにした。まず氏の人柄と職場での仕事ぶりを簡単に紹介しておきたい。

青木氏は宴会担当の主任で、昭和三〇年生まれの人望の厚い三五歳でもある。親分肌の性格は誰からも好かれ、部下からはよく慕われている。仕事では厳しさがあり、信頼のおける人物である。現在は埼玉県大宮市の県営団地に奥さんと二人の子供さんとの四人家族で仲むつまじい生活を過ごしている。

一見、硬派に見える同氏が、二五日の当日、私の顔を見るなり、「伊東さん、二三日にUFOを見たよ」と子供のように弾んだ声で話しかけられたのには驚かされた。というのは、私はまだこの職場ではUFOの話は一度もしていないのに、なぜか私のすべてを知っていて、私にその話を聞いてもらいたいような口ぶりだったからである。

私は不思議な面持ちで同氏の話をうかがい、これは本物だと直感した。そこでその時の模様をスケッチと文章にして頂くようにお願いした。

次に紹介するのが、その時の氏の目撃談である。

壮麗なオレンジ色の光体

「一九九〇年（平成二年）一二月二三日（月）の午後一〇時三〇分頃でした。空は星がよく見え、だいぶ冷え込んできた寒い夜でした。自宅（団地の四階）を出て駐車場へ向かおうと思った矢先、四階の踊り場でさりげなく正面の空を見上げたとき、アッと思わず口にしました。

それは今までに見たことのない黄色いオレンジがかかった物体でした。夜なので一瞬、飛行機かと思いましたが、明らかに違う飛行物体でした。本体は黄色っぽく光り、後方には尾を引いたように綺麗な流星のようなオレンジ色の光を放ちながら、西北から東南へ水平に飛び、建物の陰で見えなくなるまでの約三〇秒ぐらい見ていました。

残念ながら他の目撃者はおりませんが、あれは確かに今まで見たことのない飛行物体でした。私は物体を目撃した後、驚きというよりも大変すがすがしい気持ちで何か美しい物を見たような気分になりました」

"見る"べき人だったのか

明らかにUFOから放たれたフィーリングを感受したような文章に、同氏の"宇宙的カルマ"を感じることができた。かねてからUFOの存在は信じていたと氏は言われていたが、初めて見るUFOを率直に表現した氏の実直さがよくあらわれている。

私は目撃場所の写真を撮りたいと思い、そのことをお願いしたところ、ここころよく引き受けて下さったので、暮れも押し詰まった二九日（土）に同氏宅を訪れた。

写真左下は住まいである団地の前に立つ青木氏。氏はこの四階の階段の踊り場で最初にUFOを目撃する。そこから三〇秒ほどかけて物体を確認しながら一階へ降りて、ついに地上部分まで降りる。

物体は依然ヘリコプターが飛ぶくらいの高さを水平に東南の方に移動（**写真上**）しており、一階まで降りた氏はそれを追うように右手に向きを変えて物体を追った。

それはまもなく四～五〇メートル離れた団地の脇にある人家の向こうに消えて見えなくなったという。

毎月二四日前後に多発？

毎月二三日頃はUFOの出やすい特異な日に当たるので、UFOを見やすいと、後にある人から聞いた。実は私もこの日の夜、あるパーティーに出席するために都内池袋のサンシャインビルに向かう途中、三度ほど光体を見ているのである。

最初と二度目の目撃は自宅を出てまもなくの頃で、時間にして六時一〇分頃。当時の翌日でもあり、外は真暗で

▲写真上はＵＦＯ出現状況を目撃者が、写真中に描き込んだもの。

ある。

歩いていると、前方のビルとビルの間を左から右へゆっくり進む二個の光体があった。この二個は前者が消えた後、一分位の間隔をあけて後者が現れたもので、いずれも同じ高さで水平に動いていた。

三度めは池袋駅に着いてすぐである。駅を出てなにげなく前方右上を見ると、右手上空に光体が現れている。しかも駅前広場に向かって輝きを増しているようだ。

一瞬、心がいろめきたつ。ＵＦＯがこの東京の夜の上空に現れたのか！立ち止まって次第に輝きを増す光体に胸がときめくのを感じる。しかし仰角にして三〇数度、高さ二～三〇〇メートル、二度目と同様に後方の小さな点滅が見えて、ヘリコプターの様相になってきた。そしてサンシャインビルのパーティーの席上でも、似たような状態の光体が五九階の窓から見られた。この物体については「ＵＦＯではないだろう」と、パーティーの主役である秋山眞人氏が言われたという。

しかし、この日はやけにヘリコプターの光らしき光体を目撃することが多かった。本当にこれらすべてがヘリコプターなのだろうか。あるいはヘリらしきものも含まれていたのだろうか。この日の出来事は二三日の特異日と何か関係があるのだろうか。（筆者は東京在住・日本ＧＡＰ会員）

私のUFO目撃体験

平井沙織

I saw Mysterious Objects

by Saori Hirai

図4

1991年2月8日 午后3時45分頃
走行中の電車より発見
変な雲があると思って見つめていると
いつのまにか黄金色に輝くとても
きれいな細長いものがあったので
びっくりしました。モーレツに光っては
まったく見えなくなり いつのまにか、又
見えているということを二回程くり返し

図3

5年位前 夕方6:30頃
満月の4分の1位の大きさ
子供が発見 私が気づいた時
は消える寸前でした。消え方
はパッと消えるのではなく
しぼんでいった様にみえた
私はなおも消えた場所に
注目していたが少し右寄りの所
から光のスジを引いて超スピード

図1と2は省略。

私は一〇数年前に日本GAPへ入会しました。「ニューズレター」という題であった頃の59号あたりからずっと続いています。実際にはほとんど活動をしない名ばかりの会員なので恐縮しています。

さて、たった一人で黙々と機関誌をとっていた私も何度か空中に不思議な物体を見たことがありますので、ここに記してみます。

図1＝一〇数年前、東京の友人宅九階の窓より羽田空港の飛行機の着陸の様子を双眼鏡で見ていた。午後八時頃、UFOが出現し、①から②までの消えたところまでは飛行機と同速度。③から⑧までは突然現れて左右に次々に光りながら突然消えてしまった。

図2＝一五年くらい前、アパートの住人と一緒に見た。仰角四五度くらいの所に平行四辺形の形で赤っぽい部分があった。最初ははっきりしていたが、少しずつ薄くなり、一〇分くらいしたら周りと同じようになってしまった。あまり大きかったので、街の灯火か何かが反射しているのではないかと思い、見回したが分からなかった。未だに不思議である。

図3＝五年くらい前、夕方六時半頃、満月の四分の一くらいの大きさの物体が見えた。最初は子供が発見。私が気づいたのは消える寸前だった。消え方はパッと消えるのではなく、しぼんでいったように見えた。私はなおも消えた位置に注目していたが、少し右寄りの所から光のスジを引いて超スピードで飛んで行った物があった。アッという間の出来事だった。

図4＝一九九一年二月八日午後三時四五分頃、走行中の電車より発見。変な雲があると思って見つめていると、いつのまにか黄金色に輝くとても綺麗な細長い物体があったのでびっくりした。猛烈に光ってから全く見えなくなり、またいつのまにか見えているということを二回くり返しているうちに最寄りの駅についてしまった。見晴らしの良い場所であちこち探したがもう何も見えなかった。

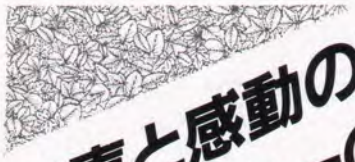
以上の他に私が二〇代の頃、とても不思議な夢を見ました。これについては『江戸史跡考証事典』で調べてみたこともあります。この物は皇居内に現存しているとのことで非常に驚きました。最近は小学生の娘もUFOコンタクティー誌を読んでいるようです。私も今後ずっと会員でいたいと思います。機関誌が届くのを楽しみにしています。

（筆者は埼玉県在住・主婦）

日本GAP
企画第13回
海外研修旅行

アメリカ東部・西部・メキシコ宇宙ロードの旅

アダムスキー生誕100年記念
日本GAP創立30周年記念



歓喜と感動の日々
アダムスキーの大地！
ムー大陸の光を放つ古代マヤの遺跡！

1991年
8月7日(水)➡18日(日)
12日間
¥598,000

宇宙的な波動と光芒を放つアダムスキーの故郷とメキシコ・マヤの遺跡！
家族的雰囲気に満ちた日本GAPの素晴らしい旅！
アメリカではダニエル・ロス夫妻、メイン州在住のアリス・ポマロイ女史、ニューヨーク在住会員・デイビッドウィッツ邦子さんらが合流する予定。
さあ、行こう、肩を組んで、宇宙ロードを、誓いの友よ！

▲左側上から、ロサンゼルス市内／アダムスキーの住居跡パロマーガーデンズ／パロマー天文台／ワシントン市アーリントン墓地のアダムスキーの墓を囲んで／同市のワシントン記念碑をバックに。右側上から、メキシコ・テオティワカンの「太陽のピラミッド」／メキシコ市内のグァダルーペ寺院／パレンケ・マヤ遺跡の「碑銘の神殿ピラミッド」／ウシュマル・マヤ遺跡の「魔法使いのピラミッド」／夢見るようなエメラルドグリーンのカリブ海とアクマルの浜。
（以上はすべて1987年度第2次「アメリカ西部東部・メキシコの旅」で撮影）

日程概要

1991年8月7日(水)成田発、同日ロサンゼルス着後市内観光、8日デザートセンターへ。9日パロマー登山、ア氏住居跡と大天文台見学、10日メキシコ・テオティワカンの大ピラミッドと市内観光。11日パレンケ遺跡見学。12日ウシュマル遺跡視察。13日カリブ海岸アクマルで海水浴。14日カンクン経由でニューヨーク入り。15日ニューヨーク市内観光。16日ワシントン市内観光、アーリントン墓地のア氏の墓参り。17日ワシントン発、18日(日)成田着。

詳細案内書は下記へハガキでお申し込み下さい。
（非会員でも参加できます）

ワールドセブントラベル株式会社
〒150 東京都渋谷区東3－24－9
サンイーストビル2F
担当：田中　正　☎03－499－2461
※夜間は田中自宅
☎0474－77－4728へ。（夜10時以後受付）

- 正式参加申し込みメ切り
  1991年7月20日
- 旅行説明会
  第1回目：1991年5月19日
  第2回目：1991年7月28日
  （会場等詳細は本号28頁参照）

企　　画：日本GAP
主　　催：株式会社日本旅行（運輸大臣登録一般旅行業第2号）
取扱い旅行代理店：ワールドセブントラベル株式会社（運輸大臣登録旅行業代理店業第1957号）

※参加費用・日程等には若干の変動があることをお含みおき下さい。

UFO——宇宙からの完全な証拠

UFOs and the Complete Evidence from Space by Daniel Ross

Translated by Hachiro kubota

金星、火星、月に関する真相

●ダニエル・ロス／久保田八郎訳

最終回

第12章　高貴な真実を伝えたアダムスキー

知識と無知の間には、科学のアーチがかかり得ないほどに大きな裂け目がある　ヘンリー・ソーロー

ジョージ・アダムスキーの人間像及びそのライフタイム・ワークに関する詳細が、彼の元協力者たちや援助者たちの書いた書物や証言により明らかになっている。私が様々な書物から得た情報と、数人の元協力者たちから直接聞いたことを並べるだけで、もう一冊の本が出来上がってしまうほどである。

アダムスキーが政府及び米航空宇宙局の高官たちと数多くの接触を重ねていたことはよく知られていることだ。さらに講演旅行中のヨーロッパでは、オランダのユリアナ女王、ベルンハルト殿下とも会見している。

一九六三年には、ローマ法王から黄金のメダルを授与されている。そのメダルは、人道的に素晴らしい貢献をしたと法王が認める極めて少数の人にしか授けないものである。

次にお話しすることは、地球を訪れる宇宙からの訪問者たちの言葉を代弁するという偉大な使命を果たした男の人となりを知る上でなかなか興味深い。

証拠にこだわらなかったアダムスキー

一九五〇年代においてこの特殊な使命を遂行することは、決して容易なことではなかったはずだ。懐疑論者たちが今以上にはびこり、組織化された反対勢力の妨害、さらには、地球以外に生命は存在しないという科学者達の決まり切った反応など、彼の使命の前には様々な障害物が横たわっていた。

ここで紹介したい話とは、彼の最初の著書『空飛ぶ円盤は着陸した』（日本語版新アダムスキー全集第一巻に収録）が出版された少し後の、ある出来事に関するものである。

その本は、デスモンド・レスリーとの共著という形をとっていたのだが、面白いことに、初版が発売された時点においてはもとより、数回の再版が繰り返された時点においても、二人の著者が直接顔を合わせることが全くなかった。（レスリーとアダムスキーは、アダムスキーの原稿をレスリーの本の後半部分に収めて、著作権を共有することを、手紙で合意し合っていた）

それは、一九五四年の夏にレスリーがパロマーガーデンズを訪れ、二人の共同著者が初めて顔を合わせたときの出来事であった。

ある日の夕方、レスリーとアダムスキーは、他の二、三人の友人達を交えて、テラスで静かな議論を楽しんでいたのだが、日が落ちて間もないころ、レスリーが言うには、突然自分が誰かに見られているという強烈なフィーリングを感じたという。

そして彼がキョロキョロとあたりを見回すと、なんと驚いたことに、彼がいたところからわずか一五メートルしか離れていないところに、金色の小さな円盤がいたというのだ。

さらに次の瞬間その小型円盤は、光のスジを描くようにして一直線に急上昇して消え去った。

それはスカウトシップからリモートコントロールされていたスキャニングディスク（探査用超小型円盤）であったが、それを見たレスリーはとにかく驚いたという。しかし、彼が言うには、アダムスキーはそれがそこにいたのをずっと前から知っていたにもかかわらず、そのことを彼に一言も言わなかっ

たというのだ。

アダムスキーがそれに関して口を開いたのは、それが飛び去った後のことだった。そしてアダムスキーはそのとき、

「いや、実はね、あなたがいつ気がつくかと思って眺めていたんです」

と言ったのみだったという。

さて、もしそれが、アダムスキーと同じような立場で孤独な戦いを続けていた他の人物であったならどうだっただろうか？

おそらく間違いなく、スキャニングディスクが現れるや否や、

「ほら、あれを見ろ！　どうだい？　僕の言っていることが正しいことが分かっただろう！」

などと息巻いたことだろう。

ジョージ・アダムスキーという人物は証拠というものに全くこだわらなかった。あるいは彼の異星人とのコンタクトの証拠は、スペースピープルから与えられたメッセージであり知識であったという方が正しいかもしれない。

真実は一度だけ洩らされる

アダムスキーは、全ての情報を、真実の印象とともに、現実的で誰にでも理解出来る形で紹介した。

そして彼は二冊目の著書『宇宙船の内部』(これも新アダムスキー全集第一巻に収録)を出版した後で、真の宇宙科学情報と宇宙哲学を様々な国の出来るだけ多くの人に伝える目的で、国際GAP（真実を知らせるためのプログラム）を設立している。

もし彼に関する記録の全てを眺めたならば、ジョージ・アダムスキーという人物がスペースピープルとコンタクトするには最適任者であったことに異論を唱える人間は一人もいないだろう。さらに、スペースピープルは、彼らの来訪の背後に存在する全ての情報をアダムスキーに与えた、という真実にも間違いなく気付くことだろう。

その情報は、彼を通じて、すでに我々に与えられたのだ！

実際、我々がまさに宇宙時代に突入しようとしていたころの数年間、その情報は大衆の間にかなりの浸透を見せ、輝かしい未来が近づきつつあるかに見えた。彼の情報を後押しするかのように、数多くのUFOが目撃され続け(それは現在でも続いているが)、大衆の心を宇宙からの訪問者達に関する真実へと向けさせたものである。

しかし、この真実は一度しか告げられない。それは何度も繰り返し告げられる種類のものではないのである。

言い換えるなら、我々の空を訪れるUFO群がどこから来るのか、あるいはそれが何なのかといったことに対する答えは、今後二度となされないということである。

地球を訪れるUFOの中で最も多いのは金星からのものであり、その他はこの太陽系の他の惑星群からのものである。そしてそれらの惑星間には、宇宙航行のための素晴らしい協力体制が取られている。

この事実を受け入れていた人々は、以前かなり多かった。

しかしながら、一九六〇年代から七〇年代にかけてなされた宇宙発見事に関する数々の公式発表の影響で、それに対する反論、非難は、年を追うごとにその激しさを増すに至った。

この本を読めば、その状況が充分にご理解頂けるものと思う。

宇宙の生命に関する否定的なイメージが、伝統的正当派科学の石頭理論を、厳しい検閲にさらされた宇宙発見事に関する公式発表が支持するという形で作り上げられたのである。

公式という名の権威は、客観的で自由な価値観を持つ科学がいくら頑張ったところで抵抗し得ないほどに強力なのだろうか？

アダムスキーが伝えた金星の実態

ジョージ・アダムスキーは、金星からの訪問者たちに関する事実を、我々にあますことなく伝えてくれた。さらに彼は、その惑星の真の環境をも紹介してくれた。

一九五二年に金星からの訪問者と初めてコンタクトして間もなく、彼は、彼らの宇宙船への同乗を許され、そこ

ダニエル・ロス氏

で様々なことを学ぶ恩恵に浴している。そして彼の何度かの同乗体験は、貴重な情報として我々に伝えられた。

一九五四年八月二三日、彼らの母船の中でアダムスキーは、素晴らしく進歩した投影装置を通じて、金星表面の生の映像を見せられている。その装置がどのような仕組みなのかは彼の能力では説明不可能だということだったが、その映像は、生き生きとしていて細部までハッキリと見え、色彩に溢れた立体的なものだったと彼は言う。

そこでまずアダムスキーが見たものは、金星の壮大な山々であった。岩が突き出てゴツゴツした山もあれば、美しい雪の冠をかぶった山も見えたという。ほとんどの山々には木が生い茂り、その側面を走る水の流れや滝などもはっきりと確認出来た。

彼の宇宙の友人の話では、金星には多くの湖と七つの海があり、それらはすべて水路でつながれているということだった。水路には人工的なものも天然なものもあるという。

さらにそのときアダムスキーは、金星の都市群をも見ることが出来た。全ての都市が円形、あるいは楕円形に形作られていた。そして町を歩く人々の様子は、我々に特有な、急いだり、いらいらしたような態度がみられなかったこと以外は、我々と異なる点はほとんど見受けられなかったという。

また大量輸送用の乗物があり、それは、美しい花の群れで区切られた道路上の空間を静かに滑るように移動していた。

さらにアダムスキーは、海辺や、鳥や動物たちの世界のある熱帯地方の様子も見せられている。

また、彼らの話では、金星表面からは、大気上層の厚い雲の影響で、地球の我々が見るように星を見ることは出来ないということだった。

以上の描写は、彼の二冊目の本『宇宙船の内部』で紹介されているものである。後の書物の中で彼は、金星の一日は地球時間にして二六時間ほどであること、そして表面の気圧は地球のそれと全く変わらないことも、彼らからの情報として書き記している。

これまでに米・ソ合わせて一二の探査機が金星表面に送られていることは周知のとおりである。そこで当然、あちら（金星）ではそれらの探査機に対してどんな扱いがなされたのだろうか、という疑問が発生する。

偽りの情報に要注意

しかし、一九六一年の春に彼が親しい協力者達に送った一通の手紙の中身が、その疑問に明確に答えてくれている。それは、地球から金星に向けた最初の探査機が発射されて間もないころの手紙だった。

その探査機はソ連のベネラ1号で、一九六一年二月一二日に発射されたものである。（それ以前の探査機は、米国製、ソ連製とも、全てが月に向けて発射された）

手紙のなかでアダムスキーは、ベネラ1号に関する公式発表と、スペースピープルとのコンタクトで得た情報をもとに、次のような議論を展開している。

「ソ連は今、探査機を送っています。とっても、それとの連絡は途絶えてしまったという報道がすでになされていますが……。

この宇宙探査機は科学的な目的で送られたものです。そしてそれは、私達が必要な知識を得るための唯一の方法であることから、もしそれが正確に金星にたどり着くようならば、着陸は許されるでしょう。

私は、このソ連の探査機の後ろを彼らの巨大な惑星間宇宙船が追跡しているという情報をもらいました。でも彼らは、この探査機に対する妨害は一切していません。

このソ連の探査機はすでに、地球の科学者達に多くの有益な情報をもたらしています。

例えば、この探査機は当初、五月の終わりごろに金星に到達すると考えられていたのですが、後でそれが、五月の初旬と訂正されました。それは次に四月の中旬と再訂正され、さらに最も最近の発表では、金星に接近中とだけしか述べられていません。

科学者達は、到着予定日がそのようにコロコロと変わったのは、この探査機が、太陽からのある未知の力によって、当初の予定よりも遥かに強く引っぱられているためだと述べています。

この未知の力の存在に関しては、私の宇宙の友人達も確証しています。ただ彼らは、それは、我々が宇宙空間を安全に航行出来るようになるために知らなければならない無数の知識のうちの、ほんの一つに過ぎない、と語っています。

彼らは、ベネラ1号の金星までの当初の予定軌道が大きく狂った原因が、この太陽の力によるものなのかどうかについては、何も語っていません。そしてそれは実際、とても理にかなったことなのです。

なぜならば、我々は、我々自身の装置を用いて、我々自身の体験から学ぶべきだからです。宇宙の友人達は、我々の努力の作業を妨げたりすることがないとともに、我々に未知の情報を与えて助け船を出したりもしてくれません。

それが本来の姿なのです。我々の誰もが知っているように、自分の体験から得たレッスンほど、より良く理解され、記憶されるものだからです。

もしソ連の科学者達の計算がこの探査機を金星の引力圏に到達させ得るほどに正しければ、それは当然着陸を許されるでしょう。

もしこの探査機が都市部や人の密集

したところに向かっていたならば、彼らは、人命や財産のため、ほんの少しだけその軌道を修正して、それを人の住んでいない地域に着陸させるように操作することでしょう。

もし我々が彼らの立場であったなら全く同じことをするはずです。その程度のわずかな修正であれば、探査機の発進地に送り届けられる観測データには何の影響も現れないでしょう。

さて、この探査機が、例えばある砂漠地帯に着陸したことを考えてみてください。金星には、地球の砂漠と同じような地域が実際に存在しています。

もしそんな地域に着陸して観測を行なったならば、おそらく送られてくるデータは、「生命は存在しない」ということを示すはずです。

この探査機がどんな観測装置を積んでいるか、また、それが着陸の衝撃にどれだけ耐えられるものであるのかは分かりません。ただ私は、その中にカメラが含まれていることはないような気がしています。空から落ちて来た奇妙な物体を調査しようと近づいてきた単数、あるいは複数の人間を撮影して、その映像を地球に送り届けることの出来るようなカメラです。

そんな物が天から降って来たならば、金星の人々も、それに対して、同じ状態に接した我々と同じように大きな興味をいだくのは当然のことです。あるいは我々以上かもしれません。というのは、彼らはおそらくその物体が地上に落ちるずっと以前から、それが何であるかに注意を払っているはずだからです。

では、この探査機に、人間や動物の様子などを撮影してそれを地球に送り届けることの出来るカメラが搭載されていると仮定してみましょう。

たとえそういった映像が送られて来たとしても、その情報がすぐに公表されることはおそらくあり得ません。

どの国が最初にそれに成功したとしても、少なくともしばらくの間は、矛盾に満ちた発表がなされるはずです。

地球の飛行士たちが他の惑星あるいは月などに送られて安全に帰還したあとでさえ、同じようなことが起こるでしょう。彼らはおそらく、ラジオやテレビのインタビューに対して、こうこうここまでしか喋ってはいけない、という指示を受けるはずです。そしてその他の情報は、帰還するや否や秘密レポートの形で、彼らの政府にのみ届けられることになります。

それはおそらく、世界中の様々な宗教および政治機構に対する配慮からの処置でしょう。さらに、大衆がその事実をどれだけ受け入れることが出来るだろうかという心配もあるかもしれません。

近い将来、我々自身の作った宇宙船で人間が宇宙空間に送られるでしょう。しかしながら、そのときに発見されたことがすぐに公表されるかということになると、はなはだ疑問だと言わざるを得ません。

ただ、もし、矛盾した発表がなされても、それに決して惑わされないことです。そういった発表は、これからより増えることが予想されます。

重要な事実がこれまでにどのように扱われて来たかを忘れないでください。あらゆる報告を冷静に処理してください。

これまで私に与えられ、あなた方と共有して来た情報が全て真実であることは、時が必ず証明してくれます」

私がこの手紙のコピーを手にしたのはつい最近のことである。当然のことながら、私はそれまで何年にも渡ってこの問題を考えていた。

この手紙は、遠方から送り届けられる我々の探査機を金星の人々がどのように迎えるのだろうかということを、極めて論理的に説明するものだった。

これは、地球の探査機が着陸したことのある他の二つの天体（火星と月）にも、そのまま当てはまることである。

他の惑星の人々は、我々の単純な装置がそこの表面の状況を調査しようとする試みを、決して妨害したりはしないのだ。

人類は、自分の発達の過程を自ら選択する自由を与えられている。そして、未知の宇宙空間における観測にさいしても、そのデータを自らの力で解釈する自由を与えられているのだ。

この本で私は、米・ソの宇宙探査結果の公式発表の裏に潜む、真実を示唆する数々の証拠群を徹底して吟味するとともに、我々の持つ宇宙に関する知識がなぜこれほどまでに限られたものになっているかについても、充分に論じたつもりである。

私も素晴らしいUFOを見た

一九七四年に初めて他の惑星からの宇宙船を目撃するまで、私は宇宙科学に関する勉強は一切したことがなかった。（ジョージ・アダムスキーの本を読んだのはその直後のことである）

しかしそれに続く二年間、私はそれこそ必死で宇宙科学の勉強に取り組んだ。

一九七四年の目撃以後も、私は数度にわたってUFOを目撃している。そしてそのうちの二つのケースには、共同目撃者が存在した。

まず、普通の家の屋根の高さくらいのところまで降りて来た一機のスカウトシップを目撃している。それは我々の立っていたところからわずか三〇メートルほどのあたりを滑空していた。

別の機会には、真昼の空中に水平に停止していた葉巻型母船を、かなり至近距離から目撃したことがある。それは間もなく垂直に向きを変えると、上空に向かって物凄い勢いで発進し、瞬く間に姿を消した。

また私は、スキャニングディスク（探

査機用超小型円盤）も目撃している。それはわずか四～五メートルという至近距離に現れた後、上空に向かって青緑色のまばゆいばかりの光を放ちながら一直線に上昇して消え去った。

私が体験したその他の目撃は、すべてもっと遠い距離からスカウトシップを見たものである。

一九七七年から、私はＵＦＯ問題の講演や講義を始めた。そして次の年には、ジョージ・アダムスキーの業績を人々に知らせるとともに、惑星宇宙科学と結び付けて彼の主張の信憑性を高めるための活動の拠点として、『パブリック・インタレスト・スペース・サイエンセズ・センター（公益宇宙科学センター）』を設立している。

当時私は成人学級で定期講座を持つ一方、いくつかの大学で講義を行なったり、様々な団体に対する講演を行なったりと、忙しく動き回っていた。そして間もなく新聞やラジオのインタビューを受けたり、公共テレビへの出演依頼も舞い込むようになってきた。

さらに、自分が持つ情報をより多くの人々に与えるべく、ニューズレターの発行を始めたのだが、それによってより多くの人々との接触が可能となった。

これら一連の活動を通じて、私は、ＵＦＯの目撃体験者やこの分野に真剣な興味をいだいている人々と、数多く接触することが出来た。そして多くの人々が、大衆の立場に立脚した私の公益教育活動を通じて、ＵＦＯに関する明確な情報と真の証拠に初めて接することが出来たのである。

私は常に、過去から現在に到るまでの、宇宙科学および惑星探査に関する、入手可能なあらゆる記録を調査し続けていた。

そして、自分の講義や講演の中で、時間が許すかぎり、この分野における最も重要な証拠であるアダムスキーの主張を裏付け得る最新の宇宙科学情報を紹介していた。

しかし、これまでの活動を通じて私は、興味はあるのだけれども自分自身で調査研究をする時間的余裕がないために科学的記録を満足が行くほどに分析出来なかったり、正当派科学やＮＡＳＡの発表に挑戦するための月や火星、金星に関する適当な資料が入手出来ない人々が極めて多いことを知るに至った。

私がこの本を書こうと思い立ったのはそのためである。この本で私は、この太陽系の惑星群の真の姿を示す本物の記録を、出来るだけ多くの人々に提供したいと考えたのである。

我々の近隣惑星群に人類の文明が存

▲1962年５月頃のアダムスキー。

在するという事実を知るだけでは、それらの高度な宇宙文明についての知識としてはなはだ不充分である。ましてそれだけでは、我々の世界を彼らのレベルまで進歩させることなどとても不可能なことだと言わざるを得ない。(もっとも、まずそれを知ることが先決ではあるが)

▲1981年10月17日、西ドイツ、ヴァルトキルヒのM.サイアー氏が撮影したUFO(M.ブッシュマン提供)

それは単なる第一歩にすぎないのだ。

まず人間の精神革命を

科学技術もまた、真の高度な文明を築き上げるためのほんの小さな要素にすぎない。まして人工衛星や軍事物資を宇宙空間に運ぶためにロケットを利用している程度の科学技術など、我々が真の宇宙文明を築き上げるためには何の助けにもならないのである。

何にもましてまず第一番目に必要なことは、この世界の人々の心が変わることなのだ!

我々はまず、あらゆる生命を敬うべく、正しい物の考え方を学ばねばならない。

我々地球人は口では平和や友情を声高に唱えるが、その一方で、実際の行動はそれと全く正反対のことをしている。

我々が、全ての人間が平等であることを明確に認識し、人間として、この惑星にともに住む兄弟、姉妹として、互いに心から尊敬し合うことが出来ない限り、我々には真の宇宙文明を謳歌する日など絶対に訪れない。

人間としての正しい考え方を身に付けた人々は、次に宇宙に関する真の知識を意欲的に支持するようになる。そしてそれが我々の文明を進歩させ、この地球を平和で生産的な惑星へと導くことになる。

やがて、我々にとってこれまで生命の〝神秘〟であったものが生命の〝現実〟へと変わって行くことだろう。地球を訪れているスペースピープルが理解し、生きて来た〝現実〟である。

そして地球人類は、他の惑星群の進歩した宇宙文明に関する真実を明確に理解する。

もし我々の世界が以上のラインに沿って努力を続けるならば、我々は延々と進歩を続け、やがて地球の歴史上最も素晴らしく、かつ、永遠に絶えることのない唯一の文明を築き上げることになるだろう。

この本が、多くの人々にとってUFO問題と宇宙科学への理解を増すための入門書となることを切に願うものである。さらにこの分野の研究を押し進めたいとお考えの読者には、ジョージ・アダムスキーの著書の講読をぜひおすすめしたい。(日本語版は新アダムスキー全集が中央アート出版社から刊行されている)

この分野において学び得る知識の全体から比べれば、この本で提供して来た情報は、まだほんのわずかである。この本は言わば方向を示しただけにすぎない。読者の自己研讃(けんさん)を望む。

さらに、生命に対する真の理解を得、人間としての成長を果たすためには、自分自身を良く知る必要がある。

それによって人間は、自身が持って生まれた才能をより大きく伸ばし、より素晴らしく自己を表現し、他の人々に対してより大きな奉仕をすることが可能となる。

『汝自身を知れ』とは、遠い昔から常に語られてきた大いなる知恵である。

この知恵を真に理解していたジョージ・アダムスキーは、一般によく知られている情報とともに、生命そのものの真実を我々に伝えてくれた。

社会全体として、また、UFO問題に関わる人々の一団としても、我々は現在、かつてジョージ・アダムスキーが道を開いた一九六〇年の時点から一歩たりとも前進していない。

彼は一つのプログラムを完成してこの世を去った。それは、地球人類にふさわしい宇宙科学と宇宙哲学の完全なプログラムだった。

もしそれを我々が受け入れ活用していたならば、この時点において我々は、素晴らしい文明に向けて大きな前進を遂げていたことだろう。

彼が設立したそのプログラムは、一九六五年以来、彼の親しい協力者達によって引き継がれ、現在に至っている。

この分野に興味を持つ読者からの多くの声の到着を、私は一日千秋の思いで待っている。

ジョージ・アダムスキーに関する更なる情報をお求めの方もおられよう。彼に関して知れば知るほど、我々は、他の惑星の宇宙船群来訪の持つ重要性、真の平和な文明を築く上で現在の我々に課せられている大きな責任を、より明確に認識するようになる。

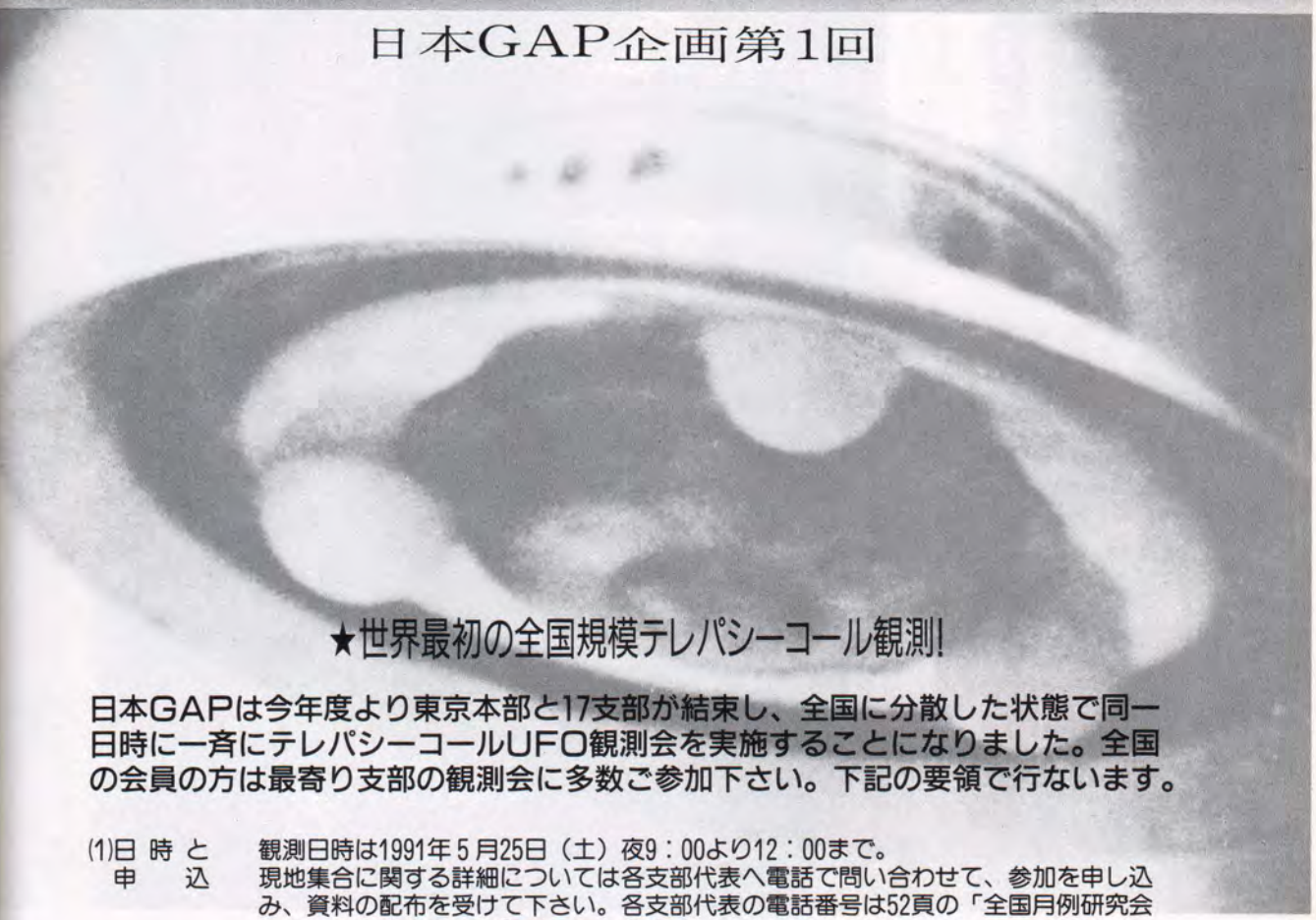
そして、もし充分に多くの人々が、正しい心のあり方と宇宙の真実を学んだならば、我々の社会はその方向を大きく変え、この地球という惑星に真の宇宙文明をもたらすための道を歩み始めるだろう。

(完)

みんな元気よく集まろう!

全国ネットワークUFO観測会

日本GAP企画第1回



★世界最初の全国規模テレパシーコール観測!

日本GAPは今年度より東京本部と17支部が結束し、全国に分散した状態で同一日時に一斉にテレパシーコールUFO観測会を実施することになりました。全国の会員の方は最寄り支部の観測会に多数ご参加下さい。下記の要領で行ないます。

(1)日時と申込　観測日時は1991年5月25日（土）夜9：00より12：00まで。
現地集合に関する詳細については各支部代表へ電話で問い合わせて、参加を申し込み、資料の配布を受けて下さい。各支部代表の電話番号は52頁の「全国月例研究会案内」の各支部の欄に記載してあります。

(2)参加資格　原則として日本GAP会員に限ります。ただし非会員でも熱意のある方は支部代表の判断により参加許可を与えます。

(3)観測要領　各支部のリーダーが指示しますから、それに従って整然たる行動をとって下さい。ばらばらになって自己流でやらないこと。

(4)観測報告　観測会の結果報告は各支部ごとに一括して6月5日までに東京本部へ送付します。（5日必着・会員個人で本部宛に送らないこと）。

(5)結果発表　本年7月発行予定の本誌114号に掲載しますが、ぼう大な量になる場合は分割して連載します。別に英文版 UFO contactee にも掲載し、世界のUFO研究団体に資料として送付します。

(6)東京本部　東京本部の観測場所は検討中です。詳細については3月末までにハガキに住所・氏名・年齢・職業を明記し、「全国ネットワーク観測会の案内書送れ」と書いて本部宛請求して下さい。地図添付の案内書をお送りします（これは東京本部の観測会に参加する方に限ります。地方支部の観測会参加希望者は上記(1)の要領に従って下さい)。

(7)天候等　悪天候の場合は観測会を延期します。但しその場合は参加申込者に中止する旨を事前に知らせますから、本部または申込支部に電話で連絡して確認して下さい。

Letters ユーコン広場

投稿歓迎 字数を問わず。匿名発表可なるも住所氏名明記のこと。

愛の想念運動を復活させよう！

東京　宇賀地岩男・孝子

とうとう悲しい戦争が始まってしまいました。この事を他人の責任にするのは簡単にできます。でも自分には何の責任もないのでしょう。

大きな木も初めはほんの小さな種でした。それと同じように、戦争、環境破壊、放射能汚染などの大きな出来事も、もともとは小さな種が拡大したものにすぎないのではないでしょうか。

二千年間、中東では一人の大師がこう言いました。「自分が人からされたいのと同じように、相手にもせよ」と。今、中東では自分が人からされたくないような事を相手に対してしているのだろうと思います。もちろん私たちも―。

アダムスキーも『UFOとアダムスキー』の中の『宇宙的真理と個人的真理』という章でこう述べています。

「この文明を絶滅させるのは爆弾ではなく、憎悪、不信、他人に対する尊敬感の欠乏です。創造主の法則は『他人からしてもらいたいと思うとおりに他人にせよ』であって、これこそ今の文明が黄金の収穫をあげることのできる唯一の法則です。この文明を救うためにはただ一戒しか必要はありません。すなわち『自分を尊敬してもらいたいと思うように、他人に対しても尊敬感を持て』です。これがなされれば、我々は偉大な未来を持つことになり、安定して、神が意図したような人間になるでしょう」

これを言い換えれば、「自分が人からされたくないと感じている事を他人にもするな」ということになるとおもいます。そこから、自分の意思を他人に押しつけたり、束縛したり、人の物を取ったり、騙したり、生命を力づくで奪ったりすることを止めていこうとする意識から、尊敬感が生まれてくると思います。

今年二月の月例会で久保田会長は平和の想念の重要さを話されました。三年前、春川正一氏も日本人の九パーセントが平和を思念するならば地球上から戦争がなくなるだろうと言われました。またジョン・レノンも『イマジン』という歌の中で平和を呼びかけています。

そこで皆さんに提案するのですが、以前に一度行なった愛の想念放射運動（本誌94号・山崎清美）を復活させてみたらいかがでしょうか。今度はあまり義務的にせずに、好きな人が好きな日に思念するのです。ただ気持ちだけは一つにするために時間だけはそろえて、例えば夜の九時なら九時に決めておいて、いっせいに平和や愛の想念を思念してみるのです。その日に思念するかどうかは自分の自由意思でかまわないと思います。

もしよかったら復活させてみませんか。ひょっとしたら人種や国境や宗教や惑星を超えるかもしれません。想念の力というものをまのあたりにするかもしれません。

愛と平和の想念でミサイルを撃ち落とし、地球の本当の平和を創り出すような生き方ができるように強く希望するものであります。

素晴らしい東京月例会

山梨県　山本美奈子

一月一二日の東京月例会での先生の素晴らしいお話を有難うございました。ヒラメキによってテレパシックに毎日を生きることの大切さを先生のお話からお教え頂きまして、夢のような素敵な一日でした。そして先生のアダムスキー哲学とGAP活動への力強い熱意と情熱を間近に感じることができて、体の芯まで澄み渡るような感じをうけました。

月例会の会場へ入ったとき、とても驚きました。正面の壁に飾られていた金星のシンボルマークから凄く強い波動を感じたのです。そして呆然としてしまいました。左のマークのあの色なのです。一月五日に雲から受けた、頭の中の四角いスクリーンのブルーの色そのものなのです。雲が周りに放っていた色と、右のマークの『すべてを見透す目』の色から同じ感じをうけるのですが――。

本当に素晴らしいペナントですね。見ているだけで幸せなフィーリングに包まれて、いままでも見ていたい気持ちでした。

今日も午後五時四五分から円盤を目撃しました。写真に撮りましたので、現像出来次第に詳しい状況をお伝え致します。

一一二号の内容に驚く

長野県　榊原心一

本誌一一二号、素晴らしい内容に感動しております。特にデンマークでの講演は本当に大成功とのこと、会員としても本当に嬉しくなってきます。また、二枚の金星の写真には感動的です。

昨年一一月と一二月の月例会テープ二本を塩尻の博田さんから頂き、早速聴きました。もっと日本GAP会員も増えてくれたらと思いました。デンマークの総人口から計算致しますと、日本GAPの会員は七千三百人位いないと恥ずかしいような気持ちですが、必ずその数字を突破する日が近いと思います。

数はともかく、なんとか会員が湾岸戦争にかかわっている人々全てに平和の波動を送ってあげたいものです。もちろん、今でもやっておられることでしょうが、時間を決めて一緒に、という訳にゆかないものでしょうか。

話変わって、五月二五日のUFO観測会は長野県では松代の皆神山がよいのではと博田さんや長野の村田さんも言っていましたので、たぶんそうなると思います。大いに盛り上がってたのしいいっときになりますでしょう。とにかく愉快に過ごしています。

日本GAPのますますのご発展をお祈り致す次第です。

ア全集に感動

横浜市　岩倉啓祐

私はかねてよりさまざまな超自然現象とされるものに興味をいだいてきた一人です。なぜなら地球上の科学はまだ非常に稚拙な状態にあり、いまだに未知である領域は無限にあるものと確信していたからです。さらに現在、人類が直面しているような問題を解決するカギが、それらの領域に隠されているに違いないと信じていたからです。

ところが最近、アダムスキー氏の著書を拝読する機会に恵まれて、その体験の内容もさることながら、登場する異星人の口より語られる哲学の内容の深さに驚嘆し、また大いに共鳴しました。「兄弟の命を奪う位なら自分が殺される方を望む」というファーコンの言葉には思わず目頭が熱くなり、心が洗われました。そして溜め息まじりに自分もかくあれたらと思いました。

申し遅れましたが、私はコンピューターのプログラマーを職業とする二七歳の男性です。いつかは人類のために真に有益な仕事をしたいと考えております。日本GAPのために何かお役に立てるかどうかは分かりませんが、今後とも頑張ります。皆様方のますますのご活躍と人類が一日も早く現状から抜け出して、真の宇宙の友邦となることをお祈り申し上げます。

親愛なる宇宙哲学普及者へ

長野県　岩本真代

本誌一一二号は鮮やかな輝きに満ちています。日本GAPも地球全体

へ活動を展開してゆくというスタートに心から喜んでお祝いを申し上げます。ささやかながら切手を寄付したいと思います。

私は大学院生ですが、何かお役に立てることがあればおっしゃって下さい。

ユーコン誌を讃える

三重県　松口幸之助

ユーコン第一一一号をお送り頂ましてまことに有難うございました。お礼の返事が遅れましてすみませんでした。本号も素晴らしい編集、内容で感嘆した次第です。表紙ですが、この色でよかったと思います。巻頭言ですが、迫力があって素晴らしい記事だと思います。マスメディアの新聞等の社説は理論が多いのですけれども、久保田先生のこの記事は私達に勇気と感動を湧き起こしてくれます。これは素晴らしいことだと思います。これで私たちは希望が持てます。イエス特集ですが、これはただ文献を読んだのではなく、実際に現地へ行った体験記事ですので鮮烈さがあります。一六頁のガリラヤ湖とエルサレムの夕日の写真ですが、詩情があって感動させられます。先生にはデンマークよりご帰国されてご苦労さまでした。有意義に成功裡に終了されたことと思います。

ユーコン一一二号を有難く頂きました。表紙の色は明るくて西洋的で見ていて気持ちいいですね。スタイルは安定していて、落ちついていますので、感じがいいと思います。巻頭言を拝読させて頂きました。正直言いまして安らぎを覚えます。写真の『金星の不思議なスジ模様』は大変迫力があり、みんなが考え込むのではないかと思います。私はいつも思っていますが、やはり久保田先生は人間を指導するために別な惑星から転生して来られた方だろうと思います。どうも有難うございました。

イデオロギーを超えた人間関係を

東京　岸本　悟

先日はユーコン一一二号を送って頂き、有難く読ませて頂きました。どれも素晴らしい内容でしたが、特にハンス・ピーターセン氏のアダムスキー秘話を大変興味深く読みました。アダムスキーの人間的な魅力に引かれてますますアダムスキーが好きになりました。

これからまた高校や中学校への献本活動を行なおうと思っています。最近何もしていなかったものですから、再び頑張ってみようと考えています。

話は変わりますが、いま世界的にいろいろと大変な時期ではありますが、このような時だからこそ、国境やイデオロギー、セクトを超えた人間関係とは何かとか、真の平和と共存と繁栄を得るにはどうしたらよいかということを大衆レベルで考え求めてゆく必要があると思うのです。まあ、基本的には誰しも幸せでありたいと願っている訳でして、そこのところでは同じな訳ですから、今はバラバラでも何かがきっかけとなって協調するようになるかもしれませんね。私はそこに期待しています。

謎の物体を目撃

松本市　林　育衛

私は当地にて婦人ファッション衣料小売の自営をやっております。

平成二年一〇月二五日午後四時二〇分頃、当地のショッピングセンター・カタクラモールで所用を済ませて屋上駐車場より車に乗り、帰路についた時、もう西側の空は暮れていましたが、まだ明るさは充分あり、アルプスの峰々は美しいシルエットとなって晴れ渡っていました。

そのとき、山々の少々上の所に月くらいの明るさにて彗星のように上がホーキ状になった物体が、見かけ上五センチくらいの大きさではっきりと見えるではありませんか。日没後すぐに見えるあのような物体は彗星ではないかと思いましたが、その頃の新聞には何一つ騒がれてはいませんでしたし、あるいはUFOかもしれないという気がしました。

続いてその物体を見守りながら運転して帰途につきましたが、一つの浮き雲に隠れてからは見えなくなりました。流れ星なら猛スピードで消えてしまうのに、ゆっくりと、あたかも浮いているかのごとく序々に西へ飛んでゆくように見えました。明るさは夕方出ている月のように白く見えました。ただその物体は上の方がホーキ状になっており、円盤状には見えませんでした。また、これほど大きく見えるのなら他に見ている人がいないかと、あたりを見回しましたが、中途半端な時間なのか誰も見ていないようでした。

第12回 山形・仙台合同支部大会

■日　時　1991年5月4日（4連休の2日目）午後1:00→5:00
■会　場　『天童市中央公民館』３Ｆ実習室
山形県天童市老野森1-1-1 ☎0236-54-1511
ＪＲ天童駅よりバス５～６分(温泉西下車。市役所の裏)。
山形空港からタクシーで約15分。
■会　費　¥2,500（全員記念写真代は送料共¥1,000を別納――希望者のみ）
■プログラム　司会：柴田文子
1:00　両支部代表挨拶／柴田光明・笠原弘可
1:10　講演「アダムスキーの真実性と宇宙哲学の生かし方」／日本ＧＡＰ会長・久保田八郎先生
2:40　超能力開発指導／東京本部役員・遠藤昭則氏
3:10　全員記念撮影／休憩
3:30　全員自己紹介／質疑応答
5:00　閉会
■夕食会　6:→8:30（希望者のみ）
会場『滝の湯ホテル』１Ｆ藤の間 ☎0236-54-2211
大会会場から徒歩５分。
■会　費　¥6,000
■宿　舎　『天童パークホテル』を斡旋。
天童市東本町2-53 ☎0236-54-0456
シングル¥4,400／ツイン¥9,000
大会会場から徒歩５分。
■観　光　５月５日(日)　新緑に萌える鳴子方面と熱帯植物園等を見学。参加費¥3,000（昼食代を含む）
■申　込　大会、夕食会、宿舎、観光の申込はハガキまたは電話で下記へ４月20日頃までにお願いします。
〒999-51 山形県新庄市大字萩野82
柴田光明 ☎0233-25-3261
■その他　山形支部の５月の月例会は中止。仙台支部は平常どおり５月の月例会を開催します。

毎年開催している合同支部大会の第12回目を今年も実施します。美しい大自然に囲まれた名高い将棋の駒生産の町・天童(てんどう)にてまたも開催される素晴らしい支部大会セミナーへ多数ご参加下さい。久保田先生と遠藤講師の熱のこもったご指導により、一挙に地球的睡眠から宇宙的覚醒へと導かれるでしょう。ＵＦＯの出現した天童でまたも驚異のハプニングが発生するかも？

観光は天下の景勝地・鳴子と熱帯植物園へ。両支部会員一同心をこめ暖かくお迎えします。

天童市中央公民館

第8回 旭川・札幌合同支部大会

■日　時　1991年6月23日（日）午後1:00→5:00
■会　場　『旭川ターミナルホテル』６Ｆ
☎0166-24-0111
ＪＲ旭川駅前（下の写真中、左側は旭川駅、右側が会場のホテル）
■会　費　¥2,000（全員記念写真代は送料共¥1,000を別納――希望者のみ）
■プログラム　司会：伊藤重信
1:00　両支部代表挨拶／川上三秀・高野省志
1:15　支部会員講演／島田幸典
1:45　講演「浮上するアダムスキー問題と幸福をつかむ方法」／日本ＧＡＰ会長・久保田八郎先生
3:00　全員記念撮影／休憩
3:30　全員自己紹介／質疑応答
5:00　閉会
■夕食会　6:00→8:00　同ホテル６Ｆ別室（希望者のみ）
■会　費　¥6,000
■宿　舎　『旭川ワシントンホテル』を斡旋。
旭川市１条６丁目 ☎0166-25-3311
シングル¥5,500／ツイン¥10,000
■観　光　６月24日(月)　拓真館(前田真三氏写真ギャラリー)、美瑛丘陵地帯、十勝岳等を周遊。9:00出発～午後2:00解散。参加費¥2,000
■申　込　大会、夕食会、宿舎、観光の申込はハガキまたは電話で下記へ６月10日頃までにお願い致します。
〒070 北海道旭川市神楽６条８丁目
川上三秀 ☎0166-61-0044
■その他　６月の月例会は中止します。

北海道も負けてはいません。今年もまた久保田先生を迎えて雄大な大自然の展開する土地で合同支部大会を開催します。先生に親しく接して素晴らしい宇宙哲学その他の秘話を聞き、アダムスキー問題の真意を汲みとって、宇宙的な境地に到ろうではありませんか。翌日の観光では写真家として名高い前田真三氏のギャラリーを見学し、美しいラベンダーの美瑛大丘陵地帯を散策、十勝岳に登って清純な空気をたっぷり吸います。観光を兼ねて多数ご参加下さい。一同暖かくおもてなし致します。

旭川ターミナルホテル

本誌バックナンバー掲載記事目録

※印は絶版。在庫なし。お申し込みの際は郵便振替にて日本GAP宛ご送金下さい。バックナンバーに限り送料は不要です。

No.112 平成3年1月25日発行 ¥900

アダムスキー問題と日本GAP ―― 久保田八郎
宇宙人の遺体はロボットだった！ ―― ハンス・ピーターセン
高度に進化した金星人の実態(完) ―― G.アダムスキー
〈写真〉金星の不思議なスジ模様 ――
青森県に頻発するUFO出現事件 ――
UFO-宇宙からの完全な証拠⑭ ―― ダニエル・ロス

No.111 平成2年10月25日発行 ¥900

高度に進化した金星人の実態 ―― G.アダムスキー
金星から転生してきたイエスの大地へ ―― 久保田八郎
長野県に出現した巨大母船型UFO ―― 村田正道
美しいUFOが赤城山付近を飛ぶ ―― 番場博次
松本市にもフットボール型UFO ―― 茶谷健一
北海道に現れたアダムスキー型円盤 ―― 堀江健一
私のテレパシックな不思議人生 ―― 郡司典子
UFO-宇宙からの完全な証拠⑬ ―― ダニエル・ロス

No.110 平成2年7月25日発行 ¥900

UFOの正体と観測の仕方 ―― 本誌編集部
UFO・異星人との遭遇体験記 ―― 藤本定雄
宇宙哲学で奇跡を起こして安全に生きる方法 ―― 久保田八郎
西郷隆盛の最期を透視 ―― 遠藤昭則
アダムスキー秘書との対話 ―― 向井 裕
アメリカGAP発足！(完) ―― ダニエル・ロス
UFO-宇宙からの完全な証拠⑫ ―― ダニエル・ロス

No.109 平成2年4月25日発行 ¥900

豊かで素晴らしい他の惑星と生命の連続 ―― G.アダムスキー
UFO、朝霧高原に出現！ ――
デザートセンター円盤着陸事件(2) ―― 久保田八郎
強烈に輝くUFOを見た私たち ―― 川野綾子
オーラ、宝石、超魔術、チャネラー ―― 遠藤昭則/秋山眞人
「アメリカGAP」発足！ ―― ダニエル・ロス
UFO-宇宙からの完全な証拠⑪ ―― ダニエル・ロス

No.108 平成2年1月25日発行 ¥900

地球へ救援に来るUFOと転生の法則 ―― G.アダムスキー
奇跡をもたらす「生命の科学」 ―― 久保田八郎
超能力開発の新しい視点 ―― 秋山眞人
潜在意識としてのDNA ―― N.H.M.D.
私は巨大な母船を見た ―― 小瀬村芙美子
私についてきた光るUFO ―― 郡司典子
GAP海外旅行で目撃した数々のUFO ―― 中根 豊
ロイよ、来て助けておくれ！ ―― 久保田八郎
UFO-宇宙からの完全な証拠⑩ ―― ダニエル・ロス

No.107 平成元年10月25日発行 ¥900

テレパシー開発法とUFOの実態 ―― G.アダムスキー
マチュピチュとナスカの謎 ―― 久保田八郎
私はペルーでUFOを見た ―― 富岡設子
アダムスキーに会った唯一の日本人(完) ―― 向井 裕
超能力開発の基礎レッスン ―― 斉藤庄一
宇宙哲学を生かした超能力開発法 ―― 遠藤昭則

No.106 平成元年7月25日発行 ¥900

金星から知的メッセージを受けたマリナー2号 ―― G.アダムスキー
アダムスキーに会った唯一の日本人② ―― 向井 裕
宇宙哲学で奇跡を起こす方法 ―― 久保田八郎
ヒーリングとテレパシー ―― 遠藤昭則
テレパシー現象の医学的考察 ―― N.H.M.D.
UFO-宇宙からの完全な証拠⑨ ―― ダニエル・ロス

No.105 平成元年4月25日発行 ¥900

デザートセンター円盤着陸事件 ―― 久保田八郎/篠芳史/坂本貢一・茂子
アダムスキーに会った唯一の日本人① ―― 向井 裕
過去生透視法とその実例② ―― 遠藤昭則
輝く星々の彼方へ ―― 斉藤庄一
長野県に巨大UFO出現！ ―― 博田文喜
UFO-宇宙からの完全な証拠⑧ ―― ダニエル・ロス

No.104 平成元年1月25日発行 ¥900

UFO問題と世界の運命 ―― 久保田八郎
アダムスキーの宇宙的カルマと異星人の援助 ―― アリス・ポマロイ
デザートセンターで円盤着陸痕跡発見！ ―― 安藤澄雄/久保田八郎
過去世透視法とその実例 ―― 遠藤昭則
UFO-宇宙からの完全な証拠⑦ ―― ダニエル・ロス
GAP活動の原理 ―― ダニエル・ロス

No.103 昭和63年10月25日発行 ¥900

アダムスキーの体験は真実だった！ ―― アリス・ポマロイ
我らの惑星に愛と希望を ―― 久保田八郎
カイロ上空に輝くUFOが出現 ―― 伊東芳和
私のUFOコンタクトと宇宙的目覚め ―― 富岡設子
UFO-宇宙からの完全な証拠⑥ ―― ダニエル・ロス

No.102 昭和63年7月25日発行 ¥900

UFO目撃で驚嘆、大変化した私 ―― 後藤泰二
仙台市上空にUFO長時間出現 ―― 遠藤昭則
富士山周辺でテレパシーに応えるUFO群 ―― 長沼宏志
ミラクルワードとイメージ法で奇跡を起こす ―― 田中 正
良い想念であなたの環境は良くなる ――
UFO-宇宙からの完全な証拠⑤ ―― ダニエル・ロス

No.101 昭和63年4月25日発行 ¥900

宇宙的家族のUFO目撃の日々 ―― 坂本茂子
精神的指導者に対する警告 ―― G.アダムスキー
円盤の窓から手を振る"異星人" ―― 齊藤庄一
長野県に出現したUFOの大群 ―― 博田文喜
頻繁なUFO目撃と超能力体験 ―― 佐々木八郎
UFO-宇宙からの完全な証拠④ ―― ダニエル・ロス

No.100 昭和63年1月25日発行 ¥900

UFO問題とアダムスキー ―― 久保田八郎
富士山二合目から目撃したUFO ―― 遠藤昭則
私はこうして超能力を開発した ―― 坂本正廣
アメリカの不思議な土地 ―― 水野和彦
UFO-宇宙からの完全な証拠③ ―― ダニエル・ロス

No.99 昭和62年10月25日発行 ¥700

UFO-宇宙からの完全な証拠② ―― ダニエル・ロス
山中湖畔で空中を飛んだ自動車！ ―― 清水 南
富士山にUFOが大挙出現 ―― 清水敏恵
〈写真〉大分市上空のUFO ――
アダムスキーの大地とマヤの国へ ―― 久保田八郎

No.98 昭和62年7月20日発行 ¥700

木星の衛星イオに古代都市跡を発見！ ――
UFO-宇宙からの完全な証拠① ―― ダニエル・ロス
静岡市上空にUFO頻繁に出現 ―― 遠藤昭則
太陽系惑星にまだ仲間がいる？ ――
連夜のテレパシー送信に応じて出現した円盤 ―― 片岡 豊
万物の実体と想念の重要性 ―― 知念清邦
私は別な惑星へ行ってきた！(最終回) ―― 春川正一

●東京月例会

今年1月12日撮影。会場は都内上野公園内「東京文化会館」

◀東京月例会は2月より第1日曜日に変更したためか出席者が大幅に増えて毎回100名前後の大盛況を呈している。写真は左上より受付、会場内。右上より久保田会長の講義、下は遠藤講師の超能力開発指導。

『新アダムスキー全集』の取扱い

次頁広告の『新アダムスキー全集』は日本GAPでも取扱います。巻数、題名、冊数を明記の上、現金書留か郵便振替で日本GAP宛ご注文下さい。各冊のトビラに久保田八郎が署名して発送します。送料は1冊¥260、2冊¥310、3冊¥360、4冊以上¥830。以上を加算して下さい。

英文版「UFO contactee」No. 7 ―6月末刊行予定―

B5／12頁／コート紙使用／
¥500（送料¥175／3冊まで¥250）

世界のUFO研究会で注目の的になっている日本GAP発行英文版は、各国UFO研究家や団体が絶賛。UFO問題は国境を越えた宇宙的な要素を帯びていますから、英文による国際版が情報伝達に重要。No.7は春川正一氏の連載記事「A Young Japanese Man Visits Other Planets」、久保田会長が昨年10月、デンマークで行った講演全文、アダムスキーの質疑応答、その他を写真と共に掲載。久保田八郎、坂本貢一執筆の記事を米人学者が校閲。流麗な英文は英語学習用にも最適です。ご注文は振替か低額切手でどうぞ。

―日本GAP―

編集後記

★ファティマの大事件については古い号に掲載したことがありますが、読者のご要望にお応えして再度登場させました。この事件では第三次大戦の予言がなされており、それが隠蔽されているという情報がありますが、真相は不明です。

★ピーターセン氏の秘話も佳境に入りました。氏も第三次大戦に言及していますが、これは次号で詳しく語っています。

★「ティモシー・グッドのアダムスキー体験」は迫力ある実話です。博学多識、英語、フランス語の達者な中村省三氏の多年に渡る研究成果の一端といえるでしょう。それにしてもスティーブン・ダービシャーが健在とは驚きです。いつか渡英して取材したいものです。

★遠藤氏の「オーラ透視力開発法」も素晴らしい記事です。うんと練習してみて下さい。

★絶賛を博した「UFO―宇宙からの完全な証拠」もついに完結しました。単行本になります。本誌の古い号を持たぬ方に便利です。

★本誌は全国少数の主要書店に出ていますが地方の方には入手困難な場合がありますから、会員として予約講読されることをお勧めします。ハガキに「日本GAP入会案内書送れ」と書いてお出し下さい。

★UFO目撃報告、UFO写真、超能力開発体験、宇宙哲学研究実践、宇宙科学等の原稿や資料を募集しています。原稿書きの不得手な方は面談でもかまいません。（心霊は不可）。

★本誌は多数のボランティアによる全国の主要書店に卸されています。この活動に参加希望の方はハガキでお申し込み下さい。説明書をお送りします。（K）

日本GAP機関誌・季刊　夏季号
UFO contactee　113号
編集発行人　久保田八郎
発行所　日本GAP
〒133東京都江戸川区本一色1-12-1-511
☎03-3651-0958
振替　東京4-35912
一九九一年四月二五日発行
定価九二七円（本体九〇〇円）・送料210円
※本誌掲載の全記事・写真共、他の印刷物への無断転載を禁じます。

絶賛発売中

新アダムスキー全集

――全面改訂・改訂　全10巻――

久保田八郎・訳／各四六判

CAP 中央アート出版社・発行　〒104 東京都中央区京橋3－7－13 三成ビル5F　☎03(3561)7017●郵便振替 東京8－66324

超絶した大文明を持った、太陽系の他の惑星群の人々とコンタクトしたアダムスキーを米政府機関は密かにマークしていた！ UFOや惑星群の驚異的実態と深遠な宇宙思想を伝える本全集は、地球人類に宇宙的覚醒の必要性と真の生き方を示す永遠の古典。UFOと宇宙哲学の研究者にとって必読の名著。旧全集を全面改訂した最新決定版。世界に類書なき金字塔！

アダムスキー

❶ 第2惑星からの地球訪問者　352頁・定価1980円

UFO研究家として世界的に著名なジョージ・アダムスキーの、1952年11月20日、米カリフォルニア州の砂漠に着陸した円盤から出てきた金星人との会見から始まる驚異的なコンタクト実録。著者みずから円盤や母船に乗り組み、他の惑星の超絶的大文明の実態を明かにする、本全集の中心の書。写真多数収録。

アダムスキー

❷ 超能力開発法（テレパシー、遠隔透視その他）　192頁・定価1300円

世間に氾濫する通俗的な超能力開発法とは根本から異なる宇宙的能力の発現法を説いたもの。目、耳、鼻、口、の四官をコントロールして、肉体内部の宇宙の意識から来るメッセージを感受し、真の意味でのテレパシー、遠隔透視その他の超能力を身につける方法を具体的に詳述。類書皆無の重要文献。

アダムスキー

❸ 21世紀/生命の科学　208頁・定価1300円

アダムスキーが他界する前年に出した12冊分の講座を一冊にまとめたもの。アダムスキー宇宙哲学の総括的な一大金字塔。特に人体細胞の実態と真実のテレパシー、及び霊界通信の誤り等を科学的に解説した超能力開発指導書。心霊現象への接近を警告する画期的な理論を明快に説く、第5巻の続編として必読のテキスト。

アダムスキー

❹ UFO問答100　218頁・定価1300円

1958年にアダムスキーは、世界中から来る質問の洪水を分類して質疑応答集を出した。全部で100問のUFO関係の質問に懇切な回答を与えている。現在の混迷した世界のUFO研究界に的確な示唆と回答を示すものとして、内容は今も驚くほど新鮮で有用である。UFO研究者の素晴らしいガイドブック。

アダムスキー

❺ 金星・土星探訪記　380頁・定価2400円

アダムスキーが大母船に乗せられて、想像を絶する進歩をとげた金星と土星を訪れた体験記。特に金星人の少女として生まれかわった亡き妻メリーとの劇的な対面が圧巻。第2部には1958年以来、日本におけるアダムスキーの代理人として啓蒙活動に専念している久保田八郎宛の多数の書簡を収録。

アダムスキー

❻ UFOの謎　262頁・定価1980円

UFOの推進原理をはじめ、聖書とUFOとの関連などを詳述して様々なミステリーを解明した重要な文献。第2部はアダムスキーの世界講演旅行記で、各国GAP網の活動状況が克明に描写されていて1960年代のUFO研究界の実情と一般人の宇宙観がよく理解できる。第1巻の続編。

アダムスキー

❼ 21世紀の宇宙哲学　148頁・定価1030円

地球人が真に宇宙的な成長をとげるための基本的思想として、マインド(心)と肉体内部に宿る宇宙の意識との一体化を説いた書。既成のあらゆる宗教や哲学では理解し得なかった人間の意識と万物との関係を説いて21世紀の思想を先取りした。第5巻、6巻と合わせてアダムスキー哲学の三部作をなす。

アダムスキー

❽ UFO・人間・宇宙　370頁・定価2400円

アダムスキー支持活動団体として世界のトップクラスをゆく日本GAPの機関誌に掲載された、アダムスキーのUFOと宇宙哲学関係の論文、講演録等を編集。他界する直前の最後の講演が圧巻。第2部には訳者・久保田八郎が再三渡米してアダムスキーの今は亡き高弟たちと接したインタビュー記事を収録。

アダムスキー

❾ UFOの真相　320頁・定価1980円　1991年4月刊！

アダムスキーの薫陶を受けた人達の論説・講演録等を収録。宇宙的実像と人間味豊かな庶民性をあわせもつ偉人の素顔を多角的に描写。ア氏の高弟アリス・ボマロイ、キース・フリットクロフト、ハンス・ピーターセン、金星文字を解読して画期的な永久モーターを開発したバシル・パン・ゼン・バーグらの証言が白眉。「サンビエトロ大寺院の異星人」と題する久保田八郎の体験記も興味深い。

アダムスキー

❿ 評伝・ジョージ・アダムスキー（仮題）　1991年8月刊！

壮大な新アダムスキー全集の最後をしめくくる完結篇。アダムスキーの宇宙的な活動と深遠な哲学を集約して伝えるとともに、彼の伝記をも加えてこの巨人の人間像を克明に描写。これ1冊でアダムスキー問題の何たるかが理解できる全集のコンパクト版。豊富な写真入り。国際的なアダムスキー研究家・久保田八郎が書き下ろし執筆。

UFO―宇宙からの完全な証拠　1991年6月刊！

ダニエル・ロス著／久保田八郎訳

アメリカの気鋭UFO研究家ダニエル・ロス氏が全力で展開したUFO問題の真相。月・惑星探査結果に関するNASA(米航空宇宙局)の隠蔽工作を暴露し、アダムスキーの体験の真実性を科学的に実証した画期的な内容の本書は、UFOの研究者のみならず、宇宙科学に関心ある人にもきわめて有益な知識情報の源泉となる。写真多数掲載。

Ⓐ テレパシー能力開発用

ESPカード

このカードはアメリカのデューク大学で研究開発された超能力開発練習用として最適のものです。５種類の図形カードが各５枚ずつ、計25枚１セット。堅牢な厚紙製。重さ40ｇの軽量。ポケットに入れて携帯に便利。使用説明書付き。

¥900　送料¥120(2〜5個¥175)

Ⓑ

①オーソン肖像写真

②シンボルマーク

①は新アダムスキー全集『第２惑星からの地球訪問者』に出てくる金星人オーソンの肖像。目撃者アリス・ウエルズ女史のスケッチに基づいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた等身大の油絵のキャビネ判写真。10.5cm×17cm

②は金星のシンボルマーク。中央の眼は万物を見透すパワーをあらわし、周囲の４層の星は人間のマインド（心）の発達状態をあらわしている。手札判。9.3cm×8.8cm

①¥1000　送料¥120
②¥ 500　送料¥ 62
①②共ご注文の場合は送料¥120

Ⓕ

日本GAP能力増進テープ

毎月開催される日本ＧＡＰ東京月例研究会セミナーから、久保田会長の解説講義と遠藤講師のテレパシー開発指導などをカセットテープに録音したもの。絶大な信念と勇気がわき起こり、宇宙的カルマ形成に役立ちます。

テープ①　1991年度は久保田会長による新アダムスキー全集第２巻『超能力開発法』の解説講義。近況報告。収録100分前後。

テープ②　遠藤講師のテレパシー開発指導。質疑応答。収録90分前後。

①¥1300　送料¥175
②¥1000　送料¥175
①②共ご注文の場合は送料¥250

★上記カセットテープの注文に限り下記へお願いします。（○年○月分と明記下さい）前年迄の編集内容と異なります。

日本GAPでは取扱いません

◇申込先◇
〒133 東京都江戸川区本一色1-24-3-202
松村芳之　☎03-3653-9387
振替／東京0-162644

Ⓒ

GAP特製

テレホンカード

すでに３種類のテレホンカードを出した日本ＧＡＰが放つ第４弾。アダムスキーの肖像を入れた上品なデザインのカード。

①②③は品切れ絶版。

１枚¥1500
送料10枚まで¥62

Ⓓ

会員バッジ

金星のシンボルマークが金色に輝く優雅なデザインのバッジ。表面の透明樹脂がキズを防ぎ、光を反射して輝きます。男性用は裏の留め金が心棒ネジどめ式。女性用は安全ピン式。ご注文のさいは、いずれかを明記して下さい。実物径17mm。

１個¥2000
送料４個まで¥120

Ⓖ

日本GAPビデオ

今年から日本ＧＡＰのイベントをビデオにして頒布することになりました。各巻ＶＨＳ、画像は鮮明です。

『東京月例会セミナー』¥4000
久保田会長解説講義と遠藤講師の超能力開発指導。全1巻120分。（毎月内容が変わります）

『1990年度 日本GAP総会』上・下各¥3000
（上）原永倉氏の講演
（下）久保田八郎会長の講演

『デンマークGAP大会』上・下各¥3000
（上）久保田八郎会長の講演（英語）、その他。（英文テキスト、日本語訳文付き）
（下）デンマーク探訪記

＊送料＝１本¥360・２本¥510。

日本GAPでは取扱いません

◇申込先◇
〒162 東京都新宿区富久町36-18
富久マンション103
伊東芳和　☎03-3351-9526
振替／東京4-13811

Ⓔ

〈新製品〉GAPキーホルダー

多数の方の要望に応えて製作したＧＡＰオリジナル・キーホルダー。シンボルマークの周囲をWITH COSMIC CONSCIOUSNESS（宇宙の意識とともに）の金文字が取り巻く優美なデザイン。常時携帯すれば宇宙的フィーリングを失いません。メダル部分は径32mm、全長90mm。

１個¥1900
送料¥120

Ⓕ/Ⓖ以外の品のご注文方法

住所・氏名・電話番号・商品番号・商品名・種類・個数等を明記の上、郵便振替または現金書留で日本ＧＡＰ宛お申し込み下さい。代金後払いのご注文も承ります。ハガキに必要事項をご記入の上、投函して下さい。品物をお送りするときに専用振替用紙を同封しておきますから現品致着後、それを用いて郵便局よりご送金下さい。振替送金は当方へ届くまでに約１週間かかります。（この欄の商品はすべて消費税は無関係です）

〒133 東京都江戸川区本一色1-12-1-511　日本GAP　☎03-3651-0958　振替・東京4-35912

平成3年度

日本GAP全国月例研究会案内

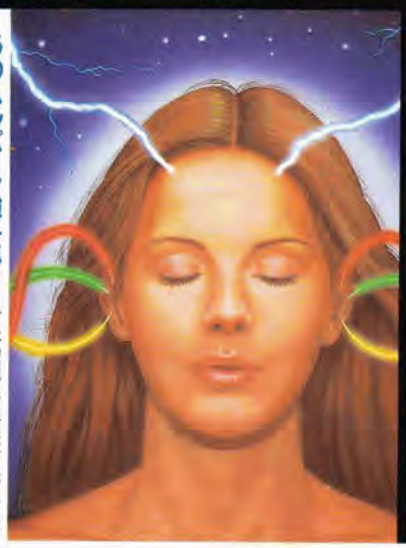
支部名	日　　時	会　　場	会費	プログラム・テキスト
東京本部	毎月第1日曜日　午後12:30→4:45 ※5月より上記の通り時間を変更。 ※開催日の臨時変更 5月＝12日（第2日曜日） 6月＝9日（第2日曜日） 7月＝21日（第3日曜日）	上野公園内「東京文化会館」4F 大会議室。 ☎03-3828-2111。JR上野駅「公園口」改札口の真向かい。 連絡先＝日本GAP本部　☎03-3651-0958	会場費 ¥500 セミナー 受講料 ¥1000 計¥1500	1:00→1:30　会員による体験講演。 1:30→3:00　久保田会長による講義。 テキスト＝『超能力開発法』 3:10→5:00　遠藤講師によるテレパシー開発練習／近況報告／質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」 ☎388-7351。JRまたは阪急電車吹田駅下車。 連絡先＝平塚和義　☎06-436-3478	¥300	東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。 テキストその他＝東京本部に同じ。
新潟支部	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00 ※会場は4月より右記の新築場所に移動。要注意。	新潟市東万代町9「新潟市青年の家」 ☎025-244-6766。JR新潟駅より徒歩5分。 連絡先＝星　富治夫　☎02579-2-5562	¥500	同　上
名古屋支部	毎月第2日曜日　午後1:00→4:30	名古屋市中区金山1丁目5番1号「名古屋市民会館」特別会議室。☎052-331-2141㈹。 JR東海・名鉄・地下鉄の金山橋より徒歩5分。 連絡先＝林　国宣　☎0586-45-6468	¥300	同　上
仙台支部	毎月第3日曜日　午後1:10→4:20	仙台市青葉区1番町4丁目「141(イチヨンイチ)ビル」内5F「エル・パーク仙台セミナー室」☎022-268-8300。仙台駅よりバスで県庁市役所前下車、三越デパート隣。 連絡先＝笠原弘可　☎022-295-0725	¥300	同　上
山形支部	毎月第1日曜日　午後1:00→5:00 ※5月は大会のため月例会は中止。 ※6月のみ第2日曜日の9日に変更。	山形県天童市老野森1丁目1-1「天童市中央公民館」 ☎0263-54-1511。天童駅から徒歩10分、タクシー4分。天童市役所の裏側。 連絡先＝柴田光明　☎0233-25-3261	¥300	同　上
札幌支部	毎月第1日曜日　午後1:00→4:30 ※日時・会場は不定につき、高野宛問い合わせること。	中央区北一条西13丁目「札幌市教育文化会館」会議室。 ☎011-271-5821。 連絡先＝高野省志　☎011-783-6393	¥500	同　上
旭川支部	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00 ※6月は大会のため月例会は中止。	旭川市五条4丁目「旭川ときわ市民ホール」3F 302研修室 ☎0166-23-5577 連絡先＝川上三秀　☎0166-61-0044	¥500	同　上
青森支部	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00	青森市松原「青森市民文化センター」教養室。 ☎0177-34-0163。 連絡先＝田村嘉彦　☎0177-38-0416	¥500	同　上
沖縄支部	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00	具市川市栄巣野比1213-1「具志川市野外レクセンター」会議室。 ☎09897-2-7722 連絡先＝比嘉政広　☎09893-3-2889	¥500	同　上
秋田支部	毎月第2日曜日　午後1:00→5:00	秋田市八橋運動公園1-2「中央公民館」趣味の間。 ☎0188-24-5377。 連絡先＝伊藤正治　☎0188-62-2831	¥500	同　上
横浜支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	横浜市中区万代町2-4-7「横浜市技能文化会館」7F 703号室。 ☎045-681-6511。JR関内駅、地下鉄・伊勢崎長者町駅より徒歩3分。 連絡先＝清水　正　☎048-866-7048	¥500	同　上
茨城支部	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00	水戸市梅香1-2「三の丸公民館」小集会室。 ☎0292-24-6600。水戸駅北口より徒歩10分。 連絡先＝清水勝一　☎0292-73-1903	¥300	同　上
長野支部	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00	塩尻市大門7番町「塩尻総合文化センター」第1会議室。 ☎0263-54-1253。 連絡先＝博田文喜　☎0263-58-8510	¥500	同　上
紀南会	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00 ※代表が長期療養のため月例会は当分休会。	和歌山県新宮市新宮6682-1「新宮市福祉センター」1F相談室。 ☎0735-21-2760。JR西日本新宮駅下車、徒歩5分。 連絡先＝(副代表)小川隆志　☎0735-32-2834	¥300	同　上
栃木支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	鹿沼市市役所裏「御殿山会館」1F小会議室。 ☎0289-64-4334。JR鹿沼駅から西へ1.5km。東武新鹿沼駅から北へ1.5km、市内行きのバスに乗り天神町下車。徒歩5分。 連絡先＝渡辺克明　☎0289-62-3319	¥500	同　上
南九州支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	鹿児島市与次郎2丁目3-1「鹿児島市民文化ホール」 ☎0992-57-8111。 連絡先＝鶴田清則　☎0993-25-4398	¥500	同　上
高松支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00 ※日時・会場は変更もあるため、関宛問い合わせること。	高松市番町1-8-22「高松市立市民会館」会議室。 ☎0878-39-2888。JR高松駅より徒歩15分。 連絡先＝関　高明　☎0875-72-2698	¥400	同　上

サブリミナルテープ
潜在脳刺激法であなたの人生が変わる！

今なら各シリーズを無料試聴できます。

マインドパワー・潜在能力を開発

「マインドパワーの開発」「充実した人生」――これらを簡単に現実のものにしてくれる驚くべきテープがアメリカからやってきました。アメリカの著名な心理学者S・ハルパーン博士の開発した"サブリミナル・プログラム"がそれ。なにせ美しいBGM音楽を聴き流しているだけで確実な効果があるというのですから、これを利用しない手はありません。



あのハルパーン博士があなたのために制作！

「マインドパワーの開発」「充実した人生」……これらを現実の物にしたい！――これは、どんな人でも多かれ少なかれ持っている共通の願望でしょう。ところが、この夢をいとも簡単に実現してしまうテープがアメリカからやってきたのです。それがアメリカでは知らない人はいないほど有名な心理学博士スティーヴン・ハルパーン氏の開発したサブリミナルテープです。博士の手になるサブリミナルテープは、米国で昨年一年間だけで五十数万本という驚異的ベストセラーを続け、その確かな効果が実証されています。

BGMとして聴くだけで効果が!!

このサブリミナルテープ、耳に聴こえるのは、うっとりするような美しいメロディーの心がゆっくりとくつろいでくる静かな音楽だけです。

（日本の曲でいえば"喜多郎"の音楽にイメージが似ている。この音楽だけでもストレスを解消し、気分をさわやかにするすぐれた効果がある）

しかし、実はこの音楽に、ハルパーン博士が開発した他に真似のできない高度な音響テクノロジーを駆使して、ある心理学的な言葉のメッセージが耳に聴こえない周波数に変換されて入っているのです。（潜在脳に独特の刺激を与える音楽の波長が、耳に聴こえないメッセージの波長を潜在脳へ運び、植えつけてしまう。）

この音楽に交って入っている"耳に聴こえない心理学的メッセージ"が、ただテープの音楽を聴いているだけで、"潜在能力が開発される"、"充実した人生へ歩み始める"という現象を引き起こす秘密なのです。

『本を読んだり趣味に熱中している時に、BGM音楽として聴き流しているだけで、夢がかなってしまう』――このアメリカの苦労いらずの科学的プログラムが、ついに日本の皆様にもご利用いただけるようになったのです。

商品お申込み案内書請求の方に試聴用テープを無料進呈！

① マインドパワー・潜在能力を開発 マインドパワーシリーズ〈MDシリーズ〉

あなたの心と体をゆったりともみほぐし、不安・緊張や心と体の疲れを取り除いてくれる宇宙的感覚のα波BGM音楽に、あなたの意識を拡大し、精神力（マインドパワー）や秘められた潜在的能力を自然に開発するサブリミナル・メッセージを同調させたのが、このMDシリーズです。

会社から帰ってその日の疲れを癒したい時、日常生活のわずらわしさから解放されたい時、静かなBGM音楽を流して気分転換をしたい時、そんな時にMDシリーズをBGM音楽としてお楽しみ下さい。各種の瞑想法で得られる「意識の拡大」「α波レベルの脳波の強化」「心の安らぎ」「秘められた潜在能力の開発」「精神力の強化」「人間性・人格の向上」等の効果が得られ、より大きな人間に成長してゆく自分と今まで以上に拡大していく人生を手に入れることができます。

MDシリーズのお届けするテーマの内容は、●完全なる安らぎ●意識の拡大●大いなる自分との出逢い●無限大の心●宇宙意識の目覚め●人間性・人格の向上●愛と慈悲のエネルギー●精神力の強化●偉大な潜在能力の開発●第六感の開発●自由自在な思考力●無限の知恵の獲得

（このシリーズのサブリミナルテープのベース音楽には、ハルパーン博士の友人である"ヤソス"の宇宙音楽をはじめ素晴しい瞑想音楽が使われています。）

② 現状を打破し充実した人生を 充実人生シリーズ〈HLシリーズ〉

「今のままではいけない！」「もっと充実した人生を送るために何かをしなければ……」――そう心の中では感じているんだけれど、現状を打破する第一歩を踏み出すキッカケをつかめずに毎日を惰性に引きずられて何となく過ごしてしまっている、という方にお勧めするのがHLシリーズです。

現状から抜け出し新しい人生に向けて第一歩を踏み出す動機づけと、毎日がワクワクするような胸のときめきを覚える充実した人生を送るために必要な能力や行動力を自然に身につけられるよう、魂にひびきわたる美しい音楽にまぎれたサブリミナル・メッセージが、あなたの潜在意識にやさしく語りかけます。

就寝前や、「ちょっとBGM音楽でも流そうかナ」と思った時にこのHLシリーズを軽いBGM音楽としてお楽しみ下さい。

HLシリーズのお届けするテーマの内容は、●現状を打破する●目標・計画づくりの習慣●惰性からの脱却●最高の人生を考える●自分の可能性を試す●すぐ実行する習慣●必要な読書・勉強の実行●毎日ベストを尽くす●プロフェッショナルをめざす●向上意欲の強化●充実した人生を生きる●大いなる未来へはばたく

（このシリーズにはヒプノシス・プログラムは付いていません。各テープともA面B面を通してオートリバースでお使いになれます。）

※このHLシリーズには、充実人生計画シート、充実人生コンセプトシートが付いています。

●スティーヴン・ハルパーン博士のプロフィール●

音楽・音・言葉の潜在意識への作用の研究で世界的にその名を知られる心理学博士。学者であると同時に"瞑想音楽の神様"としても米国はもちろんヨーロッパ各国にその名を知られ、世界的なファンを数多く持っている。博士の音楽は鑑賞用の音楽としても高く評価されているが、博士の長年の研究のエッセンスが凝縮した"音楽の薬"としての効能も医学・心理・教育関係者の間で高い評価を受け、いろいろな分野で博士の音楽を取り入れている。カイザー・パーマネント病院をはじめ全米の一流の医療機関では、博士の音楽を薬品の代わりとして患者に与え著しい効果を上げている。

今、お申込みの方・案内書請求の方に（先着500名）サブリミナルテープ1本を無料プレゼント中!!

今、お申込みの方・案内書請求の方先着500名に、ハルパーン博士制作の心身をくつろがせ、大脳の活性化にもとてもよい、アメリカで人気のサブリミナルテープをプレゼントしています。

今なら無料試聴でき特別価格で購入できます

●MDシリーズ　●HLシリーズは一年間の会員制の頒布会方式でお届けします。お申込後、毎月各テーマ別のテープを二巻ずつ（テーマによっては二巻）お届けしていきます。お支払いは毎月テープ到着後に4,800円（送料300円）。第一回目およびそれ以降もテープ到着後5日間の無料試聴期間を設けていますので、気に入らない場合は自由に返品できます。又、途中退会も自由です。

■今回ご紹介したシリーズ以外にも、「高速学習セット」「魅力的性格シリーズ」等のシリーズがございます。詳しい案内書をご希望の方は、お電話あるいはおハガキで「案内書希望」とお申込み下さい。

〈ご注意〉●このサブリミナルテープは通常は一巻7,800円で販売されており、今回の価格は頒布会員にのみ有効な特別価格です。●サブリミナルテープは聴いた人に確実に影響を与える強力なものです。内容を告げずに第三者に無制限に聞かせるのは絶対にお避け下さい。

〈お申込みは、官製ハガキ・電話で今すぐ!!〉

住所・氏名・年令・職業・電話番号を明記の上、「□□シリーズ試聴希望」又は「案内書希望」と在記までお申込み下さい。

〒107 東京都港区南青山1-26-4
アメリカンライブラリー社 1196係
電話 03(3479)5864
（受付24時間 日・祝日も受付中）

UFO contactee 113号
一九九一年四月二五日発行　発行所　日本GAP
〒133東京都江戸川区本一色1-12-1-511　振替　東京4-35912　定価九二七円(本体九〇〇円)・送料210円

先着500名様限り、下記までお電話・おハガキで!!

サジェストロニクス・ラーニング

超高速英語学習テープ1本無料進呈!!

『短期間に英会話をマスターしたい』『ほんとうにしゃべれる英語を身につけたい』『楽しく聴けて、しかも飽きのこないテープがほしい!』――そんな方にぜひおすすめします。

BGMとして楽しんでいるだけで『自然に英語を口ずさみ始める』

●BGM感覚で聴き流しているだけで、自然に英語が身についてしまうという、ブルガリア出身のI・バルザコフ博士の手になる超高速英語学習テープ『サジェストロニクス・ラーニングテープ』がアメリカからやってきました。

●実際の効果を試せる「試聴用デモテープ」を、この広告をご覧の方、先着500名様に無料で差し上げます。今すぐお電話・おハガキでお申込み下さい。

今、ブルガリアのロザノフ博士が創始した、音楽、イメージ、リズム等々を使った画期的な高速語学学習法が、カナダ政府で公式に採用されたのを始め、世界中の注目を集めています。

そのブルガリアのロザノフ博士の研究所で語学教師を勤め、現在アメリカで高速学習法の権威として活躍中のバルザコフ博士が、英語に頭を痛めている日本人のためにブルガリアで身につけたノウハウをすべて注ぎ込んで作り上げたのが、サジェストロニクス・ラーニングテープです。

サジェストロニクス・ラーニングテープとは、モーツァルト、バッハ、ビバルディー等々のクラシック音楽に、ブルガリアで特訓をうけた加速教育ナレーションの専門家が独特の技法を用い、音楽と絶妙のハーモニーをかもし出しながら、3パターンのナレーションを吹き込んだ特殊な語学テープ。

「歌の歌詞を憶えるように自然に頭に入ってゆく」「何度聴いても飽きがこない」「BGM感覚で、心地よく苦痛なしに聴ける」というのが、このテープの特徴。子供が母親から言葉を吸収してゆくように、自然に体が英語を吸収してゆきます。

難しいテキストが一切なく、BGMとして気軽に聴ける楽しいテープとイメージイラストだけというのも、この超高速学習法の特徴です。

◀I・バルザコフ博士

デモ・テープを先着500名に無料進呈中!!

このサジェストロニクス・ラーニングテープの内容、効果を実際に聴いて確かめられるデモテープと詳しい案内書を無料でお送りします。住所・氏名・年令・電話番号・職業を明記の上、「超高速英語学習法のデモテープ希望」と左記までおハガキ・お電話で今すぐお申込み下さい。(なおデモテープのお申込みは、16才以上の方に限らせていただきます。お申込み多数の場合は先着500名様に限定させていただきますので、ご了承下さい。)

〒107　東京都港区南青山1-26-4
アメリカンライブラリー社　1195係

●お電話でのお申込みは
東京　03(3479)5864
(受付24時間　日・祭日も受付中)